

諸
旧
記
文
書

(表紙)

三番箱

伊進上

諸舊記文書

一

諸舊記文書

- 一 旧記古文書雜集
- 一 新納仲左衛門忠雄日記抄
- 一 樺山氏文書
- 一 川上久國上使附日記
- 一 加藤清風墓誌
- 一 池田右近將監宛状

一野村氏文書

一加世田大浦村長田門来由

1 一喜入家六代式部太輔久道嫡男無之故、義弘公之御四男

萬千代丸殿喜入家猶子ニ御成被成候、然共天正^(十六)六年於

泉州境早世被成候、法名湖月宗江、

一右久道萬千代丸殿猶子ニ御成候、夫より一子誕生候得

共時宗ニ成被申、時七歳ニ而夭亡、

一久道家相續之人無之候故、久道第三之弟、為時宗淨光

明寺にて雜髮、長阿弥長重と号候を、細川幽齋来薩之

時節 太守長重還俗申候而号撰津守忠續、兄久道之家

相續申候也、喜入家之譜中ニ有之、

一喜入家八代美作守忠高之二子有之、一子者早世也、二

男者大膳亮久豫後久憲と改候、嶋津彈正久慶之養子ニ

成候、右通ニ喜入家断絶之故、 太守光久公之御子外

記忠長喜入家相續、撰津介と改名、但大膳久亮有故久

慶之養子致相違本家ニ立帰、撰津介忠長之弟ニ被罷成

候、忠長事喜入家違變之後、安房久亮兄忠長之後嗣ニ

御成候、喜入家譜中ニ有、

○一 菱刈大和守重副女者相良左兵衛尉長時室也、御女所生
之女子奉嫁 兵庫頭忠平公、後離別、居于帖佐邊川候
故邊川殿云々、菱刈氏之家譜ニ詳也、

○一 嶋津圖書頭忠長落髮称紹璞、天正拾八年 龍伯公之伯
与紹璞之字其音おなし、依之号紹節、其後聚樂ニ在り、
應 秀吉公之命紹節為俗躰也、

五月雨は天の岩戸のひかり哉 紹巴

雲の絶間にはたる飛暮 紹節

一 慶長八年、圖書頭忠長再落髮ニ而称紹益と云々、

一天正六年、圖書頭忠長去鹿籠移申良、又同拾六年、去

申良賜東郷、慶長五年、轉東郷賜祁答院移宮之城、同

十一年、有居住之命移鹿兒嶋之重地、同十五年忠長死、

家臣尾辻次郎兵衛・塩田分太殉死、

一文禄年中 惟新様朝鮮江御渡海之時、於泊津船數艘御

作せ被成候得共不問合、御借船ニ而對馬迄御越、其節

敷根藤左衛門(頼元)先祖也、領分敷根之藥師堂之楠疋本を以

船を作、拾式反帆、藥師丸と名を付、於對馬 惟新様

へ右船進上可仕由被申候処、 又市郎御乘船ニ相成、
(久候)

右御褒美とシテ高五百石御書付被下置候処、藤左衛門
唐嶋之湊ニ而致破船致溺候付、御帰朝已後嶋津圖書紹
益之三男中務藤左衛門跡目被仰付、大嶋之内比賀間切

五百斛被下候処、其後依願繰替相成候、桑波田大夫并
先祖其節免(マツ)さし役致居候由、与人下役也、藥師丸の船
頭唐人の末、

一 敷根江嶋津之称号被下候ハ、光久公御代靈秀院棟欽
首之宮様御使

者京都へ被相勤候節、他家ニ而者輕相見得候由ニ而御

称号被下、夫より代々名乗候由、

一 太閤九州入之時、薩州家老辰巳伯耆守・市来出雲守都

而上方勢を手引して川内迄引入ぬ、薩州之人數殊之外

悪ミける、其後薩州家没落之後、右之兩人薩劔へ入来

れかしと存候処、辰巳ハ肥前平戸へ出奔し、市来ハ鹿

兒嶋へ来事ならず、宮之城へ一生暮しぬ、其子傳右衛

門代ニ淨光明寺門前者ニなり、傳右衛門世傳傳右衛門

門前者ニ而有之、傳右衛門子醫師成しか順仙士と成し

となり、太閤より薩州家江之書付等致所持居候由、

一 東郷家之庶流白男川名を以家号を立、関ヶ原へ白男川
弥助御供して戦死之後、段々落ふれ町人ニなり只今之
安曇家也、

2 山口駿河守直友弟

○直行
二代
内蔵之介
五郎兵衛

慶長九年五月九日来薩州為家臣、 甚九郎

五右エ門 甚五左エ門 右カ 勘左エ門
母加治木八代次郎右衛門女

三代 弥平兵衛 四代 五郎兵衛 五代 甚九郎 六代 五郎兵衛
実ハ甚九郎 母黒葛原治部女
嫡子也、

3 口上覚

乍恐申上候、私六代之先祖山口五郎兵衛直行と申者、山
口駿河守直友弟ニ而御座候、駿河守事、中納言様御心安
御在知之者ニ而御座候、家久公御意御座候、薩州遠國故、

上方筋之儀別而不案内有之候、五郎兵衛事御所望被成度
被思召之由蒙仰候、駿河守事御則答申上候者、先以御所
望被思召之段難有次第奉存候、乍然早速御受申上候儀難
仕候間、家康公へ御内意申上、於御免ハ五郎兵衛事御
家ニ差上可申候由申上候、其後 家康公へ右之趣申上候
処ニ、九州者遠國ニ而兼而 御心遣ニ被 思召候処ニ、
御心安被召遣候駿河守弟被致所望、心遣之御事ニ被思召
候間、五郎兵衛事早々薩州へ可差越候旨上意有之、慶長
九年五月九日、五郎兵衛事御當地へ下着仕、御家臣ニ罷
成候、其後至子孫も代々私亡父同氏甚九郎迄互ニ書通
仕、同人相憚候節者、折節彼家へ見廻為申事御坐候、私
事幼少之節親相果申候ニ付、今以駿河守子孫へ書通不仕
候儀無本意次第ニ存申候、駿河守子孫山口 (マ、マ) 江戸御
旗本ニ而罷居候間、向後書通仕候儀御免許被仰付被下度
奉願候、於其儀者、何そ之折目ニ者御當地産物之内輕キ
品相添書通仕度御座候、且又山口之家老山口茂右衛門与
申者之子孫于今所中へ罷居候由承申候、私共一姓之支族
ニ而御坐候、亡父代ニも書通仕、輕キ品相贈為申儀ニ御

座候間、私事も同前ニ書通仕度御坐候、御免被遊被下度奉頼候、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

月日 山口五郎兵衛

4 ○藤原姓相良氏支族之覺

- 多羅木 佐牟田 上村 稻留 犬童 愛甲
- 肥志岡 岩崎 寢田 初木 村山 立山
- 藪田 霧田 棟原 蓑毛 今村 丸目
- 丸野 春井 小垣 竹下 西橋 深水
- 鳥越 松本 薩摩瀬

5 ○榊原五郎右衛門

元来三河國へ罷居半田与申在所へ為罷居由候、参州 權現様御手ニ入候ニ付罕人仕、其後水野日向守殿へ罷出備後福山へ為参よし候、

榊原喜右衛門

親相果罕人仕、御旗本近藤登之介殿組与力ニ罷

成候、

神谷山三郎

母方之名字名乗申候、寛永十四年十一月廿一日伊勢兵部少輔貞昌取持ニ而御家ニ罷出候、御小姓相勤、其後上村平右衛門跡養子ニ被仰付、上村茂兵衛と申候、上村之知行其届式百五拾石有之、外ニ百石拜領也、

601

○ものゝぶの高き名をえて故郷に

はなの錦やきて帰るらん

さくはなの枝をつらねてこのはるハ

いつのとしまさる色かな(にも脱カ)

(いまよりは) ゆくすゑハ猶もさかへぬ花衣

はたはりひろく國はなり▽(つゝ)△

▽(東入)△

龍山

龍伯老

(本文書ハ「旧記雜錄後編三」二四三号文書ト同一文書ナルベシ)

6の2 ○とはすともあはれとは見よ都人

わかすむ山のけさのはつ雪

今朝の雪さそおもしろく候ハんと申候

山居中くとせん躰申はかりなく候

はかりをかへりみす候て申候

龍山

龍伯

机下

7の1 ○先年より山田太郎左衛門尉^{⑧方}嶋津道正申談^{⑨給候}公事之儀、

宗廣御時雖有落居、^{⑩者}▽^{⑪之}一向△御糺明不届之由歎申候

間、於口状^{⑫依}ニ不及分別候条、誓断之儀申付候處ニ、山

田方^⑬有失章倉分^⑭▽^⑮倉所分△兩所共ニ如前々、嶋津

▽^⑯道正△跡継▽^⑰島津△八郎左衛門尉亡宛行者也、

年貢諸公事無懈怠致其沙汰、永可有知行之状、如件、

大永八年八月十九

内藤新兵衛尉

光廣判

(本文書ハ「旧記雜録附録二」一一八九号文書ト同一文書ナルベシ)

7の2 一若州三方郡之内、井崎村と申處ニ九左衛門尉与申もの

御坐候、此者五代已前迄ハ嶋津を名乗申候、其後おと

ろへ申候故、二三代者三方与名乗、井崎与名乗申候、

一道正と申ハ五代已前之人、九左衛門尉先祖也、

一九左衛門尉、今程者高百石計之所を作仕百姓ニ而▽^⑱

御座△候、▽^⑲年比六十計ニ相見得候、子とも十人は

かり有之云△

(本文書ハ「旧記雜録附録二」一一九〇号文書ト同一文書ナルベシ)

右二通、久通江若狹之有司より書付為遣之由ニ而、

若狹嶋津之家譜ニ被記置候、

一寛永年間、嶋津圖書久通於江戸若狹之國之有司ニ若狹

嶋津之子孫之儀相尋被成候処、右之通書付二通久通遣

候由也、

8 一嶋津左衛門佐殿

明「朱書」「前久」

右、年久之家譜ニ近衛殿御書之内ニ有之也、明者前久

之事与相見得候、

(本文書ハ「旧記雑録後編」一八二号文書ヲ示スモノカ)

9 ○肥後山城

平次郎

(盛吉、町田久幸カ)

是より先出所不知

町田郷九郎家より養子

後本家無嗣子歸本家、

長左衛門

平右衛門

長左衛門

町田久則弟

早世故不為

家督、

(「諸氏系譜」所収ノ系図ナドト相違アリ)

10

○肥後家元祖ハ肥後守信基也、嫡流として種子嶋ニ有、肥後一清として出所不知者有、嶋津実久に與し没落して肥後國へ出奔し、一清子如法事吉田之宮浦へ忍居、嫡子恒吉之士肥後權之丞二男は宮の浦百姓ニ有、三男庄内士養子肥後と云、四男ハ郡山衆中養子ニ行、一世權之丞父子より肥後家之嫡流ニ而候得共、平次郎へ相讓候

11

重國

相州酒勾川を領ス、

忠久公御代 自是先不知、

長左衛門渋谷

太郎父カ跡を續、

東郷

薩州ニ下り東郷を領ス、

竊田

宮之城を領ス、

祁答院

竊田を領ス、

入来院

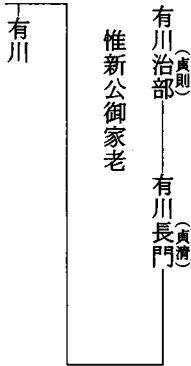
高城

高城十左衛門

12

○東郷之庶流白濱氏者、東郷之内白濱門を以家号を立、白濱氏庶流渋谷嘉納右衛門家元は入来院家来ニ而候處、入来院始 龍伯様江御縁与之時、白濱次郎左衛門尉と

13

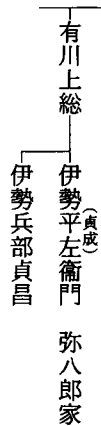


て納殿役ニ而相付參候処、龍伯様御心易被仰下被召仕、鹿兒嶋士拾二組之内番頭役相勤、夫より致立身候、光久公御代犬追物之時、嘉納右衛門家より渋谷家願出候付、嫡家恕兵衛家へ御免被仰付、私ニ茂御免被仰付可被下候由願出候、

○祁答院者當分之宮之城之北郷一雲、都之城より祁答院へ相移候付、都之城をしたひ宮之城与相改候由、

○國分新城江御隠居後御移城構とはなしに柵門ニ而被成御座度由、中納言様より御願被成、御免許之御奉書有之候へ共、無間も御病氣ニて終に御逝去被成けると也、

○義虎断絶已後、出水麓之邊宗對馬守様御領分ニ而候処、朝鮮入已後御當國へ御拜領、為返地宗對馬守様へハ筑前之八代と云處被下候也、



○有川氏者出所不知、中原氏也、長門代々、近衛様御家来伊勢因幡入道如雲、龍山様御下向之節相付下り心安候ニ付、因幡本家伊勢上総介江、有川は伊勢之小名之由被申遣伊勢家を被免、是より庶流迄名乗ける、然ニ伊勢兵部貞昌代ニ、伊勢家之末々之庶流を江戸伊勢兵庫殿へ願出候処ニ、本家二男伊勢三郎とて明智日向守ニ與し、於山崎戦死之跡無之候ニ付、右之跡ニ貞昌より養子之筋ニ系圖兵庫殿自筆相調被免けると也、右兵庫殿家は伊勢守より代々京都將軍ニ奉公致来候処、足利家没落、大坂秀頼小姓役相勤、大坂へ籠城候処落城、後京都へ居候、然ニ伊勢因幡入道如雲へ伊勢流致傳授、如雲之嫡家故貞昌より土井大炊頭殿江訴、高五百石にて兵庫殿家被召出候、貞昌ハ仕付方功者ニ而萬事物馴候故、其比迄ハ、大猷院様御代也、物毎ニ不相調

候故、折々兵部被召呼、御心安成 上様ニ茂御目見被仰付、代々家督之御禮江戸へ差越候節、圓滿院宮様江伺公之儀者伊勢家之由緒ニ依而也、伊勢家は平氏、有川氏者中原也、有川与左衛門家も當分中原氏也、出所不知也、

14 一 嶋津運久日新様を養子ニ被成、此已後男子出生ニ而も日新様ハ家督は御相續之筈ニ内室ニ契置れ候、然處男子出生いたし、出家にてへんれきとして他國被致候処、遠州新井之邊ニ而破船ニ逢、漸身すから揚り、北条家之家臣後藤何某所へ被養候に、甲斐ノノしき人ニ而、還俗候て自分婢ニ可取由にて、終に還俗せしと也、其後北条禿候後、小田原邊に居候ニ付、大猷院様御代北条家来本地ニ而皆々被召出候時分、後藤も本地之通五百石ニ而被召出候、光久公御代嶋津号御免之願申出、於伊作御吟味候処、古老之者共運久之直子出家して行ゑ不知人有之由申出候ニ付、此方ニも相知候趣有之候間、可名乗儀者勝手次第と被仰渡候、只今之嶋津

主殿殿家なり、後運久子ハ長徳軒と云ひし人也、

一大慈寺ハ本京都建仁寺末寺也、文祿年中龍雲和尚代ニ妙心寺末寺と成り、龍雲ハ関山派之出家也、新納四郎兵衛家より出家して甲州惠林寺へ参り居候処、信長攻崩して惠林寺之出家共皆々山門へ押込焼崩しける時、住持高音に、此僧薩州住遷ニ参り、甲州に何ぞ為掛僧ニ而も無之候間御助け候様ニ申候処ニ、然者山門より飛候様ニ申候、右飛下り命助り大慈寺之住持と成り、朝鮮入之時分陣僧ニ被召列候、其跡御國中寺々高減少之時、御帰依僧其上陣僧之跡故不及沙汰、于今高多ク有之候、其後志布志町人清水某与嶋津豊後殿と銀錢之口事有之、清水方ニ致一味、其事聞得悪有之候故、此國之やう成引負之國ニ者不居由ニ而京都へ登り給し也、清水へ一味の子細者、本清水寺兒ニ而龍雲琉球へ使ニ渡海之時召列参、唐物買登り身代能相成、龍雲より申上土ニ被召成候、清水源右衛門家也、

一 下(野カ)総國鳥山二萬石計之大名之浪人岩山半兵衛妹御奉公ニ出、智性院様御出生、右懐ハ陽和院様御娘様御天

15の1

亡之刻ニ而直ニ御嫡子ニ被遊候故、平女中之様ニ被召仕居候、半兵衛高三百石被下被召抱候処、半兵衛相果、金左衛門与申弟被召抱、半兵衛跡被下候處、妹御奉公ニ付金子等過分ニ持居金左衛門ニ具候様持高過分ニ相成候由、本は足利家と云よし、

一家久公御子式部(久直)太輔殿在江戸の時、いさらごへ庄内出之出家あり、式部殿御出之時佐久間頼母とて能寺若衆あり、其時約束ニ而式部殿所へ、光久公御入之時被召呼候而御目見被仰付、其後庄内へ下り神田橋甚左衛門と云者之養子被成置候、無程式部殿死去、其時奥方へ右頼母御直之御奉公願ニ存候処ニ、家中ニ者迷惑之由申出、後室より、光久公へ御申、肥後休右衛門後室へ肥後番代いたし女子考人持、其後離別ニ而西田町へ居候而妾腹へ九右衛門出生也、後江戸へ登り御挨拶坊主ニ而罷居居付と成也、

一播州揖西郡下揖保庄上村、嶋津彦兵衛剃髮仕候而宗賀与申候、父者新九郎忠之、祖父者左近将監忠長と申候、

父子二代迄及戰死候故、子孫彦兵衛儀僅二歳ニ而孤ニ相成、終ニ土民と相成申候、彦兵衛家嫡三右衛門本家相續仕候、三右衛門嫡子次郎右衛門上揖保庄龍野町へ引移住居仕候、次郎右衛門子又四郎、其子私事源兵衛と申候、男女子餘多御座候へ共早世仕、相残候分三人之内女子考人他家江嫁申候、男子考人出家仕候、末男又次郎と申候、私又次郎一所ニ罷在候、如此血脈連續仕候処、年々不幸打續零落仕候付、田島家財沽却仕候、其外持傳候刃物器物等迄不殘賣拂、諸國流浪漂泊之身と罷成申候、漸只今相残候分先祖より傳來候感状・略系圖所持仕候而、同國揖東郡嶋庄太子寺坊中ニ所縁御座候而、則太子寺領成ニ幽成鉢ニ而假栖仕候、私儀愚昧之上、殊ニ年罷寄差而一藝も無之、為下賤身恐多申上事ニ御座候得共、追日及貧窮、衰微難凌露命、此節草木と俱ニ朽果、血脈断絶可仕欤と苦心魂候、甚以悲歎沈紅涙、昼夜暮兼候、愚男又次郎儀尚以不肖成者、其上不及奉申上卑賤之我々、不肖輕候儀怖入奉存候得共、御太守様奉蒙、御憐愍之御慈悲、御召出使被為

仰付、家筋御取立被為成下候半与、我々等先祖之埋来候願家名、至子孫永々家系相續仕候様偏ニ奉希候、開一期之愁眉候事廣大之御高恩此上茂無御座、難有仕合奉存上候、

右之趣奉願候、宜敷御取成御披露被遊可被下候、誠恐誠惶頓首、

明和七年庚寅十月 播州揖東郡鰯庄太子寺領 嶋津源兵衛謹言

薩州 御役人衆中様

乍恐奉願口上

播州揖東郡鰯庄太子寺領内住居仕候嶋津源兵衛儀、私共同性^姓一族ニ而御座候、則系圖・感状所持仕候ニ付、此度御願書差上申候、同性相違無之儀ニ御座候間、御憐愍之上、家筋御立被為仰付候半と、我々所迄難有仕合奉存候、以上、

明和七庚寅十月 播州揖西郡下下揖保庄上村 權兵衛 同所同村

同所同村 八左衛門 三右衛門

薩州 御役人衆中様

16 写

一 左近將監忠長戰死之事、天文三年秋、龍野城主赤松村秀と大田城主赤松彦次郎範実不和ニ及合戦候時、於朝日山大日寺麓被為範実討死、

一新九郎忠之事、父忠長戰死之時漸十餘才、知行没収、成人之後數度之合戦依勇功而、天文廿三年旧領地頭職、

赤松政秀之執事泰輿誅伏有、此時左近与改名、永禄年中浦上之執事室津大川原宗律不礼之事有、龍野手之助勢を乞刀合す、

一 忠之之戰死之事、天文廿三年秋、大田城主範実本家へ對及合戦之時、忠之多年之不遂本意、終於十三ヶ山長子源兵衛と共に戰死、

一 忠之妻 龍野手八十四之隨一塩津新左衛門妻ニ姉妹也、二歳之幼児を懷ニ隠し、十文字之鑓を足輕ニ持せ、石隈之城よ

一 忠之妻 揖東郡大市郷相野庄官山本大次郎村岡ノ妹、二歳之幼児を懷ニ隠し、十文字之鑓を足輕ニ持せ、石隈之城よ

り領地下揖保庄村へ隠候而、百姓共地頭之所縁を重し
所之長与守立候、此時義廣之母忠之父子之討死を深く
悲しミ、年を経て系圖文書等を持、家断滅を御歎申上
候て薩州へ罷下候由申傳候、右之幼兒成長之後、嶋津
彦兵衛義廣と名乗、當時權兵衛元祖とす、

17 一台徳院様御筆色紙三枚

それさまにあひ候ハねハきかわろく心かうつかりとな
り申候、いな事かしく、

夜もすからはなし申度候、そなたニてもこなたニても
かしく、

梅も花も月もハやそれさまと哥などはなし申度候、乍
去後の世までもくかしく、

18 ○於千本嶋津修理太夫入道龍伯花見興行當座に

「在官庫」

みな人の袖ゆへけふは一本の千本に匂ふ花盛かな

瀧下藤といふ題にて

龍山

山たかミ松の木の間の瀧川にさそわれて行花の藤なミ

河邊納涼

河風の暮行まゝに柳はらこぬ秋なかす水の涼しさ

籬萩

隔なくかきねあやなし萩の花咲こそ枝そ

ほかにミたるゝ

海上月

和田のはら山の端もなく海に出てうみに入ぬる

秋の夜の月

湖水

こす浪ハそのまゝさへてしらきぬの岩をつゝめる

湖水かな

寄邊愛

鳩とりのうきねさためぬ心よりよそにうつろふ

あたらハなし

寄獣恋

篠はらやしきのきハひつゝ棹鹿の我がとつかうを

したひなくらん

旅行

かぎりなく遠くもきぬる唐衣旅のやつれに

おとろかれつゝ

山家

世のうきにかへてすみつゝ山なれハ淋しさをたに

友とこそ思ふ

19 ○ 猶以小袖十進之候、^(◎)以上、

御使札并為御音信鉄炮・甘葛送給、祝着之至^(◎ナシ)候、

将又庄内之儀、龍伯・惟新へ申候之間、何様ニも被任

吳見尤候、猶山口勘兵衛尉口上申含候間、不能具候、

恐く謹言、

(慶長四年)
十一月廿七日

家康御判

(島津忠恒)
薩摩少将殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編三」九六三号文書ト同一文書ナルベシ)

おちよとさそふ荻のうハかせ せうるり

右從瑠理御前短尺之由也、

21 ○ 越前嶋津殿忠綱之末々、水津殿 早良殿 栗尾殿 細

江殿 細路木殿 大野殿 河北殿 黒方殿

右、平田盛右衛門家蔵之書付ニ有之候故写真候、本書

ハ當清右衛門方へ相返也、^(純音)

元禄十二年未五月十六日

22 ○ 移徙祝儀のことふきとして両首堪感吟のあまり當座の

返哥にかく侍りぬ 中納言家久

住吉の神の守りと聞からに猶いく千とせ松のした蔭

大君のみきりの竹をうつしてそさかふる影は千代も限

らし ^(書入久正) 紹嘉

23 ○ 隆盛院ニ有之候 忠隆公御画像讚

汗馬功成誅不行 揚々意氣有誰論

若将武勇比千石 漢室三良輸一人

20 「在官庫」

○ 返事 いとゝさへきゆるはかりの露の身を

24 ○將軍家光公東海寺へ御成之時、江府隼落之上手子蝶又

兵衛とて境町へ有之を備上覽候、其時小堀遠州八幡之

瀧本坊伺公ス、其時輕業を出し狂哥を詠れける、右懸

物官庫にあり、

そらかくる鳥には

まさるはやくもの

蜘蛛のふるまひ見るに

つけても

東海澤庵



ちらくくと多かくを見ればさゝかきの

「ふる歌」
くうまひよりもかろきふてさき

(小堀)
宗甫(花押)

空舞よりもかろき筆

「朱ニ而」
野村氏より書付申候附紙ニ而アリ

25 坂元村

○一片平門

白石喜兵衛

片平門ぬめり川より南林寺大門口迄

右同

一水口門

永田兼右衛門

水口門ぬめり川より内の丸上之原迄

(權馬業カ)
西原村

一りやうそ門

藤崎新兵衛

右三門百姓ニ而候処、當分士ニ罷成子孫有之由、正

月之御儀式三門之右三家より相勤候也、其内坂元千

右衛門家よりも御儀式相勤候也、

26

護摩所

一愛染明王

仁王五十二代嵯峨天皇御勅命、弘法大師谷渡之藤を

以一刀三拜之由候、天皇深ク御信仰被成、其後大師

之御手ニ返り大師一生之間御信仰被成、弟子真嘉僧

正御附屬、其後真嘉之僧弟子在原業平へ附屬、靈驗

新成御本尊にて候、右之儀頼朝卿之御聞達し、彼御

本尊御求御尊敬□而候処、忠久公江御拜領ニ而御家
ニ傳來也、六月初日計落刃御祈禱御開帳有之候、

同所

○ 不動明王

右本尊ハ伊集院庄殿寺之本尊ニ而候、庄殿寺にて御
手落捨候処ニ、何方之出家とも不知、不圖來御手作
繼たるよし、右出家弘法大師と申事ニ而候、靈驗新
之故護摩所御本尊ニなされ、元朝計開帳有之候、

27 「正文國分衆宮原善右衛門所持」

- 一 百姓をあわれひ憲法たるへき事、
- 一 民之飢寒をおもひ苦脳貧富をしろへし、
- 一 屋作をけつこうする事、いにしへの賢王深く是を禁す、
- 一 治罰をうすからしめて勸賞をあつくすへき事、
- 一 民のかうさくの暇をまもつてめしつかふへき事、
- 一 君の利を本として私の利たしなむへからざる事、
- 一 民の利を先としておのれの利を次とすへき事、
- 一 ほしいまゝに民の物を取へからず、民まつしき時は君

財なく、たとへハ枯たる木の本のことし、民ハ▽^(財)君
の△財也、忽緩有へからざる也、

一人の心をやしなふを以て情とす、眷属をかありみるべ
き事、▽^(威)一威勢もつて人を竟時、其身をしたかゆれ
とも、心ハしたかはす△正直をもつて民を随ゆる時、^(心)
身命をかるんして心をそむく事あるへからざる也、^(下)
らうのと^(か)
はらの利をいふへからず、下藤の無禮をいふへから
す、

一 さんけん^(中)と讒訴とを用へからず、虚言申言を信用すへ
からざる事、

- 一 我愛するもの也といふとも科あらハ罰すへし、我^(等)
- にくむものなりといふ共君に忠あらハ賞を行へき也、
- 一家を治るほどのものは國を治めへし、たゝ民を憐むも
のをもつて君の器となすへき也、
- 一人は罵詈謔するともうけとりて是を咎むへからず、
- 一 隠蜜^(密)してはつかしき事、是をなすへからず、人の眼天
にかゝる事、
- 一 獨言なりといふとも比興のこと葉ハつかふへからず、

29 ○ 「口略之」

人の耳ハ壁につく事、

一利口①を言へからさる事、

一ふるきほうくよむへからす、人の文を置を取てこれを

見へからす、

一あしき若たう是をつかうへからさる事、

一あしき友に交るへからさる事、

以上廿ヶ条、此旨をまもりて殊②を成敗人に人と成ゆへ也、

右、義久公御譜中より写也、

(本文書ハ「旧記雜録後編一」八五七号文書ト同一文書ナルベシ)

28 一弘治三年四月廿日、貴久公陷松坂又陷北村、塞之主菱

刈權頭自殺、故蒲生氏放火城裏、去蒲生至祁答院、是

時狂哥誰人、

波やにわこゝろとまらし蒲生とのちんの匂ひに袖を

ふれなは

一嶋津③大膳被申分、色々御吟味候而、極月廿七日ニ仰出

候ハ、大膳事ハ喜入名字ニ而撰津守殿④次二男ニ可被罷成

候、知行者千五百石被遣候、屋敷者嶋津三郎右衛門殿⑤忠心・忠朝

家共ニ被下候、被申分ハ養父との儀ニ候、殊ニ彈正⑥久慶

〔殿〕死後之事ニ候間、是非沙汰可有之儀ニ而も無之

与 上意候而、兎角為御聞不被成候、

一彈正殿⑦常ハ大膳申分之外別段之儀御座候而、▽⑧彼一△

代者御削に而、下総⑨常久養子ニ嶋津三郎右衛門殿被仰付、

知行七千七百石餘被為給候、極月廿九日ニ移替ニ而候、

外ニ三千斛ハ彈正⑩御〔との〕方へ御姉様被遣候而以後之

加増ニ候間、彼跡者御削ニ付候へハ御藏入⑪御被召成候、

餘之儀者後便ニ可申入候、先風説聞召無、心元候半と

存、有増申進候、

「奥略之」
「萬治四」正月二日
嶋津圖書久通判

鎌田藏人様
人々御中

(本文書ハ「旧記雜録追録二」九一六号文書ノ抄ナルベシ)

30の1 ○牌名梅江西堂依有 九州生産島津一名也、

檀縁讚之、

長徳軒竜堂泉公居士之影讚

扶政英主 寓居相陽

活人妙用 称大醫王 梅江西堂

30の4

上包 遠山隼人佐与有、

右之御影何之時代致紛失候哉、只今無之由右口上書并讚記録記置候を、星野小兵衛見届書写申候ニ付、

長徳軒忌日八月十一日之過去帳ニ御座候、年号ハ相
知不申候、

30の2 ○武州荏原郡北品川清徳寺領岡地之事、何も彼寺へ寄進

申處也、如件、

天文十二年癸卯九月六日

嶋津右衛門尉

忠貞判

清徳寺

30の3 ○ 制札

一當寺内諸役免許事、

一棟別已下不可申付事、

一竹木不可切事、

以上

右定置處也、若於違犯輩者、可為罪科状如件、

天文九年庚子卯月十四日 遠山判

一長徳軒者小田原北條之家の士之由申傳候、

一長徳軒之儀、嶋津名字之人と 權現様被聞召及候故、

諸大夫ニ被仰付、御小姓ニ被召仕候由、此段者最前より出合為申旨承及候間、委細之 候、清徳

寺領岡地、嶋津右衛門尉忠貞寄進候、此證文ヲ差出候

付 權現様より御朱印被成下候、然處ニ、右段内々

大猷院様東海寺を御建被成候ニ付、御返地知行拾斛被下置、于今清徳寺格護 仕置候、

一長徳軒御影之讚ニ付、考候得ハ、小田原居住之儀無別

条儀と存候、右清徳寺へ寄進地之證文之年号御考合候

様ニと存候、

一梅江西堂者薩州之僧ニ而御座候由、鎌倉之建長寺末寺

ニて于今東海寺ニ無構罷居候、為差槽那も無之貧家之
躰ニ御座候由承及候、梅江西堂之儀者、其元ニ而御尋
候ハ、相知可申と存候、已上、

三月十五日「本書江戸御家老座ニ(久富カ)又右衛門
有之候を写なり」

鳴津出雲殿(久風カ) 同市正殿(忠殿)

同(久馮カ) 同帶刀殿(久元)

町田勘解由殿(忠典) 肝付主殿(久兼)

31 ○一谷山薬師寺正八幡は浪人より頼置候由、木之下村百
姓より支配之由也、

但秀頼と申傳候由、右頼置候而當分之木之下村へ差
越、百姓所へ借宅居共被相究候由、其時分より右
八幡へハ高四拾石相付居候得共、其後依訳御物ニ
相成候由當任咄ニ而候、

32 寶永七年庚寅閏八月八日、肝付八郎(經兼)右衛門より御番御
免之願ニ付差上候書物之内拔書、

一私先祖善男少将より八代之孫伴兵衛兼と申者、始而肝

付之郡八ヶ外城を領地仕、正應年号より正中之比迄御
訴等之儀鎌倉ニ申上候、私より九代之祖三郎四郎兼久
事ハ、武久公より元服被遊被下候、御家之御字拜領仕、
私迄元服被遊被下難有仕合奉存候、

一七代之祖河内守入道省鈞妻者 日新公御嫡女ニ而、其
後出生之男左馬頭良兼と申候、
(兼統)

一右良兼妻者伊東三位殿姉ニ而候、良兼男子無之候ニ付、

良兼弟九郎智養子被仰付、後左馬頭兼道と申候、然處
ニ肝付之儀阿多一所ニ御繰替被仰付相勤居候処、肥後
江在番被仰付差越候内、在番之入目等阿多より續大形

有之候ニ付、兼道相憤夫婦不和ニ罷成候故、肥後より
罷歸候節、龍伯様被仰下候者、不中直阿多へ參儀儀
先無用ニ可致由候て被召留置、兼道へも女房へも堪忍
分少く被下、中直仕候已後本地可被仰付由ニて残り高
御預り罷成候処ニ、右不和故兼道妻母同前ニ伊東方へ

引取被申候、其後兼道事稅所助十郎娘ニ嫁、出生之男
半十郎(兼孝)ニ而候処、兼道儀関ヶ原へ御供ニ而戦死仕候、
右之通ニ候故、半十郎事小高之躰ニ而罷居候得共、相

應之明所無御座由ニテ、先為堪忍分御高百解拜領被仰付置候、半十郎事 家久公琉球國王被召列御參府之節御供仕、於(愛カ)から之嶋乗船破船いたし、拾九才ニ而相果候処、子共無之候ニ付、新納四郎左衛門入道慶雲嫡子を養子ニ仕候者、私曾祖父甚右衛門ニ而御座候、右甚右衛門代御訴訟申上候処、上方諸御續等有之候ニ付、右預高不被返下、先堪忍之御高百斛拜領為被仰付迄ニ而御座候、一所をも格護不仕儀、私迄五代ニ而御座候、一拾代兼元二男兼政事者、頼姪長左衛門元祖ニ而御座候、忠國公より御家御三男ニ被遊可被下旨被仰下候、私御家之御字御代且又御役迄被下候得共、御字御役之儀者其節差上為申由、依之長左衛門家只今迄御三男之御取持ニ被遊被下候、拾二代河内守兼忠二男越前守兼光事者、肝付主殿殿元祖ニ而御座候、貴久公御簾中者私より八代之祖河内守兼興女子ニ而御座候、右之通段々由緒も御座候間、祖父甚右衛門亡父甚兵衛私ニも、時節を以御訴訟可申上旨存罷在事候、然者御番之儀者、先祖已来一所を領來候筋目故御番不申処、亡父甚兵衛事

33 ○ 「口略」

為物馴願申出相勉為申事ニ候、家筋之儀者右之通ニ而御座候間、相しらへ候上、何分ニ茂被仰付度奉存候、且又 將軍家五攝家従も 御先祖様被下置候御文書其外敷通格護仕候間、於御用者差出可申候、以上、
(宝永七年)
 寅閏八月八日 肝付八郎右衛門(孫兼)

比志嶋(箱男)藤右衛門元祖滿家左衛門尉重賢者、村上三郎左衛門尉源頼重志田三郎先生 義憲之三男當國互配流之内、滿家之郡司大藏永平之嫡女ニ相嫁重賢を致出生、頼重ハ本國如信州帰國候、永平男子無之候ニ付、重賢外祖父永平之所領を譲ヲ受、郡司一跡を相續仕、所知之滿家を以重賢一代家号ニ仕候趣、系圖ニ相見得申候、

一重賢男子五人、嫡子比志嶋太郎祐範、二男西侯弥三郎盛忠、三男川田右衛門尉盛資、四男前田四郎榮秀、五男邊牟木又五郎慶栄と申候、

一右二男以下五男迄ハ滿家院中分地之在名ヲ以銘々家号ニ仕候、嫡子祐範事も滿家之内比志嶋ニ居住仕、在名

を以比志嶋と名乗申候、

右之通、村上頼重之直子重賢事、母方大藏姓之讓ヲ受、

満家院郡司職家致連續候得共、実父方源姓ニ相改両家

兼帯ニ而、系圖之儀者頼重一流ニ系り来申候、然者正

保四年於王子村犬追物、家光公江被備 台覽候時、

右故ヲ以藤右衛門先祖比志嶋左京事射手之人數ニ而、

村上左京与名乗申候、右之通候得者、此節家号を村上

と改申候而も何ぞ窺申事御座有間數候、且又村上嫡家

何所ニ御座候哉、私共不及承候、若有之候而茂、頼重

一流之儀ニ候得者故障有之間數候、乍然村上・比志嶋

両号を相考申候ニ、比志嶋を名乗り罷居候方増ニ而候、

其故は、村上之儀者重賢実父方家号ニ而、只今血筋有

之事候、尤重賢已来犬追物手組之外村上与名乗り候文

書等も無之候、比志嶋名字之儀者、傳來之所領を以爲

召付家号ニ而、代々比志嶋与名乗、禁裏大番并筑前箱

崎異賊警固番等相勤、將軍家并執權之御判物・御家代

之御證判致頂戴、満家院安堵之文書等も皆以御宛書

比志嶋と有之候、為差立家号ニ而御座候処、村上名字

ニ相改申儀共其詮然与不相立訳ニ候得者、如何之儀ニ

御座候間、比志嶋ニ而罷居候方、旁以増ニ而御座候半

と吟味仕候、然共此段御吟味次第奉存候、以上、

寶永五年子三月十七日

市来宗左衛門

肥後仁右衛門

田中五右衛門

34 「口略ス」

一 左馬助義興嫡子監物範員、其子孫右衛門義時、嫡子左

京範武、其子孫太郎義頼ニ而候、此時將軍家并御家之

御文書等數通格護仕、于今一所持之列ニ而代々御直元

服被仰付候家筋ニ而候、

一 比志嶋善八家筋者、比志嶋九代河内守義重二男美濃守

義方、美濃守義住、此家筋加治木罷居候、右義住之弟

宮内少輔國真善八家之元祖ニ而御座候得共、善八家者

比志嶋家二男之又二男家ニ而候、

一 比志嶋孫太郎家者、孫太郎祖父孫右衛門事、家久公

御直元服被仰付、寛永年中致家督候得共、進上物等不

相知候、右孫右衛門嫡子左京、其子孫太郎事も御直元服被仰付、兩人共家督不致内相果候ニ付、御目見進上物然与不相知候事、

本朱書、右孫太郎家別相記候、一所持ニ而代々御直元服被仰付、三種二荷進上也、

源姓比志嶋氏庶流略系図

九代 義重
二男ナリ
河内守 義方
美濃守 義任
美濃守

國守 美濃守
國親 美濃守
國詮 掃部介 国親二男也、
義弘公國老 薩州吉田地頭

左近 加治木江住ス、 久右エ門 休右エ門
同

藏人 鹿兒嶋江出ル、 小太夫 源左衛門
納殿役 御馬廻

國真 宮内少輔入道咲翁 市来地頭

本書ニ 右國真義住ノ二男之筋ニ系有之候得共、官庫證書之

内ニ國真ハ義住ノ弟とあり、然れハ義之ニ男ニ系コレアルハ誤欵、

國貞 紀伊守 義久公 高岡地頭

國隆 宮内少輔 家久公國老 高岡地頭 依有不忠之志、
寛永六年流罪于種子嶋、其後賜自殺彼地死云云、爰家断絶、異本ニハ寛永十五年十月晦日死とあり、

國安 内記
与父同居久嶋江
遠流、其後御免
ニ而義之ニ男ニ
立らる、

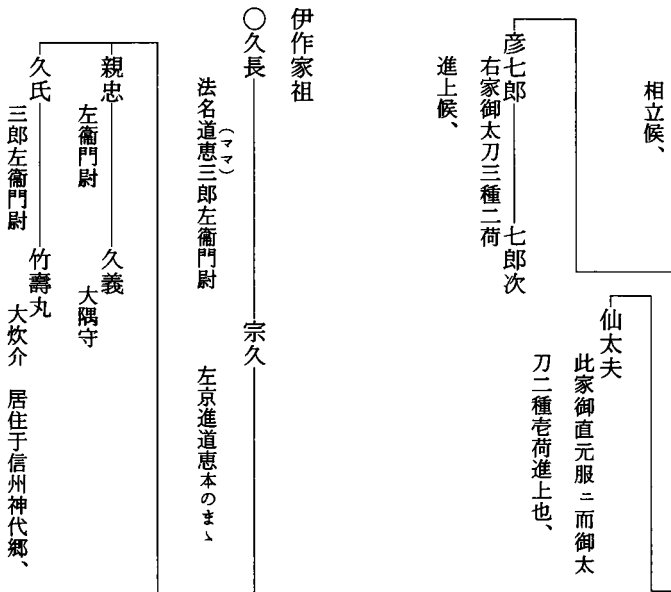
義之 監物

比志嶋家嫡家ニ而候処、家久公御意を以國隆自殺以後國真之跡養子被仰付、新地五百石被下候、高城・甕嶋地頭吟味役相勤、

國治 主膳 実ハ鎌田監物二男也、 光久公御用人

國安 内記 國隆子 御
免以後義之ニ男ニ
善八 主右衛門
吟味役 新番

36 伊作家祖



37 ○しまつの三郎さへもんかこのたひいとまの事、ふつと

かなふましく候、このむねをそむきて、なをくも申、
又おしてもくたらハ、世くしやうくかたきとなり
て、なかくめしつかふことあるへからず、このことい
つはりならハ、いせ太神くう 八まん大ほさつ きた
のゝ天神の御はつをたか氏かふるへし、

(貞和二年) 閏九月十四日

たか氏 御あり

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一四八六号文書ト同一文書ナルベシ)

38 ○種子嶋左近殿御聲故、家久公へ種子茄子之茶入進上

ニ而、大坂□へ御見せ被成候処、日本へ三ツ之茶入
之由申候、一ツハ太閤秀吉公御所持也、大坂落城之時
火ニ入候を、當將軍家御取御預被成候由ニて双見し
也、一ツハ信長所持、本能寺にて焼失也、按に本能寺
ハ本三條にありて種子嶋之妙本寺の本寺ニ而、種子嶋
僧不断居候付、其節取下りにやと也、

○三原左衛門佐指宿源中寺寺入ニ而住持と口事有之、顯
娃瑞應院へ寺入ニ而候事、

○嶋津彈正殿御家老御断ニ而後ハ宗門方迄聞しなり、六条殿肥後まで来り、薩州へ下り候半と被申越候て、如何可致哉と書付あり、肥後お長とて忍之上手あり、御家老衆參會所へは必お長を遣し、證拠に何ぞ取来れとて、山田昌巖刀紛失、彈正四拾五歳ニて死後ニ相知ル、お長事於境瀬戸磯ニ逢候、

○御家二代忠時公御舎兄ニ厨入道とて二三代相見得候、是も越前家古系圖之内ニあり、厨入道ハ伊勢國須賀御庄波出御厨を領せし由相見得候へ共、子孫不知候、

急度申入候、仍今度陳中大將⑩後豊後守殿・下野守殿⑩江被仰付候、各談合衆ニ被相談⑩宛▽⑩候間、諸△事此方へ不及被得御意可被「本のまゝ」殊ニ御病中之儀⑩ナシ「ニ」候、遠方へ被申越候而者、延引ニ可罷成候由、以児玉筑後守⑩曲被仰出候、委細甲斐掃部⑩重則介・有馬左近将監⑩純実「江」申合候間、被聞召達、其心得尤候、恐々謹言、

喜入撰津守殿⑩忠政
正月九日⑩寛永十五年

北郷佐渡守殿⑩久國
渋谷石見守殿⑩重則

山田民部少輔殿⑩有光 三原佐衛門佐殿⑩重則 新納加賀守殿⑩忠徳
（本文書ハ「旧記雜録後編五」一七二号文書ト同一文書ナルベシ）

40 ○急度申入候、仍今度⑩而軍衆都合式萬程之御賦ニ而候⑩之処、皆々心次第ニ大勢召列候故、軍勢⑩衆・水主合三萬程⑩手も可有之由、賦衆大方かんかへニ而被申候、米之儀五⑩も徳千石御座候、⑩マ人数一月之兵粮充候、其内はや廿日⑩之間分相渡候、⑩マされ可申者、人数被相残候欵、肥前・肥後などへ御借用欵、御沙汰可有由物奉行被申候、承候而就其日向庄内肝付衆根占など之衆者可召留、餘り⑩者残シ被召大勢被召列候衆ヲ残シ置、御談合尤ニ候、恐惶謹言、⑩者可有御沙汰由

正月十八日⑩寛永十五年 ▽⑩久國△

豊後守様 喜入撰津守様 北郷佐渡守様
渋谷石見守様 山田民部少輔様 新納加賀守様
人々御中⑩島津久實

41 ○ 覚
一楯之板式三千枚

長四尺四五寸

厚式(寸脱カ)ノ内外

は、三尺四五寸

何(本のまゝ)にても

正月十四日

右者、松平伊豆守殿より御書出候、長崎(信綱)ニ而御用之(被調候)

楯之板此寸尺ニ而候、数(者)成次第可被相調候、急用

〔候事〕候間、不削共不苦之由候、其心得尤候、▽

ⓧ以上△

〔寛永十五年〕正月十八日

川上左近将監(久因)

出水噯衆中

〔本末〕

正文日高八左衛門笥藏也、銘々證文有之、同案也、藤井

助四郎文脉製候所奥ニ書記ス、

42 (本文書ハ二〇二号文書ト同文ニツキ省略ス)

43

○大隅(ナシ)〔之〕國之内國府之城、追手裏取建門、城内ニ御

番屋、少々番之者計差置、山下へ構屋敷、薩摩守(被)と有

之候様ニ被仕度▽○之由△、被差上繪圖候、右之趣達

上聞候之処、可被申付旨被(之)仰出候、可被得御意候、
恐々謹言、

寛永十三子

三月十四日

堀田加賀守 正成判

阿部豊後守 正秋判

酒井讚岐守 忠勝判

土井大炊頭 利勝判

薩摩 中納言殿

人之御中

(本文書ハ「旧記雜録後編五」九二一号文書ト同一文書ナルベシ)

44 ○

覚

大隅國之内國府之城、追手裏御門をたて、城内ニ番屋

をつくり、番之者少々差置、山下ニ屋敷をかまへ、薩

摩守有之〔候〕様仕寄候趣申上候処、右之通可申付之

旨御奉書之趣長奉存候、以上、

〔寛永三年〕

三月

嶋津下野守(久元)

伊勢兵部少輔(貞昌)

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」九二二号文書・「同附録二」四七九号文書ト同一文書ナルベシ)

45 ○先年禁中築地永井伊賀守申付候代銀、從御藏取遣相渡候、清帳依出来、江戸被差遣候処、先例之通五万斛以上割付可有觸旨申来候間、高卷万石ニ付而銀卷貫目五拾式匁式分四厘四毛宛積、江戸藏方御金奉行へ當十二月中可被相納候、以上、

十月朔日
戸田越前守 (忠昌)

(島津光久)
松平大隅守殿

46 ● 進上

角石 百本

内閣 おもて三尺より式^(①尺)七寸之内長、六尺五寸六寸六尺之^(②)

以上

右之石江戸ニ而あかり申候、以上、

「寛永六」

三月十九日

土井大炊頭印

(③花押)

(島津家久)
松平薩摩守殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」二二八号文書ト同一文書ナルベシ)

47 ○御進上之石請取候事、

合百本者 角石大小有、

右受取申「候」^(④請) 宛実正也、仍如件、

▽◎寛永六年

三月廿六日

石野六左衛門印 (廣吉)

天野麦右衛門印 (重勝)

駒井次郎左衛門印 (昌保カ)

池田圖書印 (致長)

森川金右衛門印 (氏恒)

久永源兵衛印 (重勝カ)

(島津家久)
松平薩摩守殿内

伊勢兵部少輔殿 (貞昌)

▽◎角石御進上請取△

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」二二九号文書ト同一文書ナルベシ)

48 ○御札致拜見候、嶋津飛彈守遺領実子萬吉為幼稚之間、

嶋津主膳子又吉相續被 仰付、萬吉及拾五才ハ、無相

「違讓渡候様願置候、右之通不相違(◎善)候様」被仰出候▽
 ◎様与之△儀承届候、依之被差越(◎ナシ)候、使者、入念候(◎可連)
 段及上聞候、恐惶謹言、

「延宝四」
 十月八日

土屋但馬守 数直
 久世大和守 廣之
 稻葉美濃守 正則

〔島津光久〕
 松平大隅守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄後編一」一七〇〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

○大隅守逝去之儀達 上聞候之處、心底之程察思召候、
 仍為香奠銀子五百枚被遣候、御意之趣能勢小十郎(◎ナシ)
 可〔被〕述候間、不能詳候、恐々謹言、

「寛永十五」
 三月十一日

阿部豊後守(◎秋) 忠永
 酒井讚岐守 忠勝
 土井大炊守(◎頭) 勝利

〔島津光久〕
 松平薩摩守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄後編五」一二八八号文書ト同一文書ナルベシ〕

○長々所劳如何、無心許候、及寒氣候間、能々保養專一(◎ナシ)
 候、依之為見廻新庄右近差遣候刻、鷹(◎直綱)、并(◎之)、鷹(◎之)、鷹(◎之)、鷹(◎之)相送候、
 猶土井大炊頭可〔被〕述候、謹言、
 (寛永十四年)
 十月廿九日 家光

薩摩 (家久)
 中納言殿

〔本文書ハ「旧記雜錄後編五」二一〇〇号文書・「同附録」三三四六号文書ト同一文書ナルベシ〕

▽ ◎以上 △

○一筆致啓上候、然者 相國様如當春御寸白差出、御煩(◎指)
 敷御坐候、御灸なと被遊、近日者一段被為得御快氣候、
 就其各無御心元思召、若御參可有之乎与被(◎為)思召、左
 様之儀必無用之旨被仰出付而、以書状申達候、委細者(◎從)

伊勢兵部少可被申上候間、不能詳候、恐惶謹言、
 「寛永十四」
 八月三日 土井大炊頭 利勝

家久様
 人々御中

〔本文書ハ「旧記雜錄後編五」二一〇七号文書ト同一文書ナルベシ〕

猶以是ハ貴殿迄内乗候、大坂ニ大隅殿舟有之候、
ニ付而者、右近殿乗被申候様ニ被申越、可然存
候、以上、

昨朝者種々得御意候、仍内々申候、松平大隅〔守〕殿
へ御上使之儀、新庄右近殿昨日被仰付、御内書并御鷹
之竊迄被遣候、右近方今朝未明ニ被罷立候、併路次ニ
而緩々被參候、此由薩摩守殿へ可被申達候、恐々
謹言、

〔寛永十四年〕
霜月朔日

伊勢兵部様 参

忠勝〔花押〕
酒井讃岐守 忠勝

〔本文書ハ「旧記雜録後編五」九五・一・二一〇五号文書ト同一文書ナルベシ〕

猶以今度 將軍様御袍瘡、薩摩守殿無御心元可被
思召候欵為御見廻使者者無用之由被仰出候得共、
薩摩守殿御事ハ以使札被仰上可然候、以上、
一筆申入候、先刻者從又三郎殿為御使御出之由候、然
者 將軍様御袍瘡〔ニ〕付 又三郎殿毎日兩御城江御登

城之由承候、御足も未御不自由ニ候間、為御使貴殿日
一度宛御年寄衆へ被仰入尤候、先度又三郎殿兩御城
江御登城之様子迄も、御序御座候而申上候、將又先日
又三郎殿為御進上之蘇鉄御機嫌〔能〕御坐候て、御満足
之通可申入候旨御座候、右之段可預御心得候、蘇鉄一
段御意ニ入、御自身被成御覽為御植、残所無之御仕合、
御座候、恐々謹言、

〔寛永六〕
閏二月二日 利勝〔花押〕

伊勢兵部少殿 土 大炊頭

〔本文書ハ「旧記雜録後編五」二二五号文書ト同一文書ナルベシ〕

印判可有御免候、以上、

○一筆申入候、然者去十一日之昼、御本丸火事出来、御
殿主計残〔り〕悉焼失仕候、更共 上様姫君様御機嫌能、
其上名物之御道具共不残出申、下々迄無事御座候、
其元へもはや疾相聞〔得〕可申候へ共、如此候、拙者
儀、其比御暇申、在所古河へ參候処、右之火事ニ付
驚、去十二日夜過江戸へ罷通候、随而爰元ニ被相詰

候大名衆より、當座ハ御夜物御寝卷之様成物ニツ三ッ

五ッもたうけニ上り申之由承(申)候、薩摩殿(成)より兎

角御作事之時分、御進物御用意各聞合可然存(申)候、

路次御無事ニ御帰國珍重存候、恐惶謹言、

八月十七日

土井大炊頭

利勝判

伊勢(貞直)
いせ兵部殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編」六五〇号文書ト同一文書ナルベシ)

55 ○一書令啓上候、今日者陸奥守様於御前御仕合能御坐候

而、目出度奉存候、先刻者御尋之由、過分至極ニ候、

随而可然者無御座候得共、栗毛馬疋御小姓衆ニ御の

せ候様ニと存(候)進上仕候、能様御披露被憑候、恐

惶謹言、

六月二日

重信(花押)

伊勢兵部少輔殿

安藤對馬守

(本文書ハ「旧記雜錄附錄」二四四五号文書ト同一文書ナルベシ)

56

○松平大隅守殿二歳之息女、彼母儀共、御國許へ被引越

度之由、御願之通御老中被達 上聞候処、心次第國元

へ可遣旨被 仰出候、被得其意勝手次第御引越(被成)

候様尤(奉)存候、右之趣大隅守殿へ其方より可被相達

候、恐々謹言、

六月十八日

伊澤隼人正

正信判

瀧川長門守

利貞判

北条右近太夫

氏利判

本多美濃守

忠就判

伊勢兵部殿

(本文書ハ「旧記雜錄追録」九七一・九七二号文書ト同一文書ナルベシ)

57

○就御用之儀(ニ)為御使者伊勢兵部少輔殿御越被成候、御

口上之通一々奉得其意候、仍未御子様無御座候(付)て、

御養子之事被仰下候、先年御下向之時分茂被仰聞候間、

今以無忘却候、重而兵部少輔殿ニ被仰下候趣、弥其旨

奉存候、大御所様十月時分ハ御下向可被成候条、

將軍様御一所ニ奉得 上意、様子山口迄啓上、仕之段、
伊勢兵部少輔殿并山口殿より之御使者ニ申合候、御下
向之時分迄ハ兵部少輔殿登留如何ニ奉存候間、先、帰
宅可然之由申談候、爰元之様躰、委曲兵部少輔殿可為
言上候間、不能一二候、恐惶謹言、

「慶長十七年」

八月八日

正信判
本多佐渡守

羽柴陸奥守様
貴報

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」九三三号文書ト同一文書ナルベシ)

▽◎追而申入候、此書状共御見分被成、何もへ可被遣
候、以上△

急度申入候、仍大坂之儀御無事ニ相濟候間、何方まで
御出船候共、早々御帰國可有旨 御意ニ御座候間、其
御心得候而、御國元へ御下可被成候、恐々謹言、

「慶長十九年」

十二月廿一日

本多上野介 正純
山口駿河守 直友

鳴津陸奥守殿
(家久)

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一一二二号文書ト同一文書ナルベシ)

猶以山口駿河守殿より爰元之様躰委「曲」可被申
上候間、可被為得其意候、以上、

今度陸奥守殿尼崎迄御上着被成之由蒙仰候、遠路之所
ニ存候より早々御上洛、御造作御苦勞書中ニ難申謝候、

將又如示預候、大坂之儀早速落着仕、無是非躰ニ而御
座候、委細▽◎面拜△ニ可奉得御意候条、此等之趣宜

御披露所仰候、恐々謹言、

「慶長二十年」

六月二日

本多佐渡守
正信

伊勢兵部少輔殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一一二五六号文書ト同一文書ナルベシ)

60 ○大隅守殿江御鷹之竊被遣候間請取候、留守居一人今

七「日」時分▽◎私宅江可參候、以上△
「本のまゝ」

十一月四日

久世廣之 大和

松平大隅守殿
(島津光久)

留守居中

〔本文書ハ「旧記雜錄追録一」一三三二号文書・「同附録二」一一二七号文書ト同一文書ナルベシ〕

61 ○明十四日之昼、於西丸御茶可給之旨被仰出候、^{◎之}間、其御心得候て可有御登城候、恐々謹言、

〔寛永七年カ〕
九月十三日
森川出羽守 宗俊
青山大藏少輔 幸成
永井信濃守 尚政
土井大炊頭 利勝

〔島津家久〕
薩摩中納言殿

人々御中

〔本文書ハ「旧記雜錄後編五」三二二号文書ト同一文書ナルベシ〕

62 覚

○旧冬申進候様十一月廿三日より之御奉書披見と御座候

ニ付、御并可被承^{◎合}之由留守居〔衆〕^{◎ナシ}江申渡置候処、
去月廿五日、伊勢十兵衛所へ諸留守居参會之節、松平
陸奥守殿・松平土佐守殿・藤堂和泉守殿▽◎松平長門
守殿△松平淡路守殿・有馬中務太輔殿留守居へ承合候

得ハ、去冬より何茂并ニ披見書ニ御改被成之由候、

御城坊主山田清葛江茂承合候処、御右筆爰右之通被
申之由候、為御納得如此御坐候、以上、

天和三年^{◎亥}
四月四日
北郷惣二郎^{〔忠昭〕}

鳴津圖書殿 鳴津中務殿 鳴津大守殿^{〔忠守〕}
鳴津帶刀殿 鳴津甲斐殿 新納又左衛門殿^{〔久丁〕}
町田勘解由殿 肝付主殿殿^{〔久兼〕}

〔本文書ハ「旧記雜錄追録一」一八五七号文書ト同一文書ナルベシ〕

63 ○私儀数年筋氣ニて、次第^{◎二}行歩不自由、罷成、月次之御

禮をも不申上迷惑奉存候、其上今年七拾二才罷成候、
依之隠居之儀奉願候、同名薩摩守ニ家督相續被仰付被
下度^{〔候者〕}、難有可奉存候、不苦思召候ハ、何分ニ茂御取
成之儀奉願候、以上、

〔貞享四〕
七月六日
松平大隅守 光久印
筋氣〔三而〕手振候、而用印形
申候、被成御免可被下候、

大久保加賀守殿 阿部豊後守殿 戸田山城守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄追録」一〇六三・一〇六六号文書ト同一文書ナルベシ〕

64 ○御用之儀候間、明廿七日四時同姓薩摩守〔殿〕同道、登

城可被有之候、恐惶謹言、

〔貞享四〕

七月廿六日

忠昌

△松平大隅守殿

戸田山城守

忠昌

〔本文書ハ「旧記雜錄追録」一〇六四号文書ト同一文書ナルベシ〕

65 口上之覚

御自分儀御持病不快候者、嶋津式部少輔名代可被差出

〔久壽〕

候、以上、

〔貞享四〕

七月廿六日

〔本文書ハ「旧記雜錄追録」一〇六五号文書ト同一文書ナルベシ〕

66 ▼◎以上△

先刻者 將軍様江きんちく之火繩廿五筋御進上被成候、

具披露仕候処、不成大形御機嫌ニ被思召〔候〕段拙者方

〔方〕

〔ナシ〕

〔從〕

相心得可申入之旨御意〔御座候〕、尚以貴面可得尊意候

間、不能一二候、恐惶謹言、

〔元和六〕

十月十一日

忠世

酒井雅樂頭

△松平薩摩守殿

人々御中

忠世

〔本文書ハ「旧記雜錄後編四」一七〇四・一七〇五号文書ト同一文書ナルベシ〕

67

○惟新所勞之由、無心元候、能々保養簡要ニ候、猶本多

上野介可申候、謹言、

元和四閏二月廿五日 秀忠御判

松平薩摩守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄後編四」一四九一号文書ト同一文書ナルベシ〕

68

○御札致拜見候、外料慶祐當月廿日其地〔致着〕、則腫物

〔割〕

療治有之由承届候、最前久志本式部被差遣之、其上又

〔外科罷越〕

於京都可然下料罷成候様ニと、板倉周防守迄相達候

〔ナシ〕

〔候〕

〔世〕

〔三〕付、慶祐下りも重畳忝之由、得御意存候、被入念

蒙仰之趣被達 上聞候、恐惶謹言、

〔可〕

〔寛永十三〕
五月廿九日

阿部豊後守
忠秋

松平伊豆守
信綱

酒井讚岐守
忠勝

土井大炊守
利勝

薩摩

中納言殿

貴報

〔本文書ハ「旧記雜錄後編五」九二五号文書ト同一文書ナルベシ〕

69

○御札令拜見候、嶋津新八郎御目見之儀、同氏薩摩守願〔久鷹〕之通御前相濟、七月廿八日首尾能御禮申上忝之由得其〔好〕意候、紙面通各申談及言上候、恐々謹言、

〔寛永十三年〕
九月廿二日

稲葉美濃守

正則

松平大隅守殿〔島津光久〕

〔本文書ハ「旧記雜錄追録一」一六九二号文書ト同一文書ナルベシ〕

70 濃州・勢州・尾州河々御普請御手傳被仰付候間、可被存其趣候、此節不及參府候、恐々謹言、

〔宝曆三年〕

十二月廿五日

西尾隱岐守〔尚〕

忠昌判

松平右近將監

武元判

本多伯耆守

正珍判

酒井左衛門尉

忠寄判

堀田相模守

正亮判

松平薩摩守殿〔島津重年〕

〔本文書ハ「旧記雜錄追録五」一三三三二号文書ト同一文書ナルベシ〕

71 ○兵庫頭忠朗、元和五年己未二月廿二日、忠平四歳扈從于家久公、發鹿兒府三月廿四日上着於大坂、而後上京館舍于道正庵、此時家久公壽後榮賜尊詠、

ふた葉より松のよわひをおもふには

けふそ千とせの初とそみる

72 ○川上左近將監久朗、永録十一年正月廿日於馬越蒙傷、

二月三日死、三十三歳、其年孟蘭盆 貴久公渡御久辰

宅、御發句、

とけし名よ入ての後も秋の月

73 ○(寛カ)大學寺(昭カ)義照僧正隱謀露頭ニ付、

日州櫛間江御落下、野

邊氏之家をたのミ御座候処ニ、依義教公之命 忠國公

御下知ニ而於永徳寺奉誅候、其時辞世之哥、野邊氏之

文書之内ニ有之、

野邊の露今朝の朝日に消果て袖も裳も濡に濡にけり

74

鎌田出雲守政真愛權花有年、于茲或詠一首、忽然化生

一女子、權花下女亦賜一首酬ト鎌田家ノ譜中ニアリ、

政真ハ天文生ノ人、本家正清二孫加賀政重之後孫太郎

右衛門祖なり、

すかたをはよそに恥とも植置し

我には見えよ花の朝兒

返し

色かゝて咲まされともはかなさハ

只秋ことの露の朝兒

75

○御家之宿坊1往古者廻向院ニ而候節、龍伯様御石燈

院中へ御建立有之候処、蓮金院之儀 右大将頼朝公御

創業之寺院ニ而御座候処、慶長十三年 義弘公 忠恒

公御相談被遊、蓮金院之寺院并寺積三拾五石、寺家共

ニ代銀四拾貫目餘御買候間、結構ニ修覆被仰付、頼

朝公之御子孫故、御宿坊蓮金院へ御改替有之儀、蓮金

院之文書之内ニ相見得候、

○御宿坊蓮金院ニ改替被成候得共、御領國中高野山へ致

参詣者共御好を相慕、如已前廻向院ヲ為宿坊相着候、

退轉無之候処、豊臣秀頼公大坂籠城被成候節、廻向

院時之住持大坂之城江御味方申榎籠候故、其後寛永十

六年より御領國中者廻向院を宿坊ニ仕候儀、御禁止被

成候、其趣蓮金院へ御書付ヲ以被仰渡候、

○當家之宿坊従往古雖為廻向院、先年大坂江依致籠城、

嶋津家之宿坊蓮金院相定候、從當領内登山之者、他寺

江於令参詣者、自貴寺堅固ニ可有沙汰候、若違背之輩

者至當國可有其届候、為後證仍狀如件、

寛永十六年十月廿三日 鎌田治部少輔

76

(本文書ハ「旧記雜錄後編六」七〇号文書ト同一文書ナルベシ)

蓮金院

三原左衛門佐	政統判
山田民部少輔	重庸判
川上因幡守	有栄判
嶋津圖書	久國判
嶋津彈正	久通判
	久慶判

高野山廻向院自古來雖為宿坊、先年大坂陳刻、院主致籠城候之間、其已後相離宿坊候而、蓮金院分國中宿坊を相定候通、其時分之家老衆よりも被申渡候由候之条、弥以登山之衆蓮金院へ相付、廻向院へ出入之儀堅令停止候、勿論覆坊・別坊へも相着候儀、可為禁止候間、右之旨嘸之村中へ堅可被申渡候、若後日他坊へ着候由、從蓮金院於申來者、致其沙汰、曲事之段可申付候、恐々謹言、

「月日なし」

三原佐衛門佐

77

(本文書ハ「旧記雜錄後編六」七一号文書ト同一文書ナルベシ)

諸外城

地頭嘸衆中
参

鎌田治部少輔
山田民部少輔
圖書頭
彈正大弼

祁答院宮之城之儀、當時依為明城、今度之御弓箭中、妻子為^{◎可}召置、御番可仕由申上候、内々又吉との^{◎最}へ御約束有之由、承及候間、何時も御意次第可致返上候、仍證状如件、

慶長六年二月八日

圖書頭

忠長判

鎌田出雲守殿

(政近)

平田太郎左衛門殿

(増宗)

(本文書ハ「旧記雜錄後編三」一四七〇号文書ト同一文書ナルベシ)

▽⑤猶以為御心得先々申入候、三人之衆より不被聞召
内者、御他見被成間敷候、内々為御心得如此候、

以上△

一書令啓上候、然者去春之比者御使御進上候、御口状
之趣具承置候^{④(二付)}、先年^{④(歳久)}晴蓑様御知行之高、如御書付、
内々ニ而致披露候、祇答院^{④(久元)}儀者、當時野州御給之儀^{④(二)}
候間、難御申候条、東郷ヲ御給有度候旨、御内意之通
申上、左様ニ相濟候、就夫先御知行之高^{④(行)}、九百石
餘ニ而御座候^{④(致)}、其御書立 上覽候^{④(致)}、先今度三千石
被成御給、合老方^{④(本のまゝ)}ニ而、東郷御領受候様^{④(文)}▽⑤ニ而△
被仰出候、先以目出度奉存候、御支配之様子ハ▽⑤近
所△中途遠方と相分候得共、一所衆之儀者、何茂一所^{④(御)}
持切之處▽⑤を近所△中途ニ被成、其餘者菱刈・真
崎・庄内之間、可被為持之由相定候、其段ハ今度御使^{④(幸)}
三人之衆可被申達候間、不詳候、委ハ伊東二右衛門^{④(御)}
殿へ申候間、可被聞召達候、恐惶謹言、

〔寛永十年〕
六月十八日
伊勢兵部少輔 貞昌判
霜臺様

参人々御中

〔本文書ハ「旧記雜錄後編五」六二四号文書ト同一文書ナルベシ〕

79
▽⑥以上△

一書申入候、然者先年 晴蓑公御知行祇答院之儀、無
吳儀返可被遣候由、從 龍伯様堅被仰出候ニ付、度々
雖御仕候押移候、今度東郷御進之由被仰出候、先以目
出度候、老中衆より可被申達候間、早々御領地尤候、
御意之趣委細高崎伊豆守可被申達候条、不能詳候、恐
惶謹言、

〔寛永十年〕
六月十八日
伊勢兵部少輔 貞昌判
下野守 久元判
〔島津久慶〕
彈正様
人々御中

〔本文書ハ「旧記雜錄後編五」六二九号文書ト同一文書ナルベシ〕

80
○蹴鞠為門弟葛袴之事、御懇望候條々、雖有子細之儀、
別而御執心之上免許之候、着用誠以規模珍重候也、▽

⑩ 恐く謹言 △

八月十五日

鳴津左衛門尉殿

(飛鳥井)
雅孰
(教力)

81 「藏久譜中ニアリ」

○天正十九年辛卯、 太守法印龍伯公渡御 祇答院、 ▽

⑨ 賜寶刀龍啼已下 △ 丁此之時興行於和漢百鈞、

ふりも来ぬ雨をこめたるわか葉哉

⑩ 龍呼雲上名

すめる夜は月の宮こも遠からて

此末略之、連衆

珠長 器成 虎岳 紹劍 瑞岳
〔和〕〔漢〕〔和〕〔桃山〕〔漢〕〔大願寺後院〕

宗哲 篤和 宗鶴 珠翠 國貞 嘉木 利貢
〔和〕〔漢〕〔和〕〔相良式部入〕〔和〕〔和〕〔執筆〕

(本文書ハ「旧記雜錄後編二」ハ〇〇号文書ト同一文書ナルベシ)

82 新納家二代實久嫡子

○久頭

悪四郎 母肝付氏女

久頭雖為嫡子、有故不續家、去居城志布志先住肝付、其後寓居豊後佐伯、以故舍弟久臣為家督、
○久頭於佐伯生害、法諱道山玄頭、應永五年(ママ)戊子霜月廿八日、忠臣崇久頭靈、号江臨大明神、社在大慈寺志布、

忠泰

十郎 兵部太輔 越後守

應永元年己巳誕生、母佐伯氏 ○忠泰幼少為僧、

自佐伯到志布志居大慈寺、 ○應永八年、蒙太守

元久公之嚴命、還俗而号十郎忠泰、時十三歲也、

拜新恩地六十町、加之被補三侯院高城地頭職住于

三侯、文明元年己丑十二月八日死、享年八十一、

83 ○悪四郎久頭公は新納の家督たりしか共、求仁院退出の

儀者故あり、安樂に善護寺と云寺あり、此寺に招請被

申砌、小者餘多居たりけるか、庭前の花壇にかゝり

花を多〔く〕手折けるを、久頭公御覽有て立腹し給

ふ、然処に中野左衛門尉といふ人を見えて、主人の義

には餘り輕く數御氣色とて、彼花橋（五）手折取せければ御腹立尤也、御座を立んとし給ふ處に、各袂に取付留被申也、少御座有て、頓て志布志（如）の志布志（志）のことに御帰候之処に、左衛門（尉）之親對馬守（是）此由承付、人数召列如安樂被參けるに、六月坂といふ所にて被參會也、久頭公打笑給ひ、今日いつもの酒狂を「お」こそあて候へと被仰（ナシ）ければ、對馬守被申様ハ、左衛門尉緩意申之通承付候、腹を切せ申さんと存（知）參候与被申けれ者、久頭公左様にてハなし、只我に酒狂と被仰（等）て城へ帰り給ふ也、其時の内城は松尾の城也、對馬守の役所は今の性法院也、其より是を基として、内之衆もそしりをなすにより、志布志に離給ふと申傳るなり、久頭公の御母は肝付殿姫也、依之先如肝付退出也、久頭公の佐伯殿（ハ）聲也、然間肝付より佐伯（被）へ罷越滞在也、去子細（有）有て於佐伯生害なり、其後久頭公之舍弟忠臣公を新納の家督とす、此代に久頭公依成給崇、荒人神と祭（ナシ）「り」給ふ、江臨大明神是なり、今貴所之御披官大岩根宮内少輔方より御筋目之由来先年「御」尋之間、凡物語（候）▽（ナシ）

如此△申候、又者久頭公之御子十郎忠泰の事、出家に可有御成とて佐伯へ御座有しを、御屋形氏久様被聞召付、還俗候へと依仰被任上意（元）「本のまゝ」候、烏帽子名者四郎たる▽（元）へく△候得共、忠臣家督となられ候間、又むつかしくもやと候而、御思惟共候処ニ、内田十郎といふ年来の人申事ニ者、乍恐我等養育申候条、只先我等か名をは如何にと申けれハ、氏久様尤可然と被仰候而、十郎殿と申候、早竟只 氏久様（等）可為御末子之由上意にて、其より庄内三侯之内▽（ソコ）名々△六十町御給候而、三侯高城（東）五日町之衆頭ニ御定候也、是は誰もく御存知之前ニ候、万々書付たる日記の中より見出申候、御尋之間書記令進候也、

とゝめをくを見て（も）わするな筆のあと

哀なるらん（か）のちのよまでも

永正十六年九月重陽日 中野安房守歳信（花押）

新納越後守殿

參

（本文書ハ「旧記雜錄前編二」一九二一号文書ト同一文書ナルベシ）

伊地知周防守殿語書

於鹿兒嶋宗碩下向之時、隈江伊勢守匡久茂被致參上候
 処、五月八日御連哥以後御座御食を斟酌候之由、伊地
 知防州へ御尋候へハ、答曰、只今御屋形様より此義御
 尋候条、愚意之通申上候分は、新納殿御家の事ハ、兩
 嶋津と申候事無隠子細にて候、時久在京之砌、於奥方
 合戦御高名被食、夫より於京都は彼時久の事を嶋津殿
 と申ニより薩摩に聞へて、御屋形様さてハ嶋津の物領
 を被望候かと被仰候、御氣色悪候旨京都まで聞得、遮
 而御下向候而御迷惑被食候、其以後又御所卷の時、時
 久御登なくてハと京都より御書あり、其旨雖被仰候、
 時久頻に御斟酌候を、「本のまゝ」上日依蒙仰候、御在京あり、其
 時屋形様より御状に、愚息四郎をのぼせ候与あそはさ
 れ候、是より兩嶋津と御定候、守護支度を被食、此上
 は御屋形様と新納殿御しやへり有間敷候、此内御人衆
 も新納殿御内衆も同前之様ニ、此前も中野對馬守と云
 人、於御前執筆被申候、また隈江道全入道もそんし申
 され候、

85 「正文新納十郎とあり」

咲藤の花にはへるつしめかな 龍伯

「右同」

一枝の花はありともことの葉の

なさけをめてぬ春はあらしな 家久

86 ○

題補寝家譜

難矣哉、貽厥孫謀以燕翼子也、三代之後、漢唐之胤亦
 不得傳於千載、況其賢哲儒徒勇將烈士（附屬）輝文章於一世、
 震武威於當時、然相承相傳至今日者殆希也、島津家長
 大隅國土祿氏、其先出出平始、（出自平姓）文治之役平族悉殲於
 西、（海）正三位左中将惟盛之子高清、唯為僧免其死、其
 子清重晞慕清盛重盛、分析名字以為其名、鎌倉將軍頼
 家卿、以菱刈旧領祿院授清重、自此歷十七葉、（世）
 領祿寝、至重張改領吉利、今猶然矣、將管領家教書
 奉書存在其家、蘿系之傳不缺不絶、孫謀之貽嗣子之
 翼、不亦嘉乎、頃聞其裔丹波清雄、寫家系譜、證之狀、
 以為冊子、請一覽披繙之間、知其所徵、賞其繼美、

古曰、存則人亡則書祖先不可見之、對此譜則猶祖先^{④生}之日也、因題數語以為後據云爾、

元祿九年丙子三月下旬

經筵講官國子祭酒整宇林子識^(林信應)

▽⊗(花押)△

大隅國祢南侯院地頭職事

右使職、重延知行之處、死去之由申^{④之}、然者以清重法

師所補給也、但論人出來候時者、召問兩方、可有左右

也、前左衛門督殿仰旨如此、

建仁三年七月三日

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一一九六号文書ト同一文書ナルベシ)

88 ○大隅國祢南侯院地頭職事、可令存其旨

給候、謹言、

(建仁三年) 七月廿七日

嶋津左衛門殿^{(忠久)④尉}

(北条時政) 遠江守在御判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一一九七号文書ト同一文書ナルベシ)

89 ○薩州日置郡之内 一作 吉利村

惣高三千百卅七石貳斗壹升貳勺

伊集院西侯之内

百三拾六石四斗壹升貳合八勺

合三千貳百七拾三石六斗貳升三合

右分、為返地被遣候、但五斗出米納候、以員數

可遣旨、於京都石治少樣御談合相定候、若加増之

儀有之ハ、御兩殿之御意次第可致分別候、目錄ハ、

追而可為御給候、仍如件、

▽⊗文祿四年

九月三日△

本田下野入道

三清判

「年号月日不知」

伊集院右衛門太夫入道

幸侃判^(忠棟)

根占七郎殿^(重張)

90 「正文加治木曾木新助ニアリ」

○在京御辛勞之至申茂疎ニ候、仍琉球大嶋渡海之御談合、

於鹿兒嶋御座候ニ付、我等事も可參由承候処、龍伯

樣致御供罷出候、於様子者桂太郎兵衛尉可申上由申候

付、定〔而〕可遂言上候、然者諸侍出物之儀、日限
 於〔無〕相違ハ、知行を可被召上旨、御書出ヲ以被仰
 遣候、然處今度御上洛并石船作之出物、五十人程未進
 衆有之事ニ候、誠一腰を賣、知行を〔永代ニ〕うりは
 なし、御奉公を專ニ存、出物閉目申候人数も同前ニ御
 座候得ハ、御書出茂徒ニ罷成、後日之御為ニ罷成間敷
 通出合候、右之仕合奥州様被聞召候、哉与尋申候得者、
 申上候者忽ニ人をくつし申事候而、用捨致不申上通、
 出物受取衆被申候、かけおゐてハ如此可申〔候〕、無
 御存事ニ人の嘲を受候事、笑止之儀ニ存候、ケ様成
 様子貴所江可申人有間敷候間、内々為御心得令啓候、
 将又不申入事候得ハ、今度大嶋渡之御談合三日被下候
 ハ、其内 竜伯様一日ハ談義所江御振廻、一日ハ南
 林寺江御振廻ニ而候、談合衆之内慰敷・伊集院宮内少
 輔・川上式部少輔・村田刑部少輔此四人御供ニ而候、
 談義所▽◎へハ△我等も參候、〔川上〕慰敷・喜入撰
 津守・新納武入道・抱節此四人も御供ニ而終日之御
 振廻ニ而候、彼四人は如此候故、御談合ニ茂両日者不

被罷出、其外之人数もハツ時分ニ被罷出候而、日不

入前ニ御暇被申候ニ付、御談合茂はかゆきかね候、笑
 止成鉢ニ候つる、然者談義所御振廻も御書出ニ令相違

調ニ一々感を御付被成候、ケ様ニ候得ハ何之御書出も
 徒ニ罷成候、是又為御存候、猶追々可申候、恐々謹言、

陸奥守殿
 参
 惟新

〔本文書ハ「旧記雜錄後編四」一八四号文書・「同附録二」二九一号文書ト同一文
 書ナルベシ〕

91

薩摩守殿就男子誕生、為祝儀態被差越使者、殊
 太刀一腰・馬疋正到来、欣悦之至候、然者加藤肥後守

殿父子、無分別之企有之、右父子之儀者不及申、懐
 女房衆迄流罪ニ被仰付、肥後との事ハ出羽國へ被遣、

子息豊後〔守〕殿ハ飛彈國へ被遣候、誠哀成仕
 合絶言語候、就夫種々意分共有之事候、巨細帰

國之節以面可申候、謹言、

「寛永九年」 寛永九年壬申四月一日

六月五日 綱久公於江戸御誕生 家久御判

彈正大弼殿 (島津久慶)

(本文書ハ「旧記雜録後編五」五三三号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 猶以てつほう之事、よく見あわせ尤候、道具

など然々有間敷候、其心得尤候、我等事も越年之

事候、正月ハ下向可申候、近日中天久坊にて可申

候、以上、

「上」(惠利)

細川越中守殿肥後國被成御拜領、為入部近日爰元御立

候、就夫祝儀申入候間、為使者肥後江可被相越候、扱

者正月其地早々被罷立可然候、進物之儀者老中衆へ可

申遣候、其内鉄炮百丁進候間、からくり以下被入念候

様撰津守へ可有相談候、あふご・口薬入可相添候条、

何茂可然様調候而尤「上」候、其方可被召連内衆下

々ニ至而、みたりに無之様ニ能々可被仰付候、為心得

候、謹言、

「寛永九年」 十月十日

家久御判

彈正大弼殿

(本文書ハ「旧記雜録後編五」五七二号文書ト同一文書ナルベシ)

○

「以上」

從 黃門様御使吉田次郎兵衛殿被差下候ニ付、一書

令啓候、

一 昨十八日御参内御座候而、薩州様初而禁中へ被成

御参、目出度奉存候、明廿三日「於」御城御能御座

候、近日又「亦」大坂江御成之由候、如此候ハ、臆

而御隙明可為還御との取沙汰候事、

一 於其元「被成」御談合、御借銀返済之儀ニ付、諸士

「迄」知行之儀御國江被仰遣、其御返事渋谷四郎左衛

門殿・児玉筑後守殿、被罷登候而被申上、於御國茂

皆々談合被申、重々被申上候内ニ、夫婦ニ而在江戸之

衆、御賦方銀子入申候間、先此節ハ町田駿河守殿・

我等「御」兩人者從最前御供申候間、此分ニ而被召

置、其後被召寄候衆「者」女房「衆」帰國被仰付尤候

由候間、上聞候処、諸事改儀候間、ケ様可有之旨

被仰出候、〔其許夫婦之衆へ此由可被仰渡〕、委細者御

國江被仰遣候条書之帳面有之儀候間、以其趣一々可被

仰達候、誠此節者腰之刀を沽却候而成共、御用可被

立時節候間、いか様共候而、堪忍尤之由被仰渡候、

鹿兒嶋衆ニも知行上之上、刀ニ付置候金具をはつし、

可致進上之由被申上候応書立ニ而參候、一段被成御感

事候、下々少たくハ候衆も、成次第少〔々〕ツ、

成共▽◎銀子△借上可申之由、内々申候由候、誠ニ御

譜代之御國ニ而候、如此之儀感入候、〔皆々御知行之

上之儀〕、少も迷惑かり▽◎にて△無之由候、奇特千

萬之事候、

一御借銀者八千貫目餘〔ニ〕成候上、知行ニ而も漸利御

なし候而、少本銀御なし候様成御算用ニ候、心安夜を

も寝可申事ニ而無之候、諸人礎〔と〕氣を替候而、此

中朝夕汗を添候を、塩ニ而給候程之心持ニ而無之候

ハ、調ましきと存候、能々其元之衆ニも此心持を以可

被仰達候、恐惶謹言、

▽◎寛永十一年甲戌△

七月廿日

鎌田出雲守様

人々御中

伊勢兵部少輔 貞昌

〔本文書ハ「旧記雜錄後編五」七四三号文書ト同一文書ナルベシ〕

94

「濃州垂井より義弘公本田六右衛門正親江被成下候御書之写」

○

尚々出水之儀者國界之儀候間、惣別在國之人數彼

表、在番可申付▽◎候、其外△衆中氣任無之様ニ、

連々▽◎之置目△〔於〕稠〔敷〕可申付儀專一

〔ニ〕候、乍勿論貴所事ハ在番候而、諸事可申付

肝要候、將又長曾我部との事ハ▽◎惣別△人數

二千人之御賦ニ而候へ共、秀頼様為御馳走五

千人召列〔候〕、近日勢州へ着陳之由候、立花殿

事ハ千三百人之御賦之管候へ共、是も為御馳走四

千人召列〔候〕、今日爰元ニ上着之由、餘國〔ハ〕

如此候処、薩摩之仕立わつか千人之内ニ而、爰元

ヲ仕廻候事、幾度申〔候〕而も無面目次第、難載

筆紙候、▽◎兼又△從憐國為何儀も申来共、疎

忽成分別、努々有間敷候、然者中務事ハ、此方よ

り佐土原へ注進候（○ナシ）而早人数（○ナシ）當城上着候、然処（○ナシ）

出水・帖佐両役人として（○ナシ）到来無之事、更以無心元

候、（以上）、

幸便之條申越候、仍（○ナシ）上方忿劇之由、度々申下

候、定而可相届候、然者関東与京都之御弓箭ニ而候

条、尾州▽◎と濃州△之堺を隔防戦候、就夫拙（○ナシ）事も、

御奉行中任御下知、濃州垂井と申在所（○ナシ）江着陳候、當手

之人数も、伏見之城攻ニ手負死人（○ナシ）「も」多々候条、弥

無人ニ而晴（○ナシ）ケ間敷出陳、▽◎手前之迷惑さ△各推量之

外（○ナシ）「候、殊（○ナシ）」近日者内府様（○ナシ）「致」御供▽◎候

て△、東國へ下向候上方之人数、并伊井兵部少（○ナシ）「輔」

榊原式部少、東國之人数を引卒、至尾州清洲上着候由

申来候、定（○ナシ）「而」近々可被及一戦候、重々申下候様（○ナシ）

ニ、帖佐寄續衆、分限・少分限を不謂、可有心入数者（○ナシ）

可罷登事此節（○ナシ）「候、能々無油断可申付候、於委細（○ナシ）

者、旅庵可申候之間閑筆候、恐々謹言、

「慶長五年」

八月廿日

惟新御判

本田（正親）六右衛門（尉）とのへ

〔本文書ハ「旧記雜錄後編三」一一五九号文書ト同一文書ナルベシ〕

95

近衛様江御家御由緒之趣

一 御先祖忠久公御事、頼朝公御長庶子ニ而 御母堂は

丹後局と奉申候、御懷妊之節、嫡夫人平政子妬ふかく、

局を西國へ可被下候ニ相定、誕生候ハ、早速御左右可

申上旨、局潜ニ関東を御出、治承三年於摂津住吉 忠

久様御誕生被遊候、 近衛基通公御社参ニ而、 頼朝

卿之御子之由被聞召、忠久公を被成御収護京都江御婦

御撫育被成、御出生之趣鎌倉江被仰進候事、

一 承久三年六月、基通公恩免ニ依て 忠久公（姓）惟宗性御改

藤原姓御用、夫より家久公迄藤原姓御用被成候處、御

替任之節より源姓ニ被復候、

一 近衛（尚通カ）道公御子植家公より 日新様江之御書通御譜中

ニ相見得申候、

一 義久公御代天正三年十二月、前久公（種家公）御子九州諸將為

和陸御下向、翌年三月十七日鹿兒嶋江渡御、四月九日

〔本のま、〕連日大追物御興行、同十四日哥會其外之御遊興御馳走、義久様此時前久公古今御傳受被成候、七月二日御發興ニ而御帰洛被成候、

一天正十五年 太閤秀吉公九州御動座以後、 義久公

義弘公 家久公大坂・京都へ節々御上洛、近衛前久公

御子信尹公別而御懇之御事候、御互ニ御書通之趣、

御三殿様御譜中ニ被載置候、就中関ヶ原以後、御父子

様より 家康公江御家之儀御取持被成候御書通も段々

有之候、從夫御代々様引續近衛家江御懇ニ被仰通候処、

御縁中ニ而猶以御親數只今迄御通融有之候、

一文祿三年午 近衛信尹公薩州坊津江配流被成、慶長元

年申七月御帰洛被成候、

清水臺明寺鐘之銘

隅州臺明寺、是青葉風笛之貢御所、白馬龍蹄之清躑也、

巖石廻外、澗川横中、遠近仰於靈驗、縑素致於歸依、

受古鐘銘云、天慶九年之比鑄改昔日之小鐘在寺、具如

本銘、然今其勢卑少、其音不遍、送歲霜、拙及穿闕、

仍衆徒合力、万人在勸改彼古鐘、遂此大望、上通有順（頂）下度无間、于時正嘉元年丁巳冬十一月十九日庚午、作銘曰、

梵鐘高掛 韻氣无疆 夕聲傳風 曉響發霜

心池冷水 覺花飛香 邪屏收響 法鳥刷翔

聞推尖峯 眠醒家郷 感佛因縁 勸僧苦行

進音遠至 諸天降望 三明開悟 六道閉傷

大檀那當國守護代左衛門尉藤原朝臣重頼、勸進者

當山住僧阿闍梨亮弁（マヤ）

鐘雕者 藤原重房

大工 高麗行則

○就實名下之字改替、使者賀札其外種々慶喜不少候、仍

從是も太刀一腰・青銅式百足令表祝儀候、恐々謹言、

霜月十六日 日新御判

又三郎殿 御返報

「上包」 愚谷軒

又三郎殿 〓日新△

(本文書ハ「旧記雜錄附録一」八四二号文書ト同一文書ナルベシ)

98

▽◎猶々被埋候物別紙ニ被仰越候、慥披見仕候△

〔一〕出水衆中野村兵部少輔方鹿志久利大明神之神主ニ

而候処、去々年宮作有之刻、彼神領納方之沙汰候得

者、数年之取籠米八百石御座候哉、其上出銀之入與ニ

付、地頭と六ヶ敷候而、氣任ニ出水を被相廻、隈之城

之内ニ被罷在候哉、出水ヲ被召出候刻、屋敷ニうつミ

物を被仕置候ニ付、地頭以分別堀らせ被見候得者、本

尊看經道具一矢靈針を五ツ被打、矢之崎ハ御城ニ向候

哉、兵少其元へ被召寄御尋候処、去々年孫相果候間、

看經も不入事と存、為理由被申候哉、一向其あちニ

而候無之、かけく為被申儀共有之由候欵、驚存候、

惣別ヶ様成儀者、縦被對地頭悪心候共、ヶ様成かたぎ

のわろき事ハ、深々敷被仰付候ハてハと存候、定從地

頭も達而可被申上候、又境目之御城ニ矢之崎をむけ候

て被埋候間、從 上様も稱被仰出候者不叶事ニ候、當

時腹を不被仰付候共、遠嶋程ニ者御嘸可有之哉、存

寄之通者申入事ニ候、猶御談合尤候、恐惶謹言、

(寛永四年) 卯八月六日 伊勢兵部少輔 貞昌判

比志嶋宮内少輔様

喜入撰津守様

野州尊老

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」一一〇号文書ト同一文書ナルベシ)

99

尚々信長公之御状も御方へ所持候を六兵衛見候与

噂為被仕由承候、右状差而用事無之候ハ、珍書

候条致所望度候、以上、

一筆致啓達候、久尚絶音問候、漸々向寒氣候、御痛無

之候哉、承度候、我等儀も無別条罷在候間、可御心安

候、然者御所持之谷山波平行安作之小脇差并名劔之

儀、先年河野六兵衛四ヶ所被相廻候節、金藏院へ被参

候時分之日記ニ委曲有之候ニ付、御記録方いぢ、助右

衛門・田中五右衛門より見申度候間、我等より申越為

召寄候得と被申候条、大磯勘兵衛ニ而右日記之写差

100
○

覚

越、委細口上ニ申達候間、右両劔彼人江持せ可被遣
候、名劔者其節一乘院隠居為被借之由候、定而追付被
為返候半と存候、將又去々年金峯山へ参詣いたし候
刻、拙僧綴立置候間任御心安、此節差越申候条可有御
覽候、次一種不珣候得共進之申候、恐惶謹言、

十月十八日

金藏院隠居

御同宿中

一般若之劔 一柄

嶋津判官袖刀也、波平行安作

一名劔 一柄

銘重次 表不動裏毗沙門

右二柄、御用之由蒙仰候故、則属御使者指衆申上候、

以上、

十月十八日

金藏院

隠居

101

覚

一五節供并毎月之礼日ニ者可有出座事、

一學文之儀可為專要事、^(⑩候)第一國家之任置無字ニ而者、行

當事而已有之物ニ而候間、連々可有其心得候、^(⑩意)算勤之

儀も簡要不存候而不成儀ニ候間、^(⑩而)不楽時分者、ケ様

之儀為存者をも召寄可被尋聞事、

一諸士武藝嗜之為ニ、若き者共江馬弓、兵法等をも申付、^(⑩馬)

折節被見候ハ、何も懸心自可相嗜候間、内々可有其

覚悟候、犬追物稽古之儀も申付置候、是茂折々被見候

而可然事、

一大酒之儀養生之為ニ茂惡敷候間、曾而無用ニ候、小盞

ニ而ニツ、^(⑩ニツ、心)者苦間敷候、^(⑩とて)是進も毎日者可為無用候、▽

⑩不過様ニ可有其意得事、

一何方へも振舞ニ被越儀可為無用候△、肝付半兵衛宿所

其外御定寺々ハ可為格別事、^(⑩相)^(⑩各)

寛文七年七月廿六日

(本文書ハ「旧記雜錄追録」一一〇二号文書ト同一文書ナルベシ)

一 根占右近身上續立候儀被聞召及候故、いつもの分ニ而

者逼迫之躰ニ候半と思召、嶋津兵庫殿領分加治木江隠

居ニテ堪忍被仕、何方ニも罷出様ニと被仰遣候、巨

細新納(久丁)又左衛門被存候儀候、于今其首尾可被申上候、

急度可被聞召上候由被仰遣候事、

一 諸士之子共、いづれも無作法候間、万事何扁慎候様ニ

致相談可申渡候、定而此比ニ者上使も御國中ニ御着可

被成候、無作法ニ而者不可然儀候間、堅可申渡旨同前

ニ上意候事、

(寛文七年)
七月廿九日

御使

仁禮覺左衛門

○天爵靈社起請文

一 談合之時者縱尋常遣恨御座候共、其趣差捨相談可仕事、

一 談合相濟候迄者、其座不罷立、堅首尾可仕候事、

一 談合之時一人と口始申候ハ、先其趣ニ取寄、其上ニ

て遂細評相極可申候事、

一 使者被相尋候事、於無口能者、則返詞可申候、若及口能候ハ、早々遂相談返詞可仕事、

一 於諸事、某月々當番一人承候而無子細事ニ候ハ、則相濟可申事、

一 於國家ニ諸人之上、萬事入念可申候、況臈貞之沙汰仕間敷候事、

右之條々於相偽申上者、

神名

寛文三癸卯正月吉

山田弥九郎

有盛判

新納又左衛門

久仁判

諏訪左右衛門

兼利判

鎌田源左衛門

政有判

町田勘解由

久昌判

伊勢兵部

貞昭判

鎌田藏人

政直判

新納右衛門

久詮判

嶋津中務

久茂判

嶋津筑後

「本のまご」

「右者寛文三年癸卯正月十二日誓、但兵部殿在江戸判形無之、本書有評定所」

鳴津圖書

久頼判
久通判

104 ○惟新公御壽像就奉安座當院、自今以後每年為佛餉料白

銀拾枚御寄附之旨被仰付、證文狀則令受納之候、尤勤行等及後代無退轉可令執行旨可申付者也、自貴國安置不被成儀故、寺之修覆御構無之由得其意候、仍狀如件、

元禄貳己巳歲四月十日

相國寺

林光院

梵竺判

鳴津圖書殿(久竹)

鳴津中務殿(久藤)

鳴津大学殿(忠守)

(本文書ハ「旧記雜錄追録」二二一八五号文書ト同一文書ナルベシ)

105 ○嶋津兵庫頭入道惟新へ今井道與懇志之儀有之、自分之

壽像令彫刻被附與之候(之)處、貴僧(之)為道與子孫右之遺像相傳之、今以被安置林光院之旨薩摩守被承之、

為佛餉料毎年銀子拾枚遣之訖、從當家不致安置儀候得共、先祖遺像之故如斯候、勿論右之外寺之修覆旁之儀者、於當家構無之事情条、可被得其意候、仍狀如件、

元禄二年己巳三月六日

鳴津大学

(鳴津)

同 中務

(鳴津)

同 圖書

林光院

(本文書ハ「旧記雜錄追録」二二七八号文書ト同一文書ナルベシ)

106 「正文在高山瑞光寺」

○先年依京儀、寺領悉致勘落、瑞光寺事も久無祿之儀候之間、少分之地附之早、右目錄在別幅、將又此度於門派大切之一話相傳之儀、近來感悅之至候也、恐々謹言、

長月廿五日

龍伯御判

瑞光寺

「瑞光寺へ龍伯椽御參禪、其後瑞光寺江被下候御文書ニ而候」

(本文書ハ「旧記雜錄附録」二九七七号文書ト同一文書ナルベシ)

知行目録

高式拾石

内五石分従先年之不足也、

右之知行、應此中之高ニ返地被仰付早、全被成領地、

向後公役寺役^(無)緩可被相勤者也、

慶長十九年七月廿五日 三原諸右衛門尉

伊勢兵部少輔

比志嶋紀伊守

町田勝兵衛尉

瑞光寺

久幸

覚

一去五月廿一日、林池坊にて御影供御座候、於其座左衛^(三原)

門殿愚僧ニ被仰付候ハ、當春座主かこしまへ参上之砌、

大乘院善行院座主平田狩野介談合申候、星をさしたる

物を差上候由候、いか様成儀にて候ハん由被仰候、我

^(等脱カ)申候ハ、曾左様成様子無之候通申候事、

一川上^(久國)因幡守殿へ愚僧参候而為申儀共有之由被聞せ候由

被仰候条、我等申候者、其刻因幡守殿へ曾以不参候間、

為申上儀無之由、同座ニ而申候事、

一彈正殿^(久慶)へ参候而、紙張之内ニおめて調伏之出合共之由、

左衛門殿被聞由候哉被仰候間、我等存候ハ、調伏之儀

被仰、ハれらも左衛門殿御はなし候、覚因を左衛門殿

より頼被成、彈正殿を調伏申候由風聞候を、覚因聞付

被成被為笑之由、度々被仰候間、左様成儀を又雑談被

成候と承候罷居候、調伏之沙汰候儀者不及申、左衛門

殿取沙汰無之候条、其有躰左衛門殿同座ニ而申入候、

一彈正殿被仰候条我等申候ハ、左様之出合不承儀候間、

其段同座ニ而申候事、

一善行院へ愚僧振廻ニ参候時之出合も被為聞候由被仰候

条、我等申候ハ、其節善行院江振舞ニ不参候間、何そ

為申合儀無之候由、同座ニ而申候事、

一右之通ニ候処、左衛門殿被仰候ハ、座主かこしまより

罷帰候得共、右出合之通左衛門江終に不被仰聞候、不

頼母被思召候、此中も林泉坊右近なと候へハ、節々此

段物語ニ申候得共、未被聞せ候哉、座主江申候ハ今日之始ニ而候、併其段座主より不承候とても、座主かこしまより無帰中ニ書物ニ而左衛門之注進承候方御座候間、細々被聞せ候条書者不相闕由被仰候而より、出家は正直成ものかと被思候得ハ、何者ニ而も俗人をば有様不隠候由被仰候、如此出入別偽者ニ罷成、失面目迷惑無限存候事、

右之雜言一向不謂惡口ニ而候条、寺江罷居候而沙汰も可申儀ニ候得共、於其儀者聞躰之為ニも不罷成儀もや御座候半、左様ニも成立候得者、結句抱置候人を申妨候に可罷成候、惣而沙門としてハ罪有人をも救、慈悲を専ニ仕作法ニ而候処ニ、却而出家之道違ニ可罷成儀、法之外ニ存候故、兎角之子細を不申上、此度善行院平田豊前守殿を以、寺を指上候通迄上候処、御兩院を以愚坊内存之通ヲ頻に可被聞召旨、大乘院より被仰聞候哉、思外難儀候得者、とかく不申候得は、結句愚僧手前ニ別に越度之儀共御座候哉とうしろくらく可被思召候間、座中ニ而出合之通各御兩使まで此覺書懸御

目置候、以上、

(正保二年カ)

西六月十六日

文珠院

宝持院
参

「本のまゝ」
知了院
頼撰判

109
○

「口略」

一霧嶋山座主左衛門佐より虚言申越候ニ付、寺を迦レかこしまへ罷越、大乘院へ書物被出、帰寺仕間敷出合之由候事、

一左衛門佐、當分被召置候処惡候間、御相談可入候事、

一左衛門佐倅者物参之由ニ而上洛仕候刻、方境番所をくゝり候而可罷通由、物沙汰承候、笑止ニ奉存候、新参者ハ萬事ニ付而御心持一入候之事、

「末略」
海江田仲左衛門

七月十二日
平田豊前守

二階堂阿波守

高崎惣右衛門

肥後七左衛門

相良權兵衛

渋谷周防介

喜入吉兵衛

110 ○今朝辰〔之〕刻、帖佐城江從加治木切乘候之由聞候、

無是非次第〔之〕候、然者此番手仕可入候、社家之衆

中本田・日置美作守被相談〔候〕、一途〔之〕了簡憑

入之外無他候、恐々謹言、

六月廿九日

忠昌御判

肝付次郎左衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一七三八号文書ト同一文書ナルベシ)

111 ○昨日之合戦之次第、面々候動内者忠節誠無比類候、多

間三郎五郎親父母江先々可被心得候、其境番用心等万

憑入候外無他候、恐々謹言、

十月五日

忠昌御判

肝付次郎左衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一六五二号文書ト同一文書ナルベシ)

112

○昨日野頸之手仕一途〔之〕事成候、殊彼并手之事、其

日之案否之由日来申候、尤候之处、輒切落候之事喜悅

候、仍人数等一段奔走之由神妙候、於向後茂憑入候、

随其境之事堅固〔之〕用心肝要〔之〕候、恐々謹言、

七月廿六日

忠昌御判

肝付次郎左衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」七〇三・七〇五号文書ト同一文書ナルベシ)

113

○大隅國加治木之事所宛行也、但小濱六町者付長濱城

早、此外者早任左右、可致安堵之状如件、

天文十九年卯月吉日

貴久御判

肝付越前入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二六四五号文書ト同一文書ナルベシ)

114 ○川上家三代上野介三男因幡守忠村拾五代之孫川上沢右

衛門庶流川上藤之丞祖、川上弥四郎幼名千鶴丸久惟と

云、天正四年丙子誕生、久雄〔惟之〕義弘公子驥尾在于京師

之際、秀吉公家康公争雄於濃州関ヶ原、義弘公属

于 秀頼公赴戰場矣、于時久雄詠一首和哥送舍兄久通(忠)

云、

東路の草葉のうへにをく露の消て帰らん我身なりけり
終に関ヶ原にて戦死、慶長五年庚子七月十五日、享年
二拾五才、

115 ○江戸砂子 日本橋南

鹿兒嶋稻荷 久志本氏屋しきの内ニあり、
寛永年中、松平大隅守殿屋敷より勸請にて屋敷之鎮守
也、

116 ○「口略」

一有間敷儀候得共、万(通久)一志摩どの并子と孫と相傳仕候儀
承候共、志摩殿不孝人ニ而、尊翁様御一世不會被成候
条、縦從 公義被仰付候共、右之御断申上、秘事条と
并御代と御相續之御由書(總)一圓相渡間敷候、
一雖不新 殿様御傳授之節儀御尋可奉伺 上意候事、
右條と少茂於偽申上者、

「神名略ス」

慶安二丑卯月五日

新納又左衛門

川上芳庵様(久應)
参

久正判(久)

117 ○ 覚

一御留守中諸事可被仰儀(仰付)、少も難渋被申間敷事、付所
者嘍衆鹿兒嶋より御用付可被召寄時者早くと可被参上
事、

一御留守中鹿兒嶋御番其外方と番所無關係様可被勤事、
(マ)一旁輩中、爰かしこに寄合、徒成事共申輩於有之者、被
及聞召次第曲事之沙汰可被仰出事、
一御留守中別而酒女の嗜いたすへき事、付不可致喧嘩口
論事、

一夜行かたく可為停止事、
一御留守中鹿兒嶋辻ぎり被差出候間、可致其心得候事、
一火燭かたく被申付、可致火用心候事、
一兼而如被仰出、侍衆のあたりにて辻哥かたく法度候事、
一如御内者程之人、若下女を傾城なとたてさせ候半輩者、

其科可被仰付事、

一御為可惡儀取沙汰於有之者、早々鹿兒嶋へ可被申上事、

一連々被仰出候御法度、弥可被相守事、

一耕作之事、無油断可被申付事、但井手溝被入念誘へき

事、

一從他方之走者来らん時は、曾以許容いたすましき事、

但御分國中者互ニ申通、本々江可返付事、付諸寺江堅

く右之様子可被申付置事、

「朱加治木仰渡条書、但野村織部介以直筆写置とアリ」

元和六年庚申五月十三日

〔本文書ハ「旧記雜錄後編四」一六八五号文書ト同一文書ナルベシ〕

▽ ⑮ 覚 △

○當家二十代餘無恙相續、不輕儀〔⑮ニ〕候、中興、日新

様 伯圃様 竜伯様 惟新様 黃門様之御時、右連〔⑮御〕

枝之衆▽ ⑮ 對 御家無疎意、度々粉骨之条々、定而可

被聞及候、就中於當代者連枝之衆△餘多有之事候間、

行末頼母敷儀〔⑮布存候〕、縱國中轉變之時節雖有之、不混于他不

可過御家長久之賢慮候事、

一去々年於江戸繼目相濟候刻、家老衆迄〔⑮ニ〕公方様御直ニ

久敷ニ而候様難有 上意共承、誠〔⑮ニ〕希代之面目

不過之候、然共自然於天下被仰付人数〔⑮ナシ〕儀も有之

者、抽忠勤度内存候条、軍役之儀を題目染心肝、萬事

分限相應、美々無之様可被用儉約事、

一被忘置儒字弓馬其外道之數嗜方、或〔者〕任氣佚遊之

樂、或〔者〕夜行等みたり〔⑮ニ〕成行儀、令停止早、

并預置一所御衆、不節用地頭所之見廻可有遠慮事、

一登城之時吳様ニ無之様、慇懃可被相動候、将又先祖之

忌日寺江参拜之時ハ長袴着用ニ而、いかにも可致畏敬

事、

一相背國家之法禁輩於有之者、雖為各可及沙汰、付、世

間ハ挿私意以計策、或〔者〕蜜事を告、自然犯人意、

或可結〔⑮朋〕黨寐ニもてなし、懇切ニ取寄族茂可有之者、

一旦者最之様〔⑮ニ〕可被思〔⑮ニ〕候、其志〔者〕向後ハ還

て可為讎候欵、若又兄弟衆之間ニ如何様之和議も可有

之刻ハ、此等之次第速可〔⑮有〕言上之事、

一老中衆江談合、或〔者〕企諍論、或任短慮事を破、且復輕内之者殺害等相危ニ被致沙汰間敷事、何事も黄門様以来被附置候衆江可有内談事、
一横目を申付置候間、諸事不可有油断之事、

以上

寛永十七年正月廿四日

御使川上因幡守

鎌田治部少輔

〔本文書ハ「旧記雜錄後編六」一〇三号文書ト同一文書ナルベシ〕

〔三ヶ条省略サル〕

○御國之惣高六拾万五千斛ニテ候、高帳此方御城、惣諸大名之高帳〔内〕同前御覽之事候条、何時御軍役被仰出候共六拾万五千斛可被相懸候、然時者、乗馬も千式百騎圖ニ而候得共、左様ニ者迎も調ましきとの御事ニ而〔候〕、先五百騎之用意可有之由被仰出候、責而それ程ニ者内々御用候て不叶儀候条、申まで〔も〕なく候得共、構而く不可有御油断候、爰元も実正ならぬ義を色々取沙汰〔有之〕候間、如何様之儀ヲ被仰

出候共不知候、

〔コノ間一ヶ条省略サル〕

一さしあたりたる儀ニはかり、上下共御取付候而、御借銀返濟之儀者、當時〔取〕沙汰無之躰〔ニ〕候、此儀者寤寐可有御忘儀ニ而無之候、▽◎琉球△表之御才覚とも如何相調候哉、後便委可被仰越候、右之趣為可申入、態飛脚申付候、猶期後音候、恐惶▽◎謹言△

「寛永九年」八月廿二日

伊勢兵部少輔

貞昌判

下野守

久元判

喜入撰津守殿

川上左近将監殿

▽◎人々御中△

〔本文書ハ「旧記雜錄後編五」五六二号文書ノ抄ナルベシ〕

「慶長五年惟新公從伏見少将様へ被遣候御書、始末略ス」
○去年以来、伏見御留守番ニ付而、人数可被差登〔之〕由、数度雖申下候、無合點候哉、終、宥人も不被差上候、千万無心元候、

尚^(○)本多上州御懇不大形候、我等今度京都より急

一今度上方就轉變、鹿嶋太郎兵衛^(○)差下、様子具ニ申下候、雖然御人數被差登^(○)▽候へ△共、又者被上間敷^(○)共、否之返事無之、大形成御文牒ニ候、早竟太郎兵衛^(○)若輩故、委細不申届候哉、不審深重^(○)存事候、連^(○)御家中より在京之人数七千人之御盛、慮^(○)と相定由承及候条、先其内^(○)半分と存、三千五百程急度可被差上由、鹿嶋太郎兵衛^(○)を以申候き、如此申下候様子者、御國元之儀も心遣^(○)存候而之申事候、然處九州衆過半被成在京、當時^(○)秀頼様御用ニ被相立、在國之衆者皆^(○)被召上候、其上分國よりも御人數馳走可仕由被仰聞候間、▽○其後申越候ハ、最前三千五百人可被差上由雖申下候、他國なミの儀候間△有様之軍役被仰付肝要之由、細^(○)と申下候、然者今度之御書中、何方共無一着、遠慮之躰^(○)見得申候、定^(○)於御心中者別儀有間敷候得共、何としたる御事候哉、無心元存申候、

(本文書ハ「旧記雜錄後編三」一一五七号文書ノ抄ナルベシ)

ニ罷下候^(○)ニ付諸事不弁^(○)可有之と被思召候哉、種々當時可入物共罷着候へハ、▽○則御持せ△振舞之道具以下卅人分被持、其外毎々看等送給候、誠^(○)と奇特^(○)被申事^(○)候、如此候間、諸事心^(○)安達事ニ候、以上、

態使札申上候、

一去十四日京都罷立、一昨十九駿府^(○)被下着候、以之外路次急申候ニ付、人馬疲正躰無御座候、兩日大雨故、存^(○)たるより少遅致参府候事、

一此地へ罷着、則本多上州江致参上候由申入候処、翌日大御所様へ被成言上候得者、一段御機嫌能御座候而、只今成共可被成^(○)御對顔由御詫候而、國元之儀共種々御尋、就中^(○)惟新様御事御懇ニ被成上意候由、御城より直ニ上州御出候而細^(○)と被仰候、公方様江者御年寄衆中へも未申入候処、土井大炊頭との為御使上州同前^(○)来臨候而、從公方様早^(○)と致参上之由被聞召付候間、被仰聞^(○)由誠ニ不存寄仕合^(○)而^(○)御座候事、

一 今日廿一、兩御所様へ致御目見候処、内々右之仕合
ニ候故、御機嫌能儀無残所儀、可安御心事、

一大御所様御煩之儀、おこりさめ御座候由上州被仰候、
我等御目見得之儀候而、自然不圖御氣おこり候ハ、

可為御機嫌次第由候而、先 公方様へ上州御案内者候
而罷出、夫より御所様御殿被成同道、我等参上候由、

ちと御伺候へハ、時ヲ無御移被下出候、各奇特なる由
被仰事、然者御顔色御聲など、平世ニ餘〔り〕相替

儀も無御座候、此中承候躰者、御食一日ニ御かさニ而
一ツニツ参〔候〕由候間、早正月より至此比ハ、六拾

日餘ニ罷成候条、以之外可被成御草臥と存候処、存之
外つよく御座候、乍去一圓ニ煎藥不参、▽御手合之

△万病圓と申丸藥迄を参之由候、就其奉始 將軍様各
笑止かりにて、典藥衆へ藥を是非共参候様ニと被成言

上候へ共、結句御氣色悪候故、中々煎藥可参儀 驗終
之由候、能々ニ而御座候、ざばと爰元▽◎當時之△醫

者とハ何れ勝候哉などへ、御側ニ被居候衆へ被仰出、
积迦さへ藥にては御たすかりなく候間、不及養生候由

御意候とて各笑止かり居候、今分ニ而ハ、御煩急度者
御快氣有之間敷候事、

一 將軍様二月二日より此地へ被成御逗留候、 大御所様
御本腹候様、然与不被御覽定候者、江戸者今程還御在

之間敷由候事、
一 今度此方へ罷下〔候〕刻、松平河内守殿駿府より懸川

江被成帰館、殊之外御馳走にて御座候而、御内儀へも
遂對顔申候、一段無事ニ御入候、就中御息成人にて結

構ニ被成相立候、目出度存候事、
一 今度罷上路次ニいたりても、江戸より度々之使爰元へ

罷着候而もはや使被差越候、妹姪女一段無恙由候、可
安御心候事、

一 御所様御氣色此中如何御座候哉、被聞召度由候而、本
田上州迄輕キ使御進上候而尤ニ存候、御進物者入間敷

候欵、自然似合敷御進物も入候ハ、爰元ニ而談合可
申候、将又鹿兒嶋之儀被添御心候而可被下候、猶爰元

之様子追々可申上候、誠惶誠恐敬白、
「元和二年」 陸奥守

三月廿一日
進上 惟新様

家久

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一三二八号文書ト同一文書ナルベシ)

○去月八日之御状、同廿三日下着、具^⑩令披見候、先以無^⑨吳儀在京之由、玆重存候、

一山口殿別而懇ニ被仰候哉、目出度存候、定而御目見得時^⑩宜事相濟候半と、自是申計候、

一関東下之儀、當年^⑩「之事」ハ被差置^⑩「候」様^⑩聞得候哉、時^⑩儀不^⑩輕事^⑩候条、先以目出度候、

一當國之絵圖并田帳之事、早刻鹿兒嶋へ申渡候、然者彼

田帳之事、未出来候由候条、毎日以使者申候間、漸

致首尾罷上候、早竟為被仰付人衆不入情^⑩「候」故ニ

候、先^⑩「度」大嶋入之御談合ニ付、龍伯様鹿兒嶋江

御越被成^⑩、三日御談合ニ而候、此内も朝ハ八^⑩「ツ」時

ニ罷罷出、晚^⑩ハ日入前より^⑩「被」罷帰、▽^⑩更ニ△不

入情事^⑩候、「是も」右之願ニ而延引^⑩「ニ」罷成候哉と

存候、惣別鹿兒嶋之様子ハ何事も緩々と物を仕、不入

情事^⑩くせに罷成候事、後日御為ニ罷成事と、笑止ニ存計候、

一御分國中拾老万八千石之かくれ知行有之由候、さり迎者、過分成儀^⑩ニ^⑩「て」候、此度圖田帳罷上候^⑩付^⑩而ハ、

彼隱知行無^⑩糺明事^⑩無^⑩心元存候、然者大嶋渡船之儀、

銀子百貫目程入可申^⑩「候」談合ニ而候、如斯造作入候、

危渡海^⑩▽^⑩さへ△被成御企候^⑩処^⑩「ニ」目之前ニ有之拾

老万八千石之隱知行無^⑩沙汰事、案外ニ候、是非^⑩調被

仰付露頭仕候様^⑩、貴所^⑩ハ分別候^⑩ハて不叶儀ニ候、至

爰元も我等一入彼かくれ^⑩「知行」地之事申候得共^⑩、た

そ被打合候事も無之、旁以笑止之事と存事候、

一河田大膳亮去月十八日^⑩「ニ」罷下、被仰候条と^⑩慥

「ニ」承届候、

一大嶋^⑩「入」之儀、御談合被申置候、然いへとも渡海舟

作杯も未被企、御談合為被申置迄ニ而、▽^⑩其以後菟

角之噂一言も無之候、然時ハ来秋之渡海△如何可相調

欵と存計候、

一縁中之儀、^⑩「從」山口殿御内儀御座候通、比志嶋紀伊

守・伊勢兵部少輔前より申下候、誠〔ニ〕時宜入事〔ニ〕

候条、甚以御くろう無申計、乍去人質〔江戸江〕於

逗留者切々見續、過分〔ニ〕六ヶ敷事ニ候、然時者如

此縁中被與候得者、當分雖難調候、後日者無餘儀縁者

出来〔候〕儀候条、▽⑩貴所△御為旁可然欵と存候

事、

一 鹿兒嶋書院并教寄屋之事、材木之木造過半出来たと

見得候、雨晴候ハ、立可申候〔条〕、我等罷越見廻可

申候、風呂之儀者、未企無之候、幾度申候而も路次之

松見事成躰、無双儀ニ候、然者當分▽⑩其元△路次ニ

少替たる事有之由承▽⑩候ハ、△是又▽⑩後便ニ様子

可被仰下候、得其意度候△

一 文字之刀を上方より被召寄候間、我等前より上せ申

候へと、御かミ様より被成御願候由承候、然者彼刀ハ

譜代伊作有之御重物ニ而候由候、然処如此被召噉候

事、不可然儀ニて候、就 伯困様御代ニ彼御重物を鹿

兒嶋江被召移度由、御鬮ヲ御申つれとも、おり不申

候条、不及是非、伊作へ如前々被召置候、カ様ニ前例

有之御重物を、貴所みたりに被召散、剩京都迄遙々海

上を可被召寄事者御分別之外欵と存事〔ニ〕候、誠御

家貴所迄及二十代〔ニ〕、伊作之内終ニ不出御重物之

事候処〔ニ〕、貴所輕々數被召呼候ハ、後年不可然

候由、可有批判事案中ニ候、彼刀を其元江可被召寄事

何之御用ニ而候哉、様子ハ不存候へ共、先々我等

留置申候、相構〔而〕後日刀ニよらず、御重物を何

欵と被召散事ハ、是非共々可惡儀ニ候、御重物之儀

ニ付而者、委數聞候ハて別儀ニ候、文ニ〔ハ〕餘りな

かく候〔ハハ〕ゆへ、閑筆候、

一 馬追之事、所ニより貴所下向之砌迄殘置候へと〔本のまま〕

被仰置候〔ひ〕つれとも、時分過候得ハ惡候而、先

馬、我等前より可申付〔候〕由、河田大

膳亮を以承候、其通紹益江申渡候、駒之事、一ツ二ツ

程殘置候へと承候得共、後日御進物などの為候条、▽

我等△鹿兒嶋へ罷越、駒共見申候而、依馬形六七ツ

も召置可申と存候、為御存知候、

一 かたつき之事、當分燒せ置候ハ惡御座候、乍去肩衝

六ツ上せ申候、誰へも御見せ候而、此内〔ニ〕少成共
用ニ可立様ニ被申候ハ、福嶋殿へ〔一ツ〕可被遣
候、その餘相應ニ〔御仕〕可有之候、

一唐船之事、六月ハ定而早之可致着岸事候、然者彼噯
之様子可〔被〕得御意由、於爰元申談候、弥無出念
被聞食、早之可被仰下候、委細之儀者、比紀伊守・伊

兵部少輔ニ我等申候条、不及委細候、
一毛利伊勢守殿より春臺國師之文字送り預り、慥〔ニ〕

相届候、則直ニ御返事申入事〔ニ〕候、自然出合候折
節、我等過分ニ存候通御取會頼存候、

一弥八鹿毛之哀、國分五右衛門爪髪等別而入念事候条、
一段見事ニわかやき申候、恐之、

「慶長十一年カ」
五月朔日 惟新

陸奥守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄後編四」二〇四号文書ト同一文書ナルベシ〕

〇態令啓入候、

一度之申こと候、御當家之事、貴所迄及廿代雖御家

候、漸〔ニ〕末ニ罷成〔候〕欵と存候、其謂ハ今年ニ
限〔リ〕大事之儀迄つとひ候間、夜を日ニつき肝ヲ
煎候〔得〕共、生得國からにて何事もはかゆかず候、

題目石漕船も大方出来たるも有之由候へ共、未出舟之
由候、京泊ニ者帖佐より之船少之廻たる由候、先今度
之百五拾艘之儀も、貴所迄聞召たるに相替、急ニ者出

船難成様ニ我等者承得候、左様ニ而縦江戸江着船候
共、時分後ニ候而御用不足なと候て、無御請取候

ハ、御代物者給置、不届仕立なと、世上之可為風
聞候、欵、さも候ハ、終ニハ何と可〔候〕行候哉、諸事御油
断有間敷候、

一御乗船も未廻着、貴所出船さへ無之様ニ候間、兼而可
有参上通、御約束被申上〔候〕ニ付、可被仰合儀共有

之旨、被成上意候得共、御待退屈被成、上洛候は
是もすり違可申候、縦年内國元を打立候而も、遠國と

云海は不任心之条躰ニより、中途ニ延引可被成〔候〕
儀、可有之候、左様ニ候而時宜不可然時は、誰か曲事、

誰か後なと候、共、家之たすかりニ者不罷成、被失

面目事候条、能く御油断有間敷候、

一有説ニ承付候、▽◎去年△上洛之時、於御城御能之

刻、御前ニ而貴所御能ニ心をうつし、居ながら仕舞

などをまねられ候もやうを側より見させられ候、大名

衆殊（之）外之能数寄にて候哉、立て不被舞迄ニて

候つる由、以後ニ物沙汰之通承笑止ニ被存候、それ

く心（之）をうつし候得ハ、何事ニよらず左様ニ有之物

ニ而候得ハ、日来能ニすかれ候まゝ、治定油断ニ而御

取乱も可被成と存候、是又為御嗜候、

一毎年上下之御辛勞有之事候条、諸事之儀を奉行ニ被

任置、貴所事者遊覽のミにさせられへき由申候つれ

共、今は誰之情被入人も無之候条、入飢入細何邊直ニ

可被仰事專一（之）候、

一御所様者御酒御きらいのよし候間、酒過候ハぬやうに

御嗜肝要（之）候、就中御前之御酒可有斟酌事專一

尤（之）候、并公家方へ細く御寄合候ハぬやうに御分別

一於御城各出仕之躰を見申候ニ、惣別田舎侍之上法をま

ねられ候事、見苦敷事ニ而候、只田舎侍者田舎人一篇
ニて能候由見得申候、旁為御分別候、

一諸大名付合之時者、上下之人よりおくらくこわものと

見なされ候而、御為可然候半と存候、亭主ふりニも客

ふりニも御取乱たる様躰ハ、物浅見得申候、一人悪由

申候ハ、皆それに成事（之）候間、▽◎相構々△不

可有失念候、

一江戸之御隙明候而上洛候ハ、何かと候而、京伏見ニ

徒ニ一日も無御逗留、追付可有下向之候、

一人ニより役を望知行を望存、知なき真実たてをいた

す者も、世上有ならいニても、殊（之）我手前之為よ

きやうにと、粹心中御前を繕事も御座候条、真実之人

迄ニ而ハ有之間敷候、於拙者右両道ハ絶はて申候、

只貴所御為可然様ニと存事迄（之）候条、老躰極不

知明日躰ニ候得共、貴所事能上ニも能様ニと存候而、

くり事ながら平生存念之通申事（之）候、念比ニ御披

露肝要（之）候、恐々謹言、

惟新

〔本文書ハ「旧記雜錄後編四」一六七号文書ト同一文書ナルベシ〕

○致衰老忘前後躰ニ而、近比乍斟酌餘々御家之儀氣遣

候間、存寄〔ニ〕通申事候、

一御家代々乍申、貴所家督之様誉有事ハ無之候、誠

久〔敷〕家ハミなく滅却之時節、繁榮之事ハ

二三代之有道事共〔叶〕神意〔ニ〕先祖之御守故

候間、弥被重△天道可被祈家之長久儀專一

候事、

一此比ニ迄子孫無之候間、大かけミち与存候処〔ニ〕

思之候之男子誕生、寄符共中ノ難述言語候、因茲平

生之思慮肝要ニ存候、其故は天下之國衆毎度之御普

請被相勸、又八年ノ駿府・江戸へ参上、其苦勞不勝

計候処〔ニ〕當家者被領教ケ國、一度も御普請不被

仰付、又節々之出仕も無之〔候ハ、〕諸人之羨不淺

事ニ而候、如斯大果報ニ被相任、心替無之候ハ、寸善

尺魔と申ならハし候間、はたと可被及氣遣儀可有之

就中當世は金銀を以被續家事候間、内々不入事ニも

の、入候儀可有用捨候、以事之次申候、貴所諸道具共

手間之入候様子ニ相見〔得〕候、又被召仕女房衆、衣

裳等も餘〔リ〕結構之躰ニて候〔間〕、内々之儀者

大方ニさせられ、少〔シ〕成共其入目公義之用ニ被

立、國家之ために成候様ニ御分別尤〔ニ〕存候、諸侍

も切々出物ニつかははてたるよし、然処内々之花麗

共候ハ、世上のみかけ取沙汰、又ハ堪忍任難成、人

之述懐も可起候哉、少たらぬとおほされ候ハん事、み

てるをかくニ而候間、天道ニも叶ひ、國家子孫之祈禱

ニも可成候事、

一右ニ如申、貴所御代之様ニ自他國之取持有之儀、前

代未聞〔ニ〕候、誠〔ニ〕公義ニ付、諸國辛勞被尽

候処〔ニ〕、自遠國使者被遣候事、不大方懇切ニ候間、

何時も他方之使者被入御念、自身振舞をも被寄合、會

積等念比ニ候而可然存候、惣別他國之客人ニ鹿兒嶋役

人衆無沙汰無之様〔ニ〕連々可被仰付事、

一當國之様を見申ニ付、近〔キ〕御親類中ニ茂、或

〔ハ〕^{①ナシ} 氣任、或^②構大欲心躰ニ見得候、兎角御為ニ可成

人見及不申候、又歴々之中ニ茂御用ニ可立人多も無之

候、少御為ニ可成と存〔候〕^{③ナシ} 衆ハ、早年寄申候、然時

はゆく〔す〕^{④ナシ} 糸之儀何共氣遣千万〔ニ〕^{⑤ナシ} 候、御分別之

前不及申儀ニ候得共、餘〔リ〕^{⑥ナシ} 心遣之^⑦俣申事〔ニ〕^{⑧ナシ} 候、

右條之中、僻事而已^⑨可有之候条、以用捨可有御覽

候、恐惶謹言、
^⑩元和三年カ

「巳」九月八日

惟新

陸奥守殿

まいる

〔本文書ハ「旧記雜錄後編四」一〇四二・一三六九・一四六五号文書ト同一文書ナルベシ〕

○陽和院様御詠哥 法皇様へ御点御頼之時山の井の局

よりの文式通

此一巻いつ^①の比^②御目にかけれ候つるを、何とそ御

点もあそはされ^③てつかわされ候ハ、御かたわらにお

かせられ、御覽しそめしより、句々言々御めをおとろ

かされ候はかりにて、うちすき行かへり候春秋もいく

たひにかなり候やらん、御おほへ^①もなきほどの御

事うつなく覚え^②させおわしまし候、いま^③にも御

点ばかりにてもあそはされ^④候て^⑤つかわされ候

ハ、ありかたくよろこひおもわれ候ハんとやうく

申入候得ハ、今程は殊の外の御よハひもつもりて、

萬御正躰なきおんことに^⑥候ま、御しんさくに

おもしめされ候との御事ニ候得共、^⑦せつかく申入候得

ハ、御点はかりハあそはされ候ま、その御心得ニ

而、うとき人などには見せられ候ハん様ニとおもひよ

り候、御詞も少々加へられ候、則書付させられ候、そ

なたより御めにかけれ候〔へと〕^⑧、かしく、

山の井

〔島津光久〕
松平大すみの守殿

御おুকあたへ

まいる

〔本文書ハ「旧記雜錄追録三」七五七号文書ト同一文書ナルベシ〕

よくくこころえ候て申入候、昨日の御返事のとをりもそなたより御目かけられ候自筆の一巻、きとくにおほしめされ候、又御覧のため、此御所に①くめおかれ候、②今ほと御年の数もつもらせおはしまし候ハすは、諸家のうたともえられ、③これをも△集にかならず入られ候ハん物をと御残多覚しめされ候との仰事④こそ御さ候、⑤幾度もよく△申入候へハ、⑥ひと日も△仰之通⑦「り」御よはひも△つもり候て△、御正躰なき御事ともにて△おはしまし候へとも△、歌の躰あまりかんし覚しめし候ての御しるしに、御うつゝなき御事ながら、あそはされ候御事にておはしまし候、何事もよく△心え候て申せとの御事にておはしまし候、△めてたく△、かしく、

文のやうひろう申ておはしまし候へは、御てんの御禮申させおはしまし候、ことに此もくろくのことくきぬちゝミ色く十たんしん上候、御機けん⑧の御きそくこそ、かしく、

(延宝七年)

六月十日

山の井

松平大守ミ守殿

おく方

まいる
申給へ

127

○其許亡親今井八右衛門事、日州穆佐移地頭之節、同所郷士江藤主右衛門違犯國教事及露頭、為遁其罪出奔、御料本庄依隠居、元禄九年之春八右衛門了簡ヲ以召捕候儀達 綱貴公貴聞、翌年閏二月朔日、御下屋敷御書院江被遊御出座、御前近被召出御意候者、八右衛門入念申付候故首尾能召捕、旁御満悦被思召候旨、蒙御褒詞、加焉御腰物銘備前三郎國宗二尺二寸八分拵有、一腰拜領被仰付、向後猶以入念可相勉旨有 尊言、冥加之至候、時御家老嶋津久守・同久寛・喜入久亮・種子嶋久時、御詰衆嶋津久供、横目頭嶋津久文・同久雄御前列候、御腰物拜領御取次我等相勤、其時之次第依為存、有増書付可授与旨、任懇望如此候条、寶刀相副可被傳子孫、無窮之状

如件、

嶋 備前

久達判

正徳四年甲午九月九日

今井新右衛門殿

▽ ㊦ 以上 △

○嶋津菊袈裟殿為御替、北郷讚岐守殿御越候間、其趣披

露仕候処、遠路御造作御苦勞之由被思召、御前之御仕

合殘所無御座候而、則菊袈裟殿御暇被遣、只今帰路

被成候、爰元之[㊦]躰委曲宿老中可被申上候、將又貴公

御事御なつかしき由、將軍様節々被仰出候、兼又其[㊦]比

地御屋敷御普請以下如何ニ茂丈夫ニ被仰付候儀、御造

作御苦勞共之由御説被成、彼是以御懇成御事書中ニ難

申盡候、何共面躰ニ積苦可奉得貴意候条、不能一二

候、恐々謹言、[㊦]

「慶長十七年」

十二月廿六日

本多佐渡守

羽柴陸奥守様

貴報

正信判

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」九七九号文書ト同一文書ナルベシ)

右紙数三十枚九月廿八日より起筆、十月五日於寺社

奉行所

本書者左近允尚經藏也、

也、

(コノ奥書ハ全文盜抹サル)

一 中納言様、喜入紹嘉宅ニ而御詠哥、并御供衆詠哥、

一 西山様より若殿様江被仰進候御傳言之扣、

一 勝久公御廟所ニ付御記録奉行申出、并佐土原泰翁寺申

出候付糺方一件、御傳記略等之事、

一 光久公御逝去ニ付陽和院殿御詠歌、

一 年山記聞書拔 かしく たらちね 頼政上階

一 新井白石紳書 シノフノ字 問書御教書 馬ノ本姓

一 卯枝 藥玉 水室ノ始 水無月祓 七月すまふ

一 一度景ノ始 一守護地頭等之事

一 惟新公より関ヶ原陣前八月廿日日本田六右衛門宛之御状、
但幸便之条申越候、上方谷劇之由度ニ申下候と書出之御状、

一 御同人より 薩摩守殿宛ニ而、 公方様江又八郎殿同

前御目見一件之御状、

但今月十一日、池田石近事罷下、井口上之趣と右同、

一 御同人より 陸奥守殿宛、去月廿八日之御状、同廿三

日下着と書出之御状、

一 御同人より 御同人宛、態令啓入候、度々如申御當家

之事と書出御状、

一 竜伯公より武庫入道殿と宛書、追而令申候、拙者息女

か事と書出之御状、

一 本田貞親より市来筑前守宛、忠久下向被申候之處、三

州皆御奉公之儀等と右同、

一 久時より吉田次郎殿宛、為高麗征伐被遣武士候と右同、

一 伊十院忠真より肱枕老宛、今度爰元之出合之後と右同、

一 惟新公より山田越前入道殿・種子嶋左近太夫殿宛、國

元無吳儀候由と右同、

一 御同人より伊東豊後守殿宛、御下向已後度々以書状申

入候ト右同、

一 義弘公より伊十院源次郎宛、其後者不慮之儀ニ付不通

相過候ト右同、

一 惟新公より寺志摩守殿宛、急度令啓上候、仍今月二日

御在所被成御打立薩ヘト右同、

一 伊十院源次郎より平野源右衛門尉・高島新藏宛、今度

幸侃罪科無糺明と同、

一 家康公より薩摩少将殿宛、御使札并為御首信甘葛送給

ト同、

一 川上久國より弾正大弼様・下野守様・穎娃左馬頭様・

鎌田治部少輔様・山田民部少輔様宛、一書申入候、然者御系圖今月始と同、

一義珍公より本田下野守殿宛、急度令啓入候、仍忠棟之事従日州出船之由下同、

一利長・輝元・景勝・家康より羽柴薩摩宰相殿・羽柴薩摩少將殿宛、態令申、相守時分柄、自然下々ばはんニ

罷渡族可有之候之間下同、

一義久公より種子嶋三郎次郎殿宛、清時左近將監太守元

久公下同、

一義弘公より堺津隣也臺宛、尔来無音非本意候、仍愚息

又八郎下同、

一忠恒公より臨也老宛、下國已後者遠界之故と同、

一御同人より同人宛、當春之慶事珍重候、仍其已来不書(罷脱カ)

信下同、

一伊勢貞昌・下野守久元より平嶋休右衛門殿宛、中納言

様御上洛之時分下同、

一義久公より北郷入道殿宛、防戦之成立仍(依不カ)是非、頓川

内へ下同、

一三原重種・伊勢貞昌・比志嶋國貞より三司官宛、其地之女、従関東御用下同、

一惟新様より少將様へ被遣候御書中、始末略、去年已来、伏見へ御留守番下同、

一伊勢貞昌より喜入撰津守殿・川上左近將監殿宛、御國惣高六拾万五千石下同、

一元和八年七月、光久公を御養子被成、龍伯以来と同、但名并宛なし、

一堀田加賀守・阿部豊後守外二より薩摩中納言殿宛、大隅國之内國府之城追手裏仁建門下同、

一嶋津下野守・伊勢兵部少輔より右之御請書、

一川上久國・伊勢貞昌より弾正大弼様・山民部少様外二

人江、追而令啓候、如仰薩州様國分へ被成御住宅度由

下同、

一新納久正より川上芳庵様へ、「四ヶ条略ス」(數)有間「マ」儀候へ共、萬一

志摩守殿并子々孫々下同、

一川上久慶より川上七左衛門殿へ、「口略ス」右條々者勿論最上

之秘事下同、

一 川上久國・額娃久政・嶋津久通より山田民部少輔様・

嶋津下野守様へ、先書如申南蛮人搦捕、公方様御機

嫌下同、

一 右同三人より宛同断、〔前後略ス〕當分籠屋有所惡敷下同、

一 右同三人より右同、〔前後略ス〕松平新太郎殿内衆森寺清左衛門殿

ト中人下同、

一 継豊公より中川石見守殿へ、一筆致啓上候、前撰政様

弥勇建下同、

一 〔後〕土屋但馬守・久世大和守・稻葉美濃守より松平大隅守

殿へ、御札致拜見候、嶋津飛彈守遺領実子万吉為幼稚

之間下同、

一 〔前〕近衛家久公より薩摩少将殿へ、芳佐〔信カ〕披見、内々令約諾

候賀之屏風下同、

一 阿部豊後守・酒井讚岐守・土井大炊頭より松平薩摩守

殿へ、大隅守殿〔マツ〕逝去之儀下同、

一 阿部豊後守・松平伊豆守・酒井讚岐守・土井大炊頭よ

り薩摩中納言殿へ、所勞如何、無心元下同、

一 家光公より薩摩中納言殿へ、所勞之由無心元候、然者

久志本療治下同、

一 酒井忠勝より伊勢貞昌へ、昨朝ハ種々得御意候、仍内

々申候下同、

一 土井利勝より同人へ、一筆申入候、先刻者從又三郎殿

為御使下同、

一 同人より同人へ、一筆申入候、然者去十一日昼御本丸

火事下同、

一 安藤重信より右同人へ、一書令啓上候、今日ハ陸奥守

様於御前下同、

一 伊沢政信・瀧川利貞・北條氏利・本多忠就より伊勢貞

昭へ、松平大隅守殿二歳之息女ト、

一 戸田越前守より松平大隅守殿へ、先年禁中築地永井伊

賀守ト、

一 土井大炊頭より松平薩摩守殿へ、角石百本并石請取、

一 内前公より薩摩少将殿へ、年甫之賀慶且如目錄ト、

一 近衛内前公より右同人へ、営中進使者ト、

〔嶋津彈正文書之内写ハヶ条文書之内〕

一 家久公より嶋津彈正殿へ、慶長十五年伊勢貞昌日置へ
〔ハヶ条之内〕

為御使、

「右同」
一家久公より嶋津彈正殿へ、於我等家督之時節、存亡之

危難ト、

「右同」
一御同人より川上左近將監殿・下野守殿へ、其元家老役

無人候之間、

「右同」
一御同人より彈正大弼殿へ、一書令啓候、然者其許家老

役之衆無人候之間、

一本田正親外拾八人起請文之事、

一又四郎忠仍・きくけさ、比志嶋紀伊守殿宛起請文、

一今度 龍伯様又四郎殿を少将ニ被思召替、從京都御朱

印ト書出起請文、

「一、」
一惟新公龍伯尊老様へノ起請文、

「一、」
一家久公より下野守殿へ、一書申遣候、然者虎壽丸之儀

ト、

一久國より豊後守殿・下野守殿へ、今度陣中之大将役兩

人へト、

一久國より喜入撰津守外五人江、急度申入候、仍今度陣

中大將役ト、

一同人より豊後守殿外五人江、急度申入候、仍今度軍衆

都合二万程ト、

一同人より出水噺衆中へ、楯之板式三千枚ト、

一光久公より黃門様へ、急度致啓上候、然者嶋原之儀ニ

付ト、

一有馬久右衛門外二人より日高拾兵衛へ、寛永十五年丁

二月廿八日辰之刻ト、

一村尾源左衛門より金剛坊老へ、丁二月廿八日有馬原之

城ニ而ト、

一柏木主馬首より同人江同断、

一加久藤衆中人數手形、
「嶋原立」
一右同人數差出、

一伊地知左右衛門有馬陣立差出、

一右同人南林寺への状、
一嶋原立、阿多衆書付三通、

一大口衆嶋原立手形、

一寛永八年九月廿五日、(家久)中納言様國府へ被遊 御光越、

於紹嘉宅紅葉の題にて御歌被遊、左之衆被召立一首

ツ、如是候、

題紅葉

家久公

こえ過す秋ハあらしな薄くこくもみつる色にともなへ
る袖

豊後守久賀

いろを知人まちえたるもみち葉ハけふ一しほのなかめ
也けり

喜入紹嘉(久正)

間袖をまちてやいろのまさるらん栄へかふる庭のもみ
ち葉

新納久徳

よのつねにあらぬすまゐを諸人の心をとむる庭のも
ち葉

金剛寺妻仙(マ)

おもひきやかつ見へそむるも。ミち葉をまたきにとハぬ
袖の有とハ

渋谷四郎左衛門重持

「本ノマ、」

山陰に見ゆる紅葉も今日社ハいろ一しほのなかめ也け
り

有川讚岐守貞守

枝かハす木とのもミちの陰にきて錦かたしくもろ人の
そて

藺田助右衛門実房

折を得て待ける袖の色香をもしるや木高き陰のもみち
葉

鎌田土佐守政重

常盤なる山にもみちのあらはれてけふそ妙なるなかめ
也けり

蒲生宮内少輔清宣

植置し庭のもみちの色くいつくの秋ハさもあらハ
あれ

東郷少将監重村

幾秋を送りむかひて今日ハ猶宮にいろそふ庭のもみち
葉

正乘院常栄

130

(徳川光圀)
西山様より若殿様江被仰進候御傳言之扣、

限高き紅葉の元に立よりてなかめにあかぬけふのくれ
かな

家村筑後入道壽替

時をえて見る人からのもミち葉ハ染ます色や千入なる
らん

東郷重位

ときハ木もいろに成けり立ましもミちの梢朝日いさ
よふ

川上伊与入道久晴

神やもるさかり久しきもみち葉の折を待えて時めける
宮

喜入撰津守忠政

幾千世もいろやかさねんから錦あかぬもミちの陰のや
とりは

以上

一御讀書之儀、前より被仰進候、御身之益ニ罷成候之
段者不及申、文字御働候得者、當分御用御たり候之間、
御老年之後甚御慰に罷成候事ニ候、依之被出御情候様
ニと被思召候事、

一御武藝之儀、何茂少々御心掛不被遊候而不叶候、就中
鐘ハ長道具ニ而取扱難成物ニ候、尤大將者御自身之働
ニ不及、御馬の先ニ而諸士之鐘を合候を被成御覽候得
共、如何様之事ニ而御自身鐘を御取候有之間敷物ニ
て無之候、其節日比御稽古無之、アイカフリ等御手ニ
入不申候而ハ御用立不申候間、能程ニ御習被遊候様ニ
と被思召候事、

一剣術者御身之圍ニ罷成候、御心得不被成候而不叶儀、
就中居合被成御習御尤之事ニ候、居合拔之上ニ而ハ、
或ハ四寸之つまり屏風水風呂之内ニ而、四尺之刀を抜
なと、申候事有之候得共、それは所作之上ニ而一ツも
御用ニ立不申候儀、居合ハ抜口一種之物ニ候、抜口を
致吟味候ハ、抜打之あたりつよく候得者一打ニて參候

物、是儀多之益ニ罷成候之間、御稽古被成候之様ニと被思召候事、

一 大兵者三四尺之刀を茂自由ニ振廻シ用を成事ニ候得共、

大抵之者ハ大刀ハ手ニあまり甚無益之事也、 大殿様

御若年之比より御試被遊候ニ、二尺五寸より上之御刀

ハ御手ニあまり候、 若殿様ニ者何程ニ御成長可被遊

茂難計被 思召候へ共、長刀ハ必御好被成間敷候、御

脇指ハ一尺七八寸二尺迄、御刀ハ二尺三四寸迄ニ可被

成候、タテヲ被成、長刀御指被成度被思召候ハ、何

ニても空鞘を可被仰付候、身ハ必右之寸尺と御心得可

被成候事、

一 軍法ハ大将御存知無之候而不叶儀、万一御用御承御出

馬之時、士卒之被召仕様備立御存知不被成候而ハ不罷

成儀、一騎前之御働ハ匹夫之勇ニ而御用ニ不立儀、今

時之軍者人をたまましたふらかす様成儀猶以無用之至、

幸栗田七兵衛御近習へ罷有、鎌信流之軍法覚候而罷在

事候間、軍学一通者七兵衛へ御聞被成可然被思召候事、

一 軍学之根本者七書より外ハ無之候、 大殿様御若年之

時より七書御覽被成、大要御心附被成御座候、三略六

韜其外何茂軍学之道理を説述候書ニて候得共、就中孫

子呉子を專要と致事ニ候、然共孫子呉子軍法者巧なり

ともいへとも、行跡ハ不足学たて候へハ、上州筋夜討

強盜之類それ〳〵之法有之、續松之振様、別而夜討之

大切とする事也、強盜之中ニも頭立たる老功之者ニ續

松をふらす事也、ふり様悪敷時ハ働キ不宜、此故ニ

續松之役を干要として防者之方よりも續松ふりを目懸

て早く討取様ニ致事也、是等ハ武士の心得ニ罷成事ニ

て、夜討強盜の所為ニも能事之なきにハあらず、然共

夜討強盜大なる悪事なり、孫子呉子も如期(マツ)にて可取所

をとり、可捨所を捨候様ニ御心得可被成事、

一 常ニ算盤を御習算勘を御心得候様ニ与被仰進候儀、役

人ニ被為成候御身ニても無之、何故と可被 思召候得

共、算數御存知無之候而ハ、備立人数之配様不罷成物

ニ候、たとへハ三百坪一段之場ニ騎馬之侍何程被立申

候と申事、御馬上ニて御覽之内ニ御つもり被成候様ニ

無之候而者、忙キ時節急用之間ニハ合不申物ニ候、尤

軍学備立心得候者御側ニ可罷有候得共、いか様之事ニ
て其者不罷在候之時ハ御用欠申候、依之御身自御心掛
不被成候而不叶儀、 大殿様ニ者御若年之時より地坪
ニ被附御心、何段何町之場即時ニ被成御覽候而、御心
懸被成候様ニ被成度被思召候事、

一 大将之寶ハ堅固なる城擲、サねよき甲冑、此二ツより
外ハ無之候、然共城擲甲冑外ニ有之物ニテハ無之候、
常ニ被召仕候諸士、則城擲甲冑ニ而御座候、何ほとサ
ねヨキ甲冑を着、堅固成城擲ニ籠候而も、士卒之心は
なれ候而ハ、用立不申候、士卒合心之時者、何程之城
擲甲冑ニもまさり申候、たとへハ、人之身近キ寶ハ、
刀脇指ニ過たる者無之候、然共鞘ハシリニ而手足を切
事も有之候、士も如斯ニテ、御身之守ニ罷成宝ニテ候
得共、鞘はしり怪我をする事無之様ニ人を能見立候而
被召仕候事干要ニ候、早竟之所、御恩ニ感申候ハ、刀
脇指之身之守ニ罷成候ことく、怨を合申候ハ、鞘ハし
り怪我をすることくニテ候間、御忍に感怨を合不申様、
常に可被召仕事、

一 御家中諸士之筋目を御存知被遊候様ニ御心掛可被成候、
たとへハ駿河以来源威公へ御附人四十九人之末者誰々、
其外源威公御代 大殿様以来被召出候故参新参之差別
由緒米歴、御存知被遊候様ニ可被成候、アナタニ御書
記被置候者茂有之候、御所望ニ被思召候ハ、可被進
候間被成御覽、又者人々之物語をも被成御聞、御存知
被置候様ニと被思召候事、

一 常ニ御身うミ不申候様ニ御身持可被遊候、 大殿様御
若年より御身持健ニ被遊候故、御老年之後迄も、萬一
いか様之時節大寒大暑ニ野陣を御張被成候而も、少し
も御いたミ被成候事ハ無之様ニ御身持被成候、御身ハ
「本之通り」
習カウノ物ニ候間、健ニ被為成候様ニ御心掛可被成候、
大殿様ハ三木別所屋敷ニテ御誕生、御五歳迄ハ柵町ニ
被成御座、杉と申乳母、ヲイト申ハシタ、庄九郎と申
御草履取三人より外ハ不召仕、被召上物なども随分輕
御ソタチ被遊候所、御家督をも御取被成、三十年御政
務を被成、今以御息災ニ被成御座候間、此段を能々御
考被遊候様ニと被思召候事、

右十件、江戸交代之御暇ニ西山へ参上之節、大殿

様より、若殿様へ被仰進候御傳言也、

(元禄十三年カ)
辰八月六日

安積覺兵衛證記

131 一御家十四代之太守勝久公御事、豊後州沖之濱へ被成御座、天正元年十月十五日沖之濱ニ而御逝去、御法名大翁妙蓮と御系圖ニ相見得、御廟所御位牌等何方へも不被成御座候、於沖之濱御逝去ニ付而者、彼地へ御位牌等も為有之筈候へ共、沖之濱其後津波ニて為禿入所之由申傳有之、何様之儀も不相知候処、(綱貫)大玄院様御代元禄四年、思召を以隆盛院江御牌御安置遊(被脱カ)御廟所之儀者是迄も御知不被遊候、然處先達而曾木權之助事、御用ニ付佐土原へ被差越候節、佐土原分地嶋之内、泰翁寺由緒之儀内々及承居候故、佐土原用人町田弥次右衛門江致内沙汰候處、先年泰翁寺より申出候由緒書、彼方寺社方へ帳留有之、別紙之通書写、弥次右衛門より權之助へ差遣候由、權之助「本ノマ、」与内分ニ承申候付、御系圖其外旧記等見合申候へ共、慥成儀相知不申候、乍

然、勝久公御嫡子益房丸御出生後百日ニ不足間ニ、勝久公鹿兒嶋御没落ニ而候、益房丸母ハ祢寝式部太輔重就之女ニ而候故、母子共ニ祢寝へ被為越、彼地数年被為居、其後日州へ御越候、伊東家御縁續ニも有之候付、伊東義祐を被成御頼、日州之内廣原と申所ニ御居住有之候、然処、勝久公御事、豊後州より廣原へ被為越、益房丸へ御見参有之候、此時益房丸十五歳にて、勝久公御加冠ニて元服有之、又三郎忠辰良と被為名乗、数十年廣原へ居住、於彼地男子三人女子一人出生有之、其後伊東義祐日州敗北ニ付、隅州高山へ被為来、三男兵部太輔忠親之所へ被為居、元和四年午十一月、八十四歳ニ而死去有之候由御譜之内へ相見得申候、然者義祐日州敗北と申者天正五年ニ而候、勝久公御逝去者天正元年十月ニ而候間、忠良廣原へ居住之時分ニ御座候、尤嶋之内与申所、廣原同所ニて御座候、左候へ者、勝久公御事於沖之濱、御逝去候而も、御遺骸之儀ハ嶋之内へ御納り為有之哉も難計、且又豊後日向隣國ニ而、殊ニ大友伊東兩家共ニ御家御縁續も被成御座

候付、勝久公日向へ被為越、廣原之内へ御居住御忍
 二而為被成御座哉茂難計御座候、御正統様之御事ニ候
 處、御廟所等御知不被遊候儀、御残多儀与乍惶奉存
 候、然者別紙泰翁寺由緒之儀も先達而より内々承居候
 へ共、外ニ慥成儀も相知不申、至而大切成御事ニ而、
 書面迄を以ハ真偽難相究候付、表立屹と糺方被仰付候
 様ニも難申上、時宜見合相扣罷在候處、此節高田猛太
 夫其外御用ニ付佐土原へ被差越段承知仕候、依之申上
 候別紙泰翁寺由緒之儀、一先内分ニて糺方仕候様、猛
 大夫江被仰渡度、尤糺方表向屹立候而者不相成儀御座
 候間、自身之心得を以相糺候筋之取計ニて、此節被差
 越候人数之内、壹兩人も猛大夫見計を以得与申談、随
 分隱蜜之取扱候様被仰渡置、糺方仕候上、萬一御由緒
 之證跡ニ相成候手掛も相見得申候ハ、其節猶又筋々
 之糺方も可被仰付儀と奉存候、左候而弥申出通被仰付
 候ハ、糺方ニ付委細之儀者私共より直ニ猛大夫へ相
 達候筋可仰候間、頭之大意迄を被仰渡度与奉存候、別
 紙由緒書写相添、此段申上候、以上、

(寛政十年)
 午四月五日

御使番格御記録方勤

本田休兵衛

小十人頭御記録奉行勤

東郷淺之丞

(実美)

御記録奉行

平山五郎右衛門

御記録方添役

橋口善兵衛

相良太郎太

132の1

佐土原分地嶋之内之泰翁寺書出写

勝久公御夫婦御法名御遺跡之覚書写

一御法名泰翁蓮公大禅伯、天正元年酉十月廿五日御逝去、

光山清圓大姉、天正三亥十月廿九日御卒去、

右者古過去帳之通ニて御座候、

一當寺元来大藏庵と申候処、勝久公當所へ御居住被遊、

天正元年十月廿五日御逝去ニ付御遺骸被為入、御法名

ニ付仙遊山泰翁寺と被相改候由、本山大光寺末寺帳等

ニも有之候、大藏庵其時分喜山和尚之住持ニて、從是

號當寺開山候、

一 御石塔御夫婦様之御墓所、從當寺献花香候處、從先代文字相別不申候旨申傳候處、此度御遺跡御尋有之候付、苔を取、石を磨候而拜見仕候處、御法名之字并年号日付有増相知れ候、御石塔之表、古過去帳と同様ニ御座候、尤不分明之字も有之候へ共、御石塔ニ紛無之与相見得申候、

一 御位牌御夫婦様御法名、古過去帳与相替儀無御座候、其裏之年号無御座候、泰翁寺様者午八月廿五日、光山様者辰二月七日、元録(禄)八亥曆修栄(啓)と御座候、御石塔と八月日相違いたし候、然共百二拾年餘後之儀御座候へ者、未定錯成大方ニ立置候と申事ニて、從先住代古過去帳之月日を取持、御回向仕候、

一 御火葬場當寺内未申之方ニ有御座候、先住代暫作所ニ被致置候へ共、拙僧代如旧日土壇為相築置申候、右之作所之時分御舍利など拾取、今以拜居候者も有御座候、一 御居屋敷并御祝神、薩州より始御到着之時分、今別府と申所ニ寓居被遊候由、御祝神之跡等今以有之候、其後北隣ニ御屋敷之跡有之、只今者種子田運平・児玉彦

133の1

勝久公

御傳記略

初忠兼 後義忠 又八郎 左衛門尉 修理大夫

133の2

左衛門・大町徳之助・浅右衛門・權七・半弥と申六人居仕候六屋敷罷成、御泉水之跡等有之候、且亦御祝神と申候者、三寶荒神ニて、児玉彦左衛門從先祖氏神と一所ニ祭居申候、此度神躰拜見仕候處、平人の祝置候様子ニて無之候、外ニ角板三枚有之、二枚者梵字、一枚ハ漢字ニて御立願之書付と相見得申候、則 勝久公從御本國御守持被遊候と代々傳來申候、

右之通 勝久公御蹤跡書付差上申候、

(宝曆二年カ)
申霜月日

泰翁寺長礎

右、小川儀右衛門在勤之時分差上候扣之写、

右之通、佐土原用人町田弥次右衛門江相頼、彼方寺社方へ有之由ニ而写取候、以上、

寛政八辰二月 曾木權之助

陸奥守

文龜三年癸亥八月十八日生、母大友豊前守政親女、
天文五年丙申夏、適日向真幸院、居誓若寺(樓)數歲矣、
生男女子二人、其後遁至豊後州居沖濱、改名義忠、
天正元年癸酉十月十五日卒於沖ノ濱、年七十一、法
名大翁妙蓮、

右文龜三年より天正五年ニ至、勝久公御年三十二
歳之御時、日州真幸江御遁ニて候、天文五年より天
正元年迄三十七八年ニ及候、其内七八年も誓若寺へ
被成御座哉、於此所男子忝人女子忝人御出生ニ而、
沖ノ濱江御遁被成候、然者三十年餘者豊後州江為被
成御座筋ニ相見得申候、

勝久公御子
忠良

益房丸 又三郎 三郎左衛門尉 修理大夫 休庵

齋

天文四年乙未七月五日生於鹿兒島、母称寝重就女、
同十年適日向州、倚伊東義祐、益房時七歳、義祐與

之地、曰廣原、益房在廣原、義忠自豊後州来見益房、

時益房甫十五歳、義忠加之首服、称又三郎、名忠
良、忠良在廣原生三男一女、天正五年冬、義久公

将兵擊義祐於佐土原、義祐奔豊後州、於是忠良適
美々津居、後至隅州高山居、第三子兵部太輔忠親
後称又兵衛、元和四年十一月二十二日卒、年八十四、
名忠良

法名雪叟常好、葬高山昌林寺、

右天文十年、忠良日州へ被為越廣原へ居住候而より、
天正五年伊東義祐之敗亡迄三拾七八ヶ年ニ及候、

勝久公御逝去者天正元年ニ而候間、忠良廣原居住之
間ニ候、然者 勝久公豊後より日向廣原へ被為来、
忠良へ御見参有之候儀者本文ニも相見得候、其後も
廣原之内江御忍被成御座候哉、別紙ニ御屋敷跡申
傳候場所、御氏神之遺跡等有之由相見得候、慥成儀
も可有之哉之事、

一 龜山空太夫より差出候書付ニ、勝久公豊隠岐濱よ
り廣原嶋之内村馬別府と云所ニ暫御腰をヤスメラレ、
同村ヤトモリトいふ処ニ御屋敷を定られ、氏神御勸

請、今ニ有之、同村八幡宮江嶋津又兵衛殿綾村より
太鞍寄附、胴之内江嶋津又兵衛と書付有之、氏神ニ
ヨツテナリト相見得候、別紙ニ者今別府と申所ニ寓
居被遊候と相見得候、馬別府今別府唱相違ニ候、同
所ニ而候哉之事、

一別紙ニ御祝神与申候者三宝荒神ニて、児玉彦左衛門
從先祖氏神与一所ニ祭居申候云々、外ニ角板三枚有
之、二枚者梵字、一枚ハ漢字ニて御立願之書付と相
見得候由、右角板三枚、新古何様候哉、梵字共ニ写
取度候事、

一泰翁寺元来大藏庵と申候処、勝久公御遺骸被為入、
御法名ニ付改号有之候由、本山大光寺末寺帳留等ニ
も有之候、大藏庵其時分喜山和尚云々、
右大光寺末寺帳之面、何様書記有之候哉、喜山和尚
俗性且遷化者何年簡ニて候哉、

一御石塔御夫婦様之御墓所云々、
右御石塔之形跡文字等、新古何様ニ而候哉、且古過
古帳、是又新古何様有之候哉之事、

勝久公御子

久孝 又六郎 他腹

生於真幸院盤若寺、母犬熊（般）不詳、

右同
女子

生於盤若寺、母同、

右同

又四郎

生於豊後州沖濱、母同、

右同

宗俊

生於同所、母同、

忠良子

良久 益房丸、又三郎

永祿五年十二月生於廣原、母福永月甫伊東義祐家臣女、
天正六年薙髮、為隅州曾於郡念佛寺住僧、

右同

女子 桂忠助後室

永祿八年生於廣原、母同、

右同

正圓

永祿十年生於同所、母同、

右同

忠辰 初忠親 又七郎 兵部太輔 又兵衛 如雲齋

永祿十二年生於同所、母同、二兄為僧故忠辰嗣忠良
之後、寛永十三年七月死、六十八、

133の2

前文三通、久馬殿より高田猛太夫江被相下候、

(寛政十年カ)
午八月

133の3

前文ニ張紙

本文 勝久公廣原江被為来候儀段々相糺候処、廣原と
申候者當分佐土原領之内一郷之名ニ而、古郷内ニ麓又
者犬之馬場与申所茂有之候付、誰そ居住之所ニ為有之
哉と被存候へ共、屋敷跡アツ等其外之由緒申傳候儀承得不
申候、

一廣原より田面越、拾町餘相隔、佐土原御分地嶋津(久遠カ)主税
殿知行所嶋之内村之内壱町餘田之中ニ、馬別府と申所
へ二三反程之百姓屋敷有之、御屋敷跡と申傳候へ者、
勝久公御腰をヤスメラレ候与申儀此所ニ而も可有御座

候哉、誰居住為有之と申儀共ハ申傳等無御座候、尤右
嶋之内之儀ハ、廣原郷之内嶋之内と古書付ニも有之候
由、且ヤトモリト申候者、下之條ニ相見得申候、嶋之
内児玉彦左衛門居屋敷邊之地名ニて、右屋敷之後園に
御屋敷之跡と申傳候而、當分ハ島地又ハ竹木立込居、
右所へ御泉水之跡と申地面低キ所有之、是又竹木立
込、其形状ハ無之候得共、庭中池抔之跡共可被申儀様
ニ相見得候、如何様此所ニ 勝久公被為入、又者忠良
為被為在儀ニても可有御座候哉、相究り候申傳等無御
座候、且氏神御勸請今ニ有之と申儀、左条児玉氏神外
ニ者申傳候社等無之由無之由(行カ)、如何様児玉彦左衛門氏
神と一所ニ祭居候と有之趣、同様之儀ニ而も可有之
哉、且同村八幡宮江嶋津又兵衛綾村より太鞍寄附被申
候儀、成程嶋之内江八幡社有之、相應之宮造ニて御座
候処、本文之通太鞍寄附為有之と相見得、仙禮木ニて
調候胴計八幡社人所へ格護仕居、胴之内江銘為有之由
候処、神舞之時分社人共腰を掛候節、恐多迎削除候由
申傳、字数数多為有之様子ニ候得共分り兼、嶋津又兵

衛尉と申文字、并書判之模様荒増相見得、其外一二字

も相分候所も有之候へ共、文句連續不仕候、且八幡宮へ太皷寄附之儀、氏神ニヨツテナリト相見得候由、如何様忠良廣原居住之時分尊仰被為在たる源家之氏神ニ依而寄附与申儀ニテも可有御座哉、元来右八幡宮へ為有之撞鐘之由ニテ、當分泰翁寺へ有之候鐘之銘ニ願主藤原朝臣正大宮司正重、天文八年日向國廣原庄八幡宮之撞鐘再興之与之文句相見得候へ者、忠良廣原へ被為来候以前より之八幡ニテ、忠良建立等為有之儀与ハ相見得不申、馬別府ハ前文之通ニテ今別府と申茂廣原之内ニ有之、是又嶋之内最寄御座候付、何そ由緒等之申傳者無之哉之段相糺候へ共、申傳等之儀一切無之由御座候、

一 本文御祝神と申候者三宝荒神ニテ、児玉彦左衛門先祖より氏神与一所ニ祭居候与之儀ニ付、児玉彦左衛門屋敷内氏神社見届候処、式尺餘方計之小キ社式ツ有之、社内相改候處、三枚之杉板ニ別紙写之通相見得、梵字等之訳何様之趣御座候哉、尤社内濕氣も有之故、三枚

之板縁カケ朽損様居、古く相見得候、

一 泰翁寺元来大藏庵と申候処、勝久公御遺骸被為入、御法号にて改号有之、且本山大光寺末寺帳ニも有之由ニ而、泰翁寺古文書等一覽申度、住持へ内談仕候處、右改号付、上古之書留者勿論、其外付而も古文書等一切無之由、過去帳之儀者新古二冊有之、古過去帳と申ニ、勝久公御夫婦様御法名并喜山和尚之法号張紙之通相見得、右外ニテ其比之法名相見得不申、慶長已来ハ佐土原御先祖様方并 光久公御法号迄も相見得候へ共、檀下と相見得候ハ寛永已来之年簡ニテ、右帳天正過去帳と外題有之候へ共、前文長蹉和尚改正いたし置候由帳之跋ニ相見得、往古より傳りし過去帳ニテハ無之筋ニテ、尤新數相見得申候、且大光寺江格護有之候大光寺并末寺遺事覚と外題有之候帳内ニ、張紙之通相見得候迄ニテ、外ニ泰翁寺改号之訳相見得不申、尤末寺帳と申ハ別ニハ無之由御座候、喜山和尚俗性^姓之儀、泰翁寺へ相尋候へ者相知不申候、僊化者前文張紙之通、天正年簡ニテ候、

一 御石塔と申傳候者、泰翁寺内江有之別紙繪形之通ニテ、成ほと墨ニ而写書之通薄く相見得候へ共、御法号并年号月日等之文字ニ似寄候字無之、右墨書天正之比書候物ニ可有之哉、新敷様ニも被存、證據ニ罷成候儀者勿論、似寄候事も無之、尤彫刻之文字等一字も相見得申候、然ニ由緒書之儀、御法名之字并年號月日荒増相見得過去帳と同様ニテ、尤不分明字も有之候へ共、御石塔ニ紛無之相見得候趣有之、且長礎和尚宝曆年中住持之儀御座候処、其比迄荒増相分り居候墨書、當分迄之間ニ消失可申様も無之、其上一字茂似寄候儀無之ニ付而ハ、旁別而疑敷次第ニ御座候、且泰翁寺當住僧之儀、年若ニテ由緒事跡等之儀何茂不案内与相見得、右御石塔と申茂兼而花香等相捧候様子ニ無之、剩寺内畠之内杯ニ有之候石塔者、先住より至當住畠開のため一所ニ寄集、或者祭主無之墓者石垣杯ニ用候由ニテ、庭石又ハ石垣之内杯ニ墓石段々相見得、埒もなき次第御座候へ者、墳墓之場所古とハ大半為相替筈御座候ニ付、御石塔と申候茂間違共ハ有之間敷哉与古老之者共へ段

々相尋候處、右御石塔之儀、傍ニ楠木有之、先年伐除候へ共、右場所ニ紛無之、右之形も能覚居候へ者、此跡より申傳候御石塔ニ別条無之段承候へ共、不續成次第御座候ニ付、外石塔ニ取間違候儀も難計存、其辺ニ有之候石塔之法名年月等折角相改候へ共、天正年簡比之石塔迎茂見當り不申、其外心寄之儀一切無御座、右御石塔と申候ハ、前文通由緒書とハ相違仕候、

一 御位牌之儀、別紙繪圖之通圖筒入ニテ候へ共、右圖筒之儀者佐土原御位牌先年江戸より被差下候節之明合有之候を相用候由、尤御位牌も其通之取仕立ニテ御座候、一 由緒書之内御火葬場有之、且御舍利拾取拜居候者有之段相見得、相糺候處、泰翁寺内畠之中ニ御火葬場と申傳候所有之、長礎和尚代土壇築上ケ之由ニテ、其上ニ木植有之候、御舍利与申候者、其時分別府定右衛門と申者右之畠地相拵候節、小キ玉之様なる物式ツ地中ニ光相見得候付取揚、長礎和尚へ見せ候へ者、御舍利ニ候間能可致格護置、右之内卷ツハ自分可置置との事ニテ遣置、右定右衛門事家内も無之者ニ付、親類福嶋金

助と申者へ預置候處、右之玉當分五ツニ罷成、和尚へ遣置候者、觀音之頭之内ニ入置式ツニ相成居候由ニテ、皆共一覽仕候處、舍利と申ハ不案内ニ御座候へ共、真珠之様ニ相見得申候、右定右衛門事死後ゆへ槌成儀者相知不申候、右玉之儀小キ物候へ者、地中ニ光相見得候儀共訝度も被存候得共、先申傳右通御座候、右者 勝久公御嫡子忠良、日州廣原之内へ被為在、勝久公豊後より彼地へ為被為越儀有之候處、泰翁寺由緒書之内、勝久公御夫婦様御位牌御石塔有之、御石塔之儀紛無之筋相見得申候へ共、外ニ槌成儀も無之、真偽難決ニ付、此節佐土原御用掛ニ而被差越候高田猛太夫其外御役々之内申談、一先内分ニテ右糺方仕候様被仰付度旨、御記録奉行より申上候由ニ付、猛太夫へ御沙汰之趣有之候處、私事佐土原御用席御分地嶋之内上見被仰付、先達而彼地廻勤仕候付、滞在中右泰翁寺勝久公御位牌并御石塔其外御屋敷跡、又者御祝神等申傳之儀本文御記録奉行申出候書付ニ引合、私存寄之筋を以時々内分ニテ相尋、糺方等仕候趣前件之通ニテ、

133の4

御屋敷跡等之申傳者成程有之候得共、槌ニ證據ニ可相成程之儀ハ無之、尤八幡宮へ寄進大鞍之儀ハ、嶋津又兵衛寄附之筋別条有之間敷相見得候へ共、格別御用立之儀可有御座哉、御石塔之儀第一之儀と存、委細相改候處、泰翁寺由緒書とハ大ニ相違仕候付、再三糺方も仕候へ共、不續之儀ニテ外ニ心寄儀迎も無之、甚殘多次第御座候、右糺方之次第、不行届儀のミ可有御座候間、御吟味之上、不事足儀者又々被仰越候ハ、内分ニテ猶又糺方可仕候、先此段申上候、以上、

但本文外ニ御記録奉行より申出候書付老通、泰翁寺由緒書写老通、児玉彦左衛門氏神社内有之候板三枚之写四通、勝久公御石塔并御位牌繪形式通相添差上申候、

(寛政十一年)
未正月十七日

佐土原詰郡奉行
鎌田源八

右、宿次を以高田猛太夫江致添書差遣候前文、但書之繪圖彼是別紙写、右新納常喜雜文備考雜記より写置、

一 光久公御逝去ニ付、北の方陽和院殿御詠歌

中将殿心地例ならずやミ給ふと聞し曉、かたふく月
を見て、

人しれす心つくしに思「る本ノマ、」ひやる空なつかしく入かたの月
身まかり給ふよし告来れば、

兼てするあふはわかれのことハリもおもひあへぬそ涙
なりけり

程なく七々日になりて、

なくくもなれて身にそふ藤衣ぬきかふるにも袖ハぬ
れけり

世の中のうつり替を見て、

あハれ我心にこめしよのうさハなき人のミヤしらはし
ら南

おくるよとてもいくほともあらしとおもひなくさめ
て、

歎きわひせめてなくさむ心かなおくるよとてもなか
らしよに

常に身をなくすることを修行せしを思ひいてよ、

なからへてありとや人のおもふらんなき影よりも先立
し身を

来る春は帰りき給ひなんと年のくるよを待渡りしに
かひなき春をむかへ侍れば、

かゝりける春ともしらて朝夕にくれ行年をなとか待ら
ん

夕暮に西の空をなかもやりて、

のほりにし烟の末をおもふにもいとよそなたの空そ悲
しき

心とめ給ひし鶯のあした毎に来てなくもあハれに覚
侍る、

とまる身のあハれをしるや朝なく来てハかたらふ宿
のうくひす

卯月晦日、おもてへ中うつりとして行あした、常より
も心ありてやと過にしかるれと心ひとつにおもひ

つゝけて、
驚も残る我さへ住かへて昔かたらふ友やなからん

うつり行まよにきしかたの事とも心にうかへて、わ

か竹のさかへゆかん代々をおもへハ、「本ノマ、」いみしくて何

事も思ひあへず、十日あまり中うつりの住居して、

世のさてくヲハリゆくにつけてあらましかハとお

もひいてられて、

ことに出ていはぬ思ひの悲しさをおなし心にとり人も

かな

家居も程なくうつりかハリなとして、寄居給ひし柱

の形見たに、なくなれにしかたの名残とてハ、砌の

松の梢、朝夕よそに詠やるのミにて、あちきなく悲

しき心ひとつに歎わひて、

歎ても命はかきりあるものを今身の上におもひしら

るゝ

在し世に月に心とめ、分て入かたの月を詠しに、今

ハ陰なき空も涙にかきくれて、月ミる夜半もなし、

見れはまつ（舞カ）佛さそふ悲しさにも今ハうとくなりぬ

る

八月十五夜月をもみしとつれなく顔つくれと、月は

なの折すこさすもてあそひ給ひしものをとおもひけ

ること、むねにミちぬる心ちするに、月も心ありて
やくもりぬ、

心から今宵もめてぬ我ための折知かほに月そくもれる

一めぐりをとふとて、我もつゝきてなく成なん、た

て置ししのかひなからましと、身のなからへを

なくさめておもへと、はや一とせおくりぬる身の悲

しさ、今更問もせきあへず、

おくれしといひしなからに一とせのなきあたとふもあ

ちきな的身や

きさらぎに火出来て寺ともあまたやけぬるに、ほた

い所の寺も類火せしかとも、此度の法のわさとり行

はん為とて、やうくつくりはてぬるよしを聞て、

三とせの命もしらねは末の九日に詣てゑかう申侍ら

んと入相のころおもひ立、行道すから雨とふる涙ハ

せんかたなく、詣へき名を見るにいと悲しさ人も

心よハしとみるらん、我かくあらん事かハと涙をお

さへ心をしつめて、一すしにゑかう申しか、佛を拜

ミ奉りて、

たのめおく我もろともに九つの品のはちすの上に生れ
ん

師走中の六日にかきくらし雪ふりけるを見侍るに、

雪月花の時と古人もいひ、分て雪には心をとめ給ふ、

今ハの時も末の六日よりおなしく九日まで雪ふりけ

るよし人のかたれば、

花にこひ月にハおもひしら雪のふりぬる人をいつか忘
れむ

十一月廿四日

此一巻の書は、前中将光久公の北の御方陽和院殿、
さらぬわかれの御歎きのあまりに、折にふれ時に到り
ておほしめしつゝけさせ給ふ御歌を、東の都よりやつ
かれにくたし給ひぬ御心はへのかしこき一かたならず
覚えて、朝な夕なに拜吟し奉るたひくくに、涙の外は
知る人もなく、ふかくひめ侍れとつくくとおもひ侍
るに、「本ノマ、候」かたとたにあわれふかくやんことなき言葉の露を
末の世までもらして、哥に心よせ侍んかたくの道の

たつきともならんかしなとおもふもいとあたらしく
て、みつかからかふしなきもくつを巻の奥にかひそへて
ゆつり聞え侍れハ、目に見えぬ鬼神をもあわれとおも
わせ、男女の中もやわらけ、たけき武士の心をもなく
さむるハ哥なり、むかしの人もいひ置侍れハ、後の人
哥を思ふ中立とならん事を願ひて、軽りの奔のはゝか
りをもわすれ侍、罪をゆるさせ給へと、和哥の三神に
禱り奉るとそ、

元禄九丙子大寒日

廣照院恵圓尼

かしく 年山記聞書抜

蜻蛉の日記に、八月まつほどにそこにびゝしうもてな
し給ふとハ世にいふめる、それかしもうめきもきこえ
てん、かしく、

今按、是も道綱母のふみなり、女の文にかしくと書
事ふるくより也、日本記に恐惶の字をかしくしこと点
したる同し意なり、あなかしこといふあなハ古事記
ニ甚た切なることはとあれハ、誠惶謹言などいはむ

か如し、字をかりて穴賢と書たるに付て俗説有、用へからず、

たらちね

御釋ニ云、垂乳根ウツチネとハ、母ハ乳味を垂て児をやしなふ故にいふか、集中にたらちねと置てハ母とのミツムけたり、昔此集をよく見さりし時、母をあやまりておやと讀けるにより、古今集に初てたらちねのおやとよめり、後に父をたらちを、母をたらちめといふ説さへ出来て、哥仙集の中にもたらちをとよめる哥見えたり、此集にたらちめとよめる事たになし、況やたらちをあらんや、第三ニ父母と書てハおやと讀り、其外父母の字引わけてかけるを、いづれもおやとよめることなし、若あらハ点のあやまりなり、今證を成して後の疑を止へし、以下二十二首の證哥をハ略ス、皆たらちねの母とのミ付たり

此外、古来のあやまりを正し給ふ事餘多侍り、右の三件二件ハハ、或ハ讀やうをすみてよちはやふるをにこる、或ハ点

のあやまりあさもよしをあ、或ハ母にかきりたる詞をさもよひと点し父にもわたしたらこれら人々常に口なれたる詞な

れハ、略して書付侍り、願くハ哥林の人あやまりを改るには、かり給ふ事なかれかし、

頼政上階

玉海曰、治承二年十二月廿四日癸丑、京官除目也云々、今夜頼政叙三位第一之殊事也、是入道相國奏請ト云々、其状ニ曰、源氏平氏者我國堅也、而ルニ於平氏者朝恩也、普一族威勢殆滿四海、是依勲功也、源氏之勇士多與逆徒當誅罰、頼政獨其性正直勇名被世、未昇三品餘七旬尤有哀隣、何覽近日身沈重病云々、不赴黃泉之前、侍授紫綬恩者、依此一言被叙三品云々、入道奏請之状雖賢時人莫不驚耳目者欵、

今按、此年皇子安德誕生清盛入道の外孫ましくたれハ、入道相國何ニ而も善根を修し、行末の繁栄を期せらるゝ心より、彼の成經・康頼等をも嶋より召返せり、頼政を三位に申なされしも此心底よりなるへし、され者當時入道の詞に其性正直勇名被世と云八字ハ頼政の実事にして眉目を後世にひらく成へし、

新井白石紳書

一 友をシノフ杯ハ僂ノ字也、故郷をシノヒ昔をシノブハ憶の字なり、かくれシノブハ隱の字、又ハ人不見共書心に堪シノブハ忍の字なるへし、

一 問状御教書同也といふハ問状の御教書也、自將軍之状有之杯、御教書奉書同書也、此内御教書ハ賞翫也、御教書ハ十三人の奉行と談合有て書也、將軍の御意を受けて、奉行人我か名判をすへ、我則あたるゝ方に少く奉一字を書出を奉書といふ、内書ハ奉行共相談せず將軍我意計に状を遣をいふ、

一 十節記ニ白馬を馬の性の本とす、天に白龍有地に白馬有、天の用ハ龍也地の用ハ馬也と申本文有、又禮記といふ文に、春を東郊に迎て青馬七疋を用ると見え侍り、白馬を青馬と申侍るハ陽の獸也、青ハ春の色、きハめて白き物ハ青めきて見ゆる物也、されハ青馬ともかよひて申にや、正月七日に春馬を見れハ、年中の邪氣を拂ふといふ本文侍る也、今の童部の春駒といふハ是より始りけるにや、

一 正月に弓射るハ射禮とて、昔ハ 内裏に弓ゐる事有し也、孝徳天皇の御宇に正月に弓をいさしむ、十月五日射場始といふ事むかしハ有之也、公卿已下束帯ニて是を射る也、天子も御射席に弓矢を御座の左右にたてる、是ハ文武二道を以て、一を欠へからざるか故に、今 天子も弓場殿に出御、武道を習はせ給ふ也、世の乱るゝ時ハ武を以し、治る時ハ文を以おさむと申也、されハ治るとてわすれされとと申す也、是によりて、まつ年の始に射る事ニなれり、

一 卯杖ハ、をのつから唐土にも桃枝を用て悪氣を拂ふ事の侍る也、本朝のおこりを尋れハ、 持統天皇三年正月の卯の日大学寮より奉る由日本記に見えたり、其後仁壽二年正月、諸衙祝の杖獻して魘魅をおふと見えたり、只是拂ふ心なり、うつゑと云物ハつかも所よりす〔本ノマ、レ〕はまの作り物の上に荒ほを作り、いはほの中にハ生氣の方の獸を作りてたてまつりて卯杖にあはしむる也、たとへハ生氣東にある年ハうさぎを作り、南に有年ハ馬をつくるなり、延喜式を考れハ、兵衛督以下まいり

て御杖をそ申けるとあり、色々の木共を五尺三寸ツ、

にきりて、二束三束にゆひて奉る也、是を正月上の卯の日奉れハ卯杖といふ也、

一薬玉ハ、凡けふをハ薬日といひて、一切の薬をハ此日取る也、されハけふ薬草を五色の糸にてとよのへて肘にかくれハ、悪氣をはらふと申本文侍るにや、おほやけにも群臣に薬玉を給ふ事侍る也、

一六月朔日氷をくふハ仁徳の御代より也、

一水無月蔽ハ 天武天皇の御時よりはしまる也、大ハラへと云ハ朱雀門にて百官一同にせしとかや、

一七月すまふとる事ハ、日本記に垂仁七年七月と云也、

以上紳書

137 一度景の始、慶長十五年の秋、新伊斯把尔亜ト國の商船、

難風にて日本へ漂着せしにより、船を修覆し、糧米を給ハリて還されける、同十七年、其國より使を日本江遣して奉謝、其禮物ニ自鳴鐘一口を献上し、此時より始て日本ニ度景と云物有、

138 一天下武家の世と成て、國衙ニ守護を補し莊園に地頭を

任す、國衙とハ國の府にある役所、莊園ハ地方の知行所也、古より國衙にハ朝廷より人を下して國政をさせられし、これを國司と云、所謂受領也、親王公家衆地方の知行を取給ふハ代官を莊園に下して其裁判をさせらる、是を領家といふ、

頼朝の世、大江廣元頼朝に告て國衙に守護を置て國司におし並て、其國中の兵乱を鎮め、莊園にハ地頭を置て領家におしならへ、其所の盜賊を追補させんとす、此後諸國の御家人と云ものハ即此守護地頭なり、

〔白石退私書に〕

一又太平記に、國にハ守護を置き莊園にハ地頭を置くと有事を委く記す、又所にハ地頭つよくして領家ハなきかことくと、所とハ莊園也、領家とハ其庄を領する人也、斎藤別當、近年御領に付られて武藏國長井に住すると有も、永井の庄を實盛の領せられて、実盛其所を治めし故也との玉ふ、

139
「、」
(本文書八九号文書ト同文ニツキ省略ス)

140
「、」
一 今月十一日池田右近事罷下▽㊦書状△、并口上之趣、

具承本望之至、先以 公方様被成御上京、則 御目

見得相濟候由目出度存事ニ候、殊「三」又八郎殿「二」

も同前ニ御目見得之由、年少之儀、候条、御前(①從)

かゝと自是心遣千万存候処、如何にもおとなしく御禮

被申上候哉、就夫奉始 上様、御参寄衆其外御前ニ御

座候人衆、何も御褒美之躰ニ御座候つるよし承、扱(①いれ)

寄特成儀と老顔之満足不「可」過之存候、此等之趣、(①御祝儀)

御祝言為可申、不圖企使札候、上様御在京之儀、候(①御祝儀)

間、不及申候へ共、公界可然様、彼是可被入、念事肝要(①申及)

存候、将又我等煩も于今無相替儀候、老躰長々病床(①申及)

と申、弥草臥之儀御推量之前候、併養生無油断「之」(①申)

条御心遣有間敷候、猶期後音「候」、不能詳候、恐々、(①御使)

六月廿四日 東郷長左衛門△
薩摩守殿 「惟新」
(鳥津家久)

(本文書ハ「旧記雑録後編四」一六一一号文書ト同一文書ナルベシ)

141
「、」
(本文書八一三二号文書ト同文ニツキ省略ス)

142
(本文書八一三三号文書ト同文ニツキ省略ス)

143
猶々さいしやうとのへ御心へ候て、おほせられへ
く候、たのミ存候、

一 追而令申候、拙者息女か事、當家人しちとして十三ヶ

年在京いたされ候、此程我等申付候間ハ三清夫婦、其

後ハ存松夫婦つけ置申候、さして用ニハたゝぬやう候

つれ共、見かけハよく候キ、今程ハ平田豊入如此ニ候、

いちゝ駿河なとも下候、川東善さへもん・猿渡九郎左

衛門尉までにてハ、外聞実儀不可然候、又八郎殿御置

目頼母敷からす存候、本六なとニさへしかくゝとハ不

知仰置候欵、殊にかの者共此比ハ罷下候やう、承及候、(①本ノマ)

いかゝ候哉、こゝよりハ何と被仰付候らん、無心元存

候、又八郎殿へも此理り同前ニ申候、さてハこゝより

ハしちヲハ別ニ御分別被成候而、むもしか事ハ下向さ

せられ、なかゝにめしをき候へかすと存候、我々(①と)

世の時こそしちにて候へ、今程ハ公儀ニものくましき

欽と存候、又八郎殿へ御談合尤ニ候、兼又又八郎殿何

事も神妙ニ見え申候、目出度候、酒過候ハぬやうニ細

と可被仰候、又たゞれさうにもなき座をたゞれ候事、

なをし度候、然共我々むかしかたきハ當世[㊦]不合候条、

不及是非[㊦]候、恐々謹言、

〔慶長四年〕

〔上書〕

〔本文書ハ「旧記雜錄後編三」八四八・八四九号文書ト同一文書ナルベシ〕

144 「二階堂三右衛門藏」

一 忠久下向被申候之處、三州皆御奉公之儀等此前京都へ

被申上候、御返書之條、市来・二階堂彼両家之事ハ薩

摩國之為御家人之間、直御奉公之由、被仰下候、任先

例御分別肝要候、恐惶頓首、

貞親

市来筑前守殿

御宿所人々御中

本田信濃守

〔本文書ハ偽文書ナルベシ〕

145 一為高麗征伐、被遣武士候、同可罷渡之由被仰下候也、

恐々謹言、

建治二年二月五日

久時在判

吉田次郎殿

〔本文書ハ偽文書ナルベシ〕

146 「正文本田助之丞ニアリ」

一 今度爰元之出合之後、以使札[㊦]共雖可申上候、通路無

之故乍存候、然者去三月石田治部少輔殿より為使、桜

木平右衛門[㊦]殿被罷下、此中當地へ滞留候、早々罷上

度之由候へ共、海陸共ニ往返不罷成[㊦]ニ付而、于今延

引候、此節上洛之儀候条、老人相添差上候、此表之様

子、可預御取成候、殊[㊦]去春之時分、武庫様よ

り御直書被下候、謹而拜見仕候、其御請文相〔良源〕

五左[㊦]まで申上候、定而可被達 上聞与奉存候、其時之

御書面ニ、我等進退之儀御心之及、可被加御懇[㊦]之由、

外聞実儀忝候、乍去爰許之儀、義弘様御意ニハ、は

たと相違仕候、其子細ハ、最前幸侃生害被仰付候由相

聞〔得〕候へハ、則濱之市江伺 上意^{①候}、幸侃御成敗

ニ付、武庫様 又八〔郎〕^{④ナシ} 様江我等身上之儀得御

意、いかやうにも分別可仕之通雖申上候、終無御納得^{④候}、

于今も諸口往来被成御停止、拙者事も幸侃同科ニ可被成御嘍と相見得候而、境目くも放火共候、何共

迷惑之式不可過御賢推候、就夫拙子身上落着之儀、

義弘様より不被仰下間者難相濟存候、然間一着之始末

▽^④奉頼候△、此等之趣、早々雖可申上候、右ニ如申

上候、當時被召籠躰ニ候へ者、乍存疎意之様ニ候、定

而我等儀ニ付、種々無筋儀をも御耳ニ可入候、併毛頭

無疎略候、兎角^{④と} 武庫様を奉頼候へてハ不叶儀候間、

よろしく被仰上、急度一途相濟候様御披露所仰候、

恐惶謹言、

〔慶長四年〕

六月十八日

伊十院源次郎

忠真

肱枕老

〔本文書ハ「旧記雜録後編三」七六二号文書ト同一文書ナルベシ〕

一國元無吳儀候由、尤珍重候、今程者上方も一段御無事

ニ候、庄内之儀いか候哉、時分柄之事情条、旁賢慮^{④如何}

此砌ニ候、少将殿若輩之儀候条、從 龍伯様每事被仰

聞候之様内々入魂可為祝着候、期後音之時候、恐惶

謹言、

〔慶長四年〕

七月十三日

惟新御判

山田越前入道殿

種子嶋左近太夫殿

〔本文書ハ「旧記雜録後編三」八〇三号文書ト同一文書ナルベシ〕

148
▽^④◎草案△

一御下向已後、度々以書状申入候、定届可申候、上方一

段御無事ニ候、國元替儀無御座候、庄内辺之儀、無

心元候、先札を以申入候様ニ、庄内を實所御家中よ

り、魚塩などを下々通し候由風聞候間、無美所儀なか

ら承付候通申入候き、さりともさやう儀者有間敷と

存候處ニ、庄内より落人多々有之〔候〕而、右之風説

事実之由、國元より追々到来候、此上ニ而も正儀有間敷与存候處、石治少より、去春庄内へ被差下候使者、貴所家中之儀ニ罷通、則源次郎ハ合同心、此元へ罷上候、是ハ歴然之儀ニ候、如此候時者、貴所家中より庄内へ通用有之儀、無其紛、於此元直申談候上御取置之段、さりとてハ無御心元候、大小名によらず、君臣上下之例法古今不殊儀ニ候、源次郎事ハ可食出之由、龍伯・少将前より度々申きかせ候処、于今令籠城、企鉾楯候之儀曲事深重之由、内府様も被思召ニ付而、天下之見せしめ、御治世之上ニ候条、御人数をも被指下、急度可被仰付之由、切々雖被成御詫候、龍伯・少将に在國候間、其儀ニ及申間敷之由、先々申延候、如此内府様被入御念被添御心候而、其元為可被聞召合、山口勘兵衛尉事被差下候条、貴所家中より庄内江通用有之段、於事实者、早竟一揆御同意ニ可相當候欵、御為不可然候、又直談ニ申合候筋も無篇、罷成候之条、彼是御心中無御心元候、定御理茂可有之候へ共、當時御手前より下々私「一字不知」ニて茂、勿論貴所御存候之上

〔一〕字不知

〔二〕曲

ても、庄内へ御通用候へ者、萬々無曲次第候、高麗已来別而申談間之儀候条、心底之通申入候はねハ、此跡申談通、皆以偽ニ罷成候間申入候、龍伯・少将在國候条、諸事被仰談、可被添御心此節ニ候、萬々頼存候、右之様子寔正儀有〔之〕間敷候へ共、承付候通有之仄申入候、恐惶謹言、

〔慶長四年〕

八月十八日

羽兵入
惟新

伊東豊後守殿

御宿所

〔本文書ハ「旧記雜錄後編三」八四一・八四二号文書ト同一文書ナルベシ〕

149 「正文本田助之丞」

一、尚々内府様為御使、寺沢志摩守殿可有下向之由候、一段其内能々遠慮肝要候、▽◎以上△

其後者不慮之儀ニ付而不通相過候、併遠方故ニ候、一六月廿七日之書状、七月廿六日相届、令披見候事、

一幸侃事ハ、連々悪心歴然ニ付而、被加御成敗候条、不及是非候事、

及是非候事、

一 貴所進退之儀者可被食出之由、龍伯様・少將殿より
 度々雖被仰聞候、身躰之一着無之ニ付而、于今籠城之
 由、其上伊東豊後〔守〕殿被暖候へ共、是も龍伯様
 御前より身躰一着不被仰出事、早竟源次郎被申儀、
 龍伯様不被聞召届欵之由承候、此段者貴所被申分も、
 又龍伯様御返事之通も不存候間、いかやう共難申
 候、とにかくに君臣上下之例法、貴所一人ニ不限儀ニ
 候之条、勿論一着〴〵之儀△無之候共、龍伯様御控
 次第、應其旨被罷出候へハ、縦御成敗あらせられ候共、
 名字之恥辱ニ者成間敷候、相背御下知被果候ハ、且
 ハ臆病ニて不被罷出ニも相似、且者無道至極ニ候、天
 道ニ〔も〕はなされ、家之始末をしられさるよし、自
 他國之嘲哂無念之儀ニ而者有間敷哉、若輩之者共邪
 なる儀を申にしたかひ、家をくつされへき儀、さりと
 てハほかなき事ニ而候、當時一味ニ腹を可仕と申者
 も、はて〳〵ハ皆以令相違〔候〕、貴所一人之迷惑之
 及はれ〴〵〇へき△事眼前ニ候、近年も多人數被相抱候
 大名衆も、腹之底ニいたりてハ只耆人ニなられし儀、

貴所も〔御〕存之前ニ候、如此之儀者、愚老年久し
 く自他國之上ニて多々おほへ有之事ニ候、能く思惟遠
 慮此時候事、
 一 幸侃成敗之刻、則小傳次を始兄弟中、無別儀可被食
 出之旨、以神文少將殿より被仰聞候、然者小傳次兄弟、
 其外家中ものとも一同ニ奉公別儀有ましく旨、神文血
 判を以御受申上候、就中加治木・吉田事ハ各別之儀ニ
 候〔之〕間、早々罷出、御奉公可仕之旨、愚老前より
 境之津ニ至ても申聞せ候得者、親之火忌之内ハ如何
 候条、火忌はれ候ハ、追付可罷出之由申補ひ、ふと
 加藤主計頭〔殿〕をたのミ罷出候て、弥逆心之企無其
 紛候間、不及是非鞍馬之様ニ被遣置候、然れ兄弟伏見
 へ相越、さか木原式部少輔方を頼ミ、内府様へ御奉
 公可仕之由言上候ニ付而、内府様一段不可然之由被
 仰出、式部少輔も此儀取次申ニおいてハ可為曲事之
 由、不淺被成御詫候、又徳善院へも内之者ニ罷成度
 由致訴訟候へ共、勿論徳善院も無御受付候、如此ニ
 慮外之才覚以之外候、剩貴所事も于今籠城候而企幹

楯、然与御敵を申され候条、右兄弟之者共身躰（◎）あやうきに付而、又と関東之様ニ可被（◎）暖相定候事、

一貴所を被食出候而、知行等如何程可被遣候（◎）茂、此方より難計候、雖然被食出候程ならハ、堪忍ならぬほと（◎）にハあるましき欵と存候、此段者、愚老在之事候条、

随分心を添可申、萬事を差捨罷出候て、此節企鉾（◎）何欵と延引慮外之由、御侘被申候ハ、別儀有間敷候（◎）欵、返すく道ヲ道ニ立られ候ハ、肝要ニ而、貴所進退之儀、愚老吳見次第と、今度之書面ニ相見候間、

貴所進退之儀（◎）不殘心服令書載候、無矣儀候様ニ分別あるへく候事、

一貴所前より預候書状則写候而、竜伯様為可懸御目指下、様子申上候、於其元も愚老へ示給候通、少も無相違可被申上候、恐々謹言、

「慶長四年」
八月六日 義弘御判

伊集院源次郎殿

（本文書ハ「旧記雜錄後編三」八三九号文書ト同一文書ナルベシ）

150 「案文」

▽◎已上△

「一、」
一急度令啓（◎）「上」候、仍今月二日御在所被成御打立、薩へ御下向之由、先札度と相届（◎）、寒中と申、旁御辛勞之至無申事候、小摂被成御同心候哉、然者今月二日庄内江又八郎着陣仕候由到来候、先以珍重（◎）「奉」存候、時分柄▽◎与申△、貴所御下向幸存候、何之道ニ而も、又八郎為可然様ニ御才覚頼存候、其元様子無御心元存候（◎）、為可承飛脚申付候、様躰可示給候、恐々謹言、

十月廿六日 羽兵入 惟新

寺志摩守殿 御宿所

（本文書ハ「旧記雜錄後編三」九四七号文書ト同一文書ナルベシ）

151 「正文あり」

▽◎以上△

一今度幸侃罪科無糺明成敗被仕候儀、一々迷惑之次第候、

（本文書ハ「旧記雜錄後編三」八三九号文書ト同一文書ナルベシ）

就其我等進退も、去三月以來被取籠寃(ニ)重々非道

之嘜共候、或表裏之儀、或龍伯・兵庫頭文相違之

儀、中々難申尽候、其段条数別紙(ニ)相添候、彼是所存

之趣、無損藏御両所へ申入候間、御取成所仰候、とか

く我等事(ニ)嶋津代々(ニ)者候条、一篇ニ薩州へ

雖奉公仕度候、如右何事も非正儀候へ者、自今以後之

儀、毛頭頼無之候、勿論龍伯・少将對我等、此内之心

底可相殘儀格護之前候、然時者拙者を無等閑可被召仕

儀有之間敷候条、志摩守殿以御分別、何方へ成共被召

出候様(ニ)奉頼候、自然此旨 内府様へ被仰上、曲事之

段被仰出、雖被加御成敗候、不及是非候、其時拙子忝

人罷出、如何様(ニ)も可任御嘜候、右之走(ニ)可然様御披露

奉頼候、恐惶謹言、

「慶長十五年也」

十一月六日

伊集院源次郎

忠真判

平野源右衛門尉殿

高島新藏殿

「右之包紙アリ、庄内嘜之刻、伊源二郎寺志摩守殿へ進覽候證文也、

然者為後證、於伏見志摩守殿・維新此封目ニ在判」

〔本文書ハ「旧記雜錄後編三」九五〇・一二七四号文書ト同一文書ナルベシ〕

152 〔本文書ハ一九号文書ト同文ニシキ省略ス〕

153

▽ 口上 △

一一書申入候、然者御系圖、今月始(ニ)太田備中守殿

へ可差出与存候処、若君様御誕生ニ付而、御取籠之

由候間、延引申、去廿一日備中殿へ持参申候、御系

圖を被成御請取、古書物者御家之重寶ニて候(ニ)

条、書写候而可差上之由、被仰下候而、則写(ニ)昨朝持

参可申由被仰候間、能勢喜庵備中殿御存之人(ニ)而(ニ)候、

致同心伺公申候処、道春之親子被召寄、御系圖其外古

御書物被成御見せ、 忠久様已来之儀少も不審懸(ニ)不

申、御文書之内北條家之判など皆々被見知、已(ニ)時政

判(ニ)御座候書物ハ、廣元之手跡ニ而候由被仰候、

頼朝之御子忠久、大友時直之外(ニ)も御座候、是も恐御

臺所、他家を御名乗候故、世間不知之由、御物語ニ而

候、静ニ御尋申候而書付相下可申候、諸大名之系圖近

家ニ而候哉、多分一枚紙ニ而相濟候、就其御當代之儀

〔を〕^(16ナシ)細々被入書候、此方之御系圖ニも近代之儀を書

入可申由ニ而、^(16案)条書被差出候、^(16元)多分爰許之衆も為存儀

多候得共、其内不知事共御座候故、道春之条書ニ理書

仕、差下申候、〔急度被成御記可被召上候、兎角道春

へ御尋申、爰元〕にて書せ申候ハてハ、又なをり可申

候、道春〔も〕^(16ナシ)大隅様已来被下御目候于今少も無

他事存候間、如何様ニも可有助言由被仰候、筆者平

田六郎右衛門〔へ〕^(16ナシ)少書せ候て〔見申候〕、一段能候

之間、書せ可申欵と右衛門佐とのへ談合申候、御系圖

此中出候諸大名之系圖ニ相替、御代々共永別而細〔ニ〕^(16ナシ)

御座候間、備中殿被仰候、何とそ被成御急条書之段、

可被仰上事奉存候、先々御系圖之一筋ニ御不審共無之

候間、目出度^(16奉)存候、御系圖御調之儀、圖書殿・河上

上野介殿御當之儀ニ而候間、可申入候へ共、御談合可

入儀多々御座候故、如此候、恐惶謹言、

尚々諸大名之系圖者三部一上り申候、加賀・肥前

殿なと系圖未出候由道春物語ニ而候、又 黄門様

御昇進口宣之写此餘尋申候へ共、未見出申候ニ付、

其許被成御写、早々可被差上候、已上、

〔寛永十八年辛巳〕
八月廿七日 川上因幡守

久國

彈正大弼様 下野守様 額娃左馬頭様

鎌田治部少輔様 山田民部少輔様
人々御中

猶々▽◎高原△□吉田□狹守可被召退由

相聞得、庄内へ追々以御使御頼之由、重疊被仰越

▽◎候而△肝要候、彼境も今迄者御味方之由聞得

候、彼は無御油断御賢慮可目出候、然者彼一通□

□使罷帰、関白様へ御指出之由承候、誠一大

事之儀ニ候へ共、急ニ差寄候て参〔り〕^(16ナシ)候間、先

以可目出候、就夫福智三河守欵、さてハ石田□

両人之間ニ忝人御家景、召留候て、御指出候やう

に御調儀專一候、乍不申此度御指出之儀、寔ニ一

〔本文書ハ「旧記雜録後編六」ニ〇五号文書ト同一文書ナルベシ、尚◎ニハ尚々書
ハナシ〕

大事之儀候条（能く）よく御立願など候て可目出候、

乍重疊御指出なき（言）深（フ）々數御立願肝要候、

一急度令啓入候、仍忠棟之事從日州出船之由、此元へ到

来候、今程者其元江墮忍候之哉（之）居候欵、示預

度候、一、入来院之事、題目之在所ニ而候、条、典厩

差籠候而堅御番可然候する由、從金吾被申越候、尤之

儀候条、早速從 御前被仰渡、典厩（せ）差籠候事不可

有御油断候、一、真幸之儀者日州菱刈通路之境ニ（道）（而）

候間、京衆細々罷通候、彼衆物（語）子承得候分も、

家景手強差答候ハ、無事之調儀之真（も）可事（言）相聞

得候て、涯分手強御分別肝要候、一、祇答院之事、堅

固ニ持答候するよし（出）、從金吾承候、乍去一所之衆迄

付（被）召籠候へかし、被成談合可被差答之由候之条、是

も直ニ被仰付候而可目出候、一、飯野之事、随分手強

可持答寛語ニ候、乍去當城之儀者城惡候条、自然埋草

など仕候而取寄候ハ、則時ニ可相迫候、左候而者御

家景も可及一大事申之条、此元差答候する内ニ、諸篇

急速之御談合專（一）、此度日州於御安堵者、宮崎

之事 霧嶋へ可為御拜進由、御立願可目出候、さて

ハ高原之儀も同前（二）可有御寄附、御祈念肝要候、存分

之儀共候之条申事候、此等之段御披露所仰候、恐々謹

言、

「天正 十五年」五月七日 義珎御判

本田下野守殿 兵庫頭 義珎

（本文書ハ「旧記雜錄後編二」二九一号文書ト同一文書ナルベシ）

155 一態令申候、相守時分柄、自然下々ばはんニ罷渡族可有

之候之間、堅可被停止候、若背御法度、罷越候儀重而

聞付候ハ、其身之事ハ不及申、一類悉可被加御成敗

候、其上御手前可為御越度候、恐々謹言、

（慶長四年） 四月朔日 利長

「宰相宛書ノ御書内府公書詞ノ外此 輝元

五大老ノ書亦外ニ不見、同年五月 十一日ノ書付連名ノ廻文ニハ有蘆 景勝

摩待從（侍） 景勝

▽◎秀家△

家康

羽柴薩摩宰相殿

羽柴薩摩少將殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編」二二七五号文書ト同一文書ナルベシ)

種子嶋三郎次郎殿(久時)

(本文書ハ「旧記雜錄後編」二二七五号文書ト同一文書ナルベシ)

158

尚々乍輕薄銀(子)拾枚合進之候、寔驗而之書付候、(一本補空審計候、以上)

一尔来無音非本意候、仍愚息又八郎上洛之砌、御宿所へ

被食置、殊庖瘡煩ニ付、貴所御夫婦種々被添御心▽(一)

之由△候、誠ニ畏入存候、切々以書状成共可申候之

処、手前何欵と取紛乍存候、帰朝之儀候ハ、追付可(一)

致上洛候間、旁以御面可申断候、恐々謹言、(一本承)

十一月廿一日 羽兵 義弘御判

堺津

麟やさま 床下

(本文書ハ「旧記雜錄附録」二二七五・二九七号文書ト同一文書ナルベシ、一本ハ二七五号文書ヲ示ス)

157

一嶋全領之、

當家之字懇望事、古今之例雖難計、先祖意釣已来、被(種子島惠時)

凌波濤、湛々坊戦之勲功不淺謂、準其感致免許之状如

例、

天正八年庚辰拾月五日 義久御判

159

一下國已後者、遠堺之故不申通、疎遠之至非本意候、旧(一)

冬春夏已来之懇志、而無忘却候、先以無事ニ令渡海、(一本ニ)

祝着此事候、此國之消息一日とても難栖在所難堪可有(一本ニ)

推量候、定〔而〕^(一本ナシ)其許者小哥なとニテ遊覽之想像計^(一本のミ)

候、助五遙々^(以)相隔、床敷存候、便宜之刻者、其表之

儀示給度候、責而書状^(以)成共見て、住吉辺之事を思

ひ出し、心を慰可申候、追々^(一本返)在津中夫婦被入魂、無比

類儀不断申出計候、女房衆たちへよく傳言頼入候、恐

々謹言、

霜月廿四日

忠恒御判

臨也老

床下(一本進)

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」三六五・三九五号文書ト同一文書ナルベシ、一本ハ三九五号文書ヲ示ス)

160

一當春之慶事珍重候、仍其已來不能書信背本意候、去年

中ハ赤國就御働手前取紛の便之刻も言傳さへ不令申候^(一本相)

段、先年芳志忘候哉、聊非心底ハ疎略候、遠境之故、^(一本之)

其辺之儀も不相聞、切々嗜迄、助次無為候哉、床敷候^(一本候アリ)

由申度候、将又、乍輕微綾子一卷、銀子一枚進之候、

寔音信之驗迄候、於様躰者、本田源右衛門へ申含候^(一本耐アリ)

間、不〔能〕^(一本ナシ)詳候、恐々謹言、

正月十九日

忠恒御判

臨也

床下

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」三六四・三九六号文書ト同一文書ナルベシ、一本ハ三九六号文書ヲ示ス)

161

▽⑩已上△

一中納言様始而御上洛之時分、其方親父臨也^(以)被成御宿

候処、夫婦別而馳走被申候^(以)付、雖為少分臨也江米廿

石、其方へ七石ツ、先年より被遣候、今度其方へハ^(以)

八石以加増、自當年向後拾五石之為御扶持候、仍為^(以)

後日状如件、

寛永永五

伊勢兵部少輔 貞昌判

卯月八日

下野守

平嶋休右衛門尉殿

久元判

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」一五二号文書ト同一文書ナルベシ)

162

▽◎猶々大隅之事重疊侘可申心底候、事成間敷段必定

存候△

「防戦之成立依^{◎不} 軍是非、頼川内へ差出相順迄候、然者

厥表之儀等色々雖致仕候、隅州^{◎ナシ}「之」事者國分ニテ長

宗我部被遣由堅被仰^{◎ナシ}「遣」候、猶々可申理^{◎成}覚語候へ

共、^{◎ナシ}「も」可難成様子候、扱者當時之身持^{◎成}之分別

候而、向後者可廻合地駄肝要候、春日八幡御照覽、隔

心之儀無之候、^{◎仍}為後日染筆候、恐々謹言、

「天正十五
五月十六日

義久御判

北郷入道殿

(本文書ハ「旧記雜録後編二」二九〇号文書ト同一文書ナルベシ)

163 「口略ス」

一其地之女從関東御用之由候間、五人程先々可被差渡候、

但十二歳より拾九才迄^{◎までの}之女可被遣候事、▽[◎]已上△

「慶長十七年款」
三月廿二日

三原諸右衛門^{◎花押}

伊勢兵部少輔^{◎花押}

比志嶋紀伊守^{◎花押}

▽[◎]町田勝兵衛尉

久幸^{◎花押}

△

三司官

(本文書ハ「旧記雜録後編四」八九二号文書ノ抄ナルベシ)

「慶長五年 惟新様伏見より 少将様へ被遣御書中之

内、始末略ス、

164 (本文書ハ二〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

165 (本文書ハ二一九号文書ト同文ニツキ省略ス)

一元和八年七月、光久公を御養子被成、龍伯様以来

御持傳之御系圖并御高老萬斛、財寶等迄御讓被成、其

砌 家久公嶋津下野守久元ニ被下候御状ニ、

166 (本文書ハ一九六号文書ト同文ニツキ省略ス)

167 (本文書ハ四三三号文書ト同文ニツキ省略ス)

168 (本文書ハ四四号文書ト同文ニツキ省略ス)

以上

追而令啓候、如仰 薩州樣國分江被成御住宅度由、以酒井讃岐守殿被成御披露候処、御免許被成候由、御奉行衆御連署之御奉書出申、誠目出度奉存候、 黃門様◎被成御下國候ハ、追付此段可被仰出由候間、御承可◎被成候、委細者野州老可被仰之間、不能詳候、恐惶謹言、

(寛永十三年)

六月十五日

川上左近將監

久國判

伊勢兵部少輔

貞昌判

彈正大弼様

山民部少様

鎌出雲守様

三左衛門様

貴報

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」九二七号文書ト同一文書ナルベシ)

(本文書ハ一一六号文書ト同文ニツキ省略ス)

「口略ス」

一 右條之者勿論最上之秘事也、然間 太守様御一人之外、我家を續子孫之外、委細傳授不仕儀也、就夫其方へ者弓馬之秘事一毛不殘相傳候間、於御當家誹申人曾而有間敷候、

忠久 忠義 久經 忠宗 貞久 師久 氏久 元久 久豊 忠國

立久公忠昌公へ御傳受申上候 川上十郎左衛門尉義久

天文九年 貴久公へ御傳受 川上十郎左衛門尉受久

義久公義弘公 久保公へ御傳受 川上十郎左衛門尉經久

川上十郎左衛門尉位久(倍力)

寛文二年寅六月廿六日 川上十郎左衛門尉久慶

川上七左衛門殿(久文) 後十郎左衛門法名亮庵

参

以上

一 先書如申、南蛮人搦捕 公方様御機嫌ニ思召由、上使以池田帯刀殿被仰出候、翌日為其御禮 薩州様被成御

登城候處、今度從薩摩參候御狀ニ下野守と御座候而、名字無之候、無心元様◎_二出合候、惣別御一門衆名字不被書儀、為何子細ニ而候哉と、薩州様◎_御直ニ被成御尋候、我々申上候者、從古來名字不被為書候、其通ニ而于今◎_も書不◎_被申由申上候得者、公方様御一門衆も皆々名字被遊候、他國も其分ニ候、自今◎_以已後公私共ニ皆々名字被為書候様、堅可申下由 御錠候、嶋津御名字◎_乘候御衆、何へも被仰渡尤存候、恐惶謹言、

「寛永十九」
八月十八日

川上因幡守 久國判
 額娃左馬頭 久政判
 嶋津圖書頭 久通判

山田民部少輔様

嶋津下野守様

参人々御中

(本文書ハ「旧記雜錄後編六」二七六号文書ト同一文書ナルベシ)

「前後略ス」

一當分籠屋之有所惡敷候間、郡本之野付辺ニ可被相直候、

せいらひ番付◎_{仕候}之由候、せいらひも其辺ニ◎_{ナシ}〔而〕屋敷被下移可被申由、被 仰出候、

(コノ間ニヶ条省略サル)

一折田勘解由・真蓮坊・田中善允、▽◎當夏△火事出◎_{出候}来、當分寺領ニ而罷在之由達 上聞候處、可被召出◎_由〔本〕マ、

〔被〕 御意候事、

一沖長門守罪科之儀御尋候付、書物差出候、今度御年寄衆へ差上候迎未被 仰出候事、

「寛永十九年」
十月十七日

〔別条三人連名〕
〔川上久國・額娃久政・嶋津久通〕

〔宛書同断〕
〔嶋津久元・山田有榮〕

(本文書ハ「旧記雜錄後編六」二八三号文書ノ抄ナルベシ)

174 「前後略ス」

一松平新太郎殿内衆、森寺清左衛門 殿と申人、御家御奉公申度由被申候旨、從能勢小十郎殿、前野州老・兵部殿迄被仰候付、被達 上聞候處、他國人ハ不被成御拘之由、御返事為被仰由候、然処 東禪寺・能勢小十郎殿より遮而被仰候、私▽◎ニ御△返事難成候故、入

御耳候処、他國人近キ比ニも少々(ハ)御拘被成候、

小十郎殿被仰分難黙止被思召候間、可被成御拘之由被

仰出候、新太郎殿ニ而ハ、高四百石為被給之由候、先

於大坂(ナシ)切米百五拾石被下、於爰元乘馬之御賦

可被下之由被仰出候、為御存知申入候、

寛永十九(ナシ)七月九日

宛書并下連名同前

〔本文書ハ「旧記雜錄後編六」二六九号文書ノ抄ナルベシ〕

175 一一筆致啓上候、前撰政様弥勇健被成御座、玆重奉存

候、然者同氏上総介、賀之屏風相調候付而、色紙形御(本ニアリ)

清書之儀、從左府様被仰上候處、今度之祝儀、格別

被思召上、御染筆被成下、頃日相届致拜見候、右(本)

清書(本ナシ)〔之儀者〕故実有之、不容易之事候由候處、被尽

御心候儀、誠以御懇之至辱(本悉)次第(本)奉存候、御禮為可

申上、如斯御座候、随而目錄之通致進上候、此旨宜預

洩達候、恐惶謹言、(一本ト)

八月四日

繼豊

中川石見守殿(長堅)

〔本文書ハ「旧記雜錄追録三」一三〇九号文書・「同附録二」四三九号文書ト同一文書ナルベシ一本ハ四三九号文書ヲ示ス〕

176 一芳佐披見、内々令約諾候賀之屏風、相調候、伸謝蒙、(信カ)

如目錄賜之、丁寧之至、怡悅之事候也、

九月八日

近衛 家久御判

薩摩少将とのへ

〔本文書ハ「旧記雜錄附録二」四四〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

177 〔本文書ハ四八号文書ト同文ニツキ省略ス〕

178 一大隅守逝去之儀達 上聞候之處、心底之程察思召候、

仍為香奠銀子五百枚被遺(ツ)候、御意之趣能勢小十郎

可述之候、間、不能詳候、恐々謹言、

寛永十五

三月十一日

阿部豊後守

酒井讚岐守

土井大炊頭

利勝

忠秋

忠勝

松平薩摩守殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」二二八号文書ト同一文書ナルベシ)

179 一所勞如何、無御心元〔候〕^{〔本ナシ〕}被思召候、漸及寒氣、其上

長之煩候之間、能之療養肝要之旨御意候、依之為

上使新庄右近被仰付、御内書并御鷹之鶴被遣候、委曲

可被述口上候、恐之謹言、

〔寛永十三〕

十月廿九日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

酒井讚岐守

土井大炊頭

利勝判

忠勝判

〔本ノマ、〕

薩摩

中納言殿

人々御中

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」九五〇号文書ト同一文書ナルベシ)

180 一所勞之由無心元候、然者久志本療治望之由候、則式部

少輔遣候、能之養生肝要候、謹言、

〔寛永十三〕

十月八日 家光

薩摩 中納言殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」九四四号文書・「同附録二」三四四号文書ト同一文書ナルベシ)

181 猶以是ハ貴殿迄内乘之、大坂ニ大隅殿舟有之候付

而者、右近殿乘被申候様ニ被申越、可然存候、以

上、

昨朝者種之得御意候、仍内之申候、松平大隅殿へ御

使之儀、新庄右近方昨夕被仰付、御内書并御鷹之鶴迄

被遣候、右近方今朝未明被罷立候、併路次迄、緩之と

被参候、此由薩摩守殿へも可被申達候、恐之謹言、

〔寛永十三〕

霜月朔日

忠勝判

酒井讚岐守

忠勝

伊勢兵部様

▽◎まいる△

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」九五一号文書ト同一文書ナルベシ)

182 (本文書ハ五三号文書ト同文ニツキ省略ス)

183 (本文書ハ五四号文書ト同文ニツキ省略ス)

184 一書令啓上候、今日ハ陸奥守様於御前御仕合能御座候而、目出度奉存候、先刻ハ御尋之由過分至極ニ候、隨而可然者無御座候へ共、栗毛馬一疋御小姓衆ニ御入由〔本ノマ、◎のせ〕進上仕候、能様御披露奉憑候、恐惶謹言、

六月二日 重信判

伊勢兵部少輔殿 安藤對馬守
◎重信 △

(本文書ハ「旧記雜錄附錄二」四四五号文書ト同一文書ナルベシ)

185 一松平大隅守殿二歳之息女、彼母儀共、御國許へ被引越

度之由、御願之通御老中被達 上聞候處、母弟國許へ〔◎心次第〕可違旨被 仰出候、被得其意勝手次第御引越候様尤存候、右之趣大隅守殿へ其方より可被相達候、恐々謹言、

〔寛文二年〕 伊沢隼人正 政信判
六月十八日 瀧川長門守 利貞判

北條右近太夫 氏利判

本多美濃守〔◎作〕
忠就判〔相カ〕

伊勢兵部殿〔貞昭〕

(本文書ハ「旧記雜錄追録一」九七一・九七二号文書ト同一文書ナルベシ、尚本文書ハ五六号文書トホボ同文ナリ)

186 一先年禁中筑地永井伊賀守申付候代銀、從御藏取寄相渡候御帳□出来、江戸被差遣候處、先例之通五万斛以上

割付可有觸旨申来候間、高卷万斛ニ付而者銀卷ノ目五拾式匁式分四厘四毛ツ、積、江戸元方御奉行江當十二月中可被相納候、以上、

十月朔日 戸田越前守〔忠昌〕

松平大隅守殿〔光久〕

(本文書ハ四四号文書トホボ同文ナリ)

187 (本文書ハ四六号文書ト同文ニツキ省略ス)

188 (本文書ハ四七号文書ト同文ニツキ省略ス)

一年甫之賀慶、且如目錄贈之令祝着候、弥平安超歳珠重、

此邊同前、尚期後音候也、

〔寛保四〕

正月廿五日

〔近衛内前公〕

御判

薩摩中将殿

(本文書ハ「旧記雜録追録四」一九六三号文書ト同一文書ナルベシ)

一營中進使者序寄一翰候、青陽加儀^(實)珠重、弥可為平安、

此辺無事、仍如目錄令贈与候也、

〔寛保四〕

二月十八日

〔近衛内前公〕

御判

薩摩中将殿

(本文書ハ「旧記雜録追録四」一九六九号文書ト同一文書ナルベシ)

嶋津彈正文書之内写

〔下野守常久〕

一慶長十五年、伊勢兵部少輔貞昌日置へ為御使被差越候、

其意趣

太守様ハ山下ニ被成御座候間、鹿兒嶋上之山

御城御預テ被成候通被仰聞候、夏上之山へ先罷越作事

家居出来、一身者先八月より罷移掛而御奉公仕候、

一同十七年壬子、家久様御成高式千五石、内伊作中之

里・鹿籠・知覧・指宿・高山西方・庄内繩瀬名拜領、

合被任壹万石餘、

一慶長十八年十月廿五日、妻子引越、日置より上之山へ

罷移候、御鍮拾本・御鉄炮拾丁・御弓拾挺、御使比志

嶋紀伊守、伊勢兵部少輔内儀へ御樽御料拜領、御使弟

子丸越後守、

一御城御普請、稻荷ヶ尾切立并鐘ツキカヲ外堀切寄御普

請申付候、

一彈正下司之儀、今程ハ少弼と被書候、自今已後者位も

能候、又よむよく候間、大弼と可然候、

(本記事ハ「旧記雜録後編五」五一三号ヲ示スモノカ)

一 猶以每事大学助へ内談候て、此方へ可有注進儀於

有之者、無油断不寄何時早々可被申越候、以上、

※ 國之風脉依邪僻危成行候由、令承知候、寔頼朝已来相

續之處、於我等家督之時節、存亡之危難不堪悲歎候、

因茲、今度野村大学介へ申含、指下候間、被遂熟談、

東郷肥前守など〔本ノマ、〕密談、其元之様子細々伊東二右衛門尉にて可被申越候、将又家老職之儀申遣候間、万事被相嗜、諸人神妙〔ニ〕存候様、分別肝要候、不可有緩疎候、恐々謹言、

※「本行之通被仰付候付、治國辭教不見、不得止事、五月より始〔字不知評定所〕」
〔本記事ハ行間ニアリ〕

「寛永十年」

十二月七日

家久御判

彈正大弼殿

〔本文書ハ「旧記雜錄後編五」六七二号文書ト同一文書ナルベシ〕

191の2

一其元家老役之衆無人候之間〔年若〕、若年候〔とも〕へ共、彈正大弼〔許〕へ申渡候条、諸式談合尤候、猶委細者兩人可相達口上候、

恐々謹言、

「寛永十年」

極月六日

家久

川上左近將監殿

下野守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄後編五」六六九号文書ト同一文書ナルベシ〕

191の3

▽◎已上△

一書令啓候、然者其許家老役之衆無人候之間、其許之儀〔務〕下野守〔ナシ〕同前、諸式沙汰尤候、委曲〔此〕兩使可相達

口上候、恐々謹言、

「寛永十年」

極月六日

家久

彈正大弼殿

〔本文書ハ「旧記雜錄後編五」六六八号文書ト同一文書ナルベシ〕

192

「龍伯様」「惟新様」
御判 御判

天爵起請文之事

一老ケ条被仰聞、愚意申上▽◎候之△儀、向後永々無別心奉励御奉公、不限彼儀洩申間敷事、

一世上いかなる計策有〔之〕といへとも、其案ニ不入御奉公可申上事、

一他方之物沙汰承付次第、可致言上候、若我々進退〔之〕儀、於被 聞召付者、可被仰聞候段奉仰〔候〕事、

右條々於偽申上者、〔神之名〕

天正十七年五月廿四日

本田因幡守

正親判

八木越後守

嘉竺判

比志嶋紀伊守

國貞判

鎌田出雲守

政親判

伊地知勘解由佐衛門

重元判

圖書頭

忠長判

阿多掃部助

忠辰判

左馬助

增宗判

平田左近將監

藏宗判

伊地知伯耆入道

增也判

平田豊前守

宗位判

新納武藏入道

拙齋判

村田雅樂助

經宣判

田代刑部太輔

清辰判

▽川上源五郎

忠辰(花押)△

吉岡藏人

久延判

山田越前入道

利安判

稻留新助

長辰判

伊勢雅樂入道

任世判

平田美濃入道

舜廬判

(本文書ハ「旧記雜錄後編二」五九三号文書ト同一文書ナルベシ、人名配列順ハ◎ニヨリ補正セリ)

193

起請文前書事

一國分御上様へ我々親子進退之儀ニ付、御内談申上儀無

御座候、勿論從國分茂被仰渡無之事、

一菊袈裟事、國分御上様御養子ニ罷成候風聞仕候儀、努

々不寄存儀候之条、國分又何方へも不致内談候、於

自今已後も此等之企申間敷候事、

一何篇 奥州様御為ニ可惡儀を存企間敷候、自然世上於

取沙汰も承付儀候ハ、早々可申上候事、

右之旨若於偽申者、

慶長十七年壬子六月十六日 又四郎忠仍血判

きくけさ 血

比志嶋紀伊守殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編三」一六七五・一六七六号文書ト同一文書ナルベシ)

起請文前書之事

一今度之謂事、拙者毛頭不存寄通申上候處、無殘所被聞
 分、安堵仕候事、
 一於自今(○イ)已後、如何様之讒人有之(○ナシ)候(○イ)而雖申妨、無腹
 藏申上、互無御疑心御熟談之上を以、當家長久之調儀

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」九〇五号文書ト同一文書ナルベシ)

起請文前書之事

今度 龍伯様、又四郎殿を少将▽○殿ニ△被思召替、
 從京都御朱印御申下之由、乍承付不致言上、構疑心
 申之由被聞召通之旨、被仰知驚存候、就夫拙者事ハ、
 毛頭不承付之由、重疊申上候處、無矣儀被聞召分、此
 上者無御別儀謂共条々被仰聞、誠安堵仕候、於自今已
 後、如何様之讒人有之而、如右雖申妨不殘疑心、互御
 熟談之上を以、御家御長久之調儀可仕外、不可存疎略
 候、若此旨於偽申者、

「正文圖書殿」

(本文書ハ「旧記雜錄後編三」一六七七号文書ト同一文書ナルベシ)

所希候事、

一從京都御嘜之儀被仰下候、當家之御為を存、御嘜可
 然之由申候キ、曾構私曲非申儀候事、
 右之旨於違背者、御神名如常、

慶長七

八月十日

惟新

進上

龍伯尊老様

一一書申遣候、然者虎壽丸之儀、為國分之御子當家於相
 續者、龍伯様御一筋弥無別儀候間、於御納得者大慶
 被存候處、別而満足被成之由候条、如右落着候、因茲
 來月吉日次第、虎壽丸國分へ相越、祝儀可有之ニ相究
 候、連々我等内存ニ候つれ共、國分之儀相兼候處、御
 同懷ニ而祝着不過之候、猶喜入撰津守・伊勢兵部少輔
 より可申達候、謹言、

(元和八年)

七月十二日

家久御判

下野守殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一三五二・一七八二号文書ト同一文書ナルベシ)

197 一今度陣中之大将役兩人へ被仰付候、其上談合衆六人被

召加候間、何事も此方へ不及被得御意可申調之由、以

児玉筑後守被仰出候、甲斐掃部介・有馬左近将監へ申

合候間、可被聞召達候、恐惶謹言、

(寛永十五年)

正月九日

(島津久賀)

豊後守殿

(島津久元)

下野守殿

人々御中

久國

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」一七〇号文書・「同附録一」三〇一号文書ト同一文書ナルベシ)

198 (本文書ハ三九号文書ト同文ニツキ省略ス)

199 (本文書ハ四〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

200 (本文書ハ四一号文書ト同文ニツキ省略ス)

201 一急度致啓上候、然者嶋原之儀ニ付、九州衆不残今月十

二日御暇被遣、從御城直被^レ打立候衆も御座候、大

略十二日之夜半被^レ打立候、吾等儀とかく被^レ仰出候間、

翌朝伊勢兵部少輔御年寄衆へ得御意候処、十三日之

昼程御城へ被^レ召寄、御暇被^レ下候、則十四日之曉打立

申、騎馬〔三而〕府中迄十六日之晩罷着候處、昼程

より大雨ニて、阿部川以外出来申、渡不能成ニ付、

十七日ハ此地へ致滞在候、渡御座候ハ、夜中成共打

立可申候、大名衆皆々から尻ニて、人をも不^レ列上りの

躰ニ〔而〕候間、吾等年若ニ而緩々ト仕候而者、江戸

の聞え如何候間、爰元供之者三人ほと〔騎〕馬ニて

召列、軽尻ニ而大坂迄罷上へきよし候覚語候、就其

はや御國人数之儀、有馬表之上使より為被申越由、

御年寄衆より被^レ仰候、定而可罷渡候、於大坂承

合、いまた御國人数有馬へ不^レ参候ハ、如其元早々

罷下、人数〔被〕召列尤候、又有馬へ人数参候

ハ、直ニ彼表へ参候得と、御年寄衆より被^レ仰

聞候間、致其覚語候、吾等出陣此上者、御國之衆不残

可罷立候、就中御馬印今度申受、高麗已来之御佳例ニ持せ申度候、被仰付可被下候、委細之段者伊勢兵部少輔其元家老衆へ可申遣候間、不能詳候、誠惶誠恐敬白、

(寛永十五年)

正月十七日

薩摩守

光久

進上
黄門様

(本文書ハ「旧記雜録後編五」一一九三号文書ト同一文書ナルベシ)

202 一寛永十五年寅二月廿八日辰之刻、有馬原之城本丸責落

之時、薩摩軍衆之内より貴老・友野七郎殿・藤井才四郎殿ハ先陳被成、於屏涯被碎粉骨御働之処ニ、敵方之

石打ニ被相當、三間程の石垣より下ニ打落申候、被遂

御名實候儀、我等も同前ニ城乗仕、慥ニ見届申候、向日誰人御尋候共此旨無相可申遣候」

後之證文如件、

(寛永十五年)

三月朔日

有馬久右衛門「字不詳」

純判

藤井助四郎

判

友野七郎

判

「右本文日高人左衛門簡藏、三人銘之證文有之、同案也、藤井助四郎文蘇常之如候、奥書記之」

是迄

日高拾兵衛殿
参

(本文書ハ「旧記雜録後編五」一二七二・一二七三・一二七三三号文書ニ該当スルカ)

此旧記ハ史局ノ秘書候間、有他見間敷者也、

(此旧記トハ目録及ビ一二九号以降分ヲ示スモノナラン)

203 寛

寅二月廿八日、有馬原之城ニ而、貴老本丸石垣高さ三

間程登屏ヲ乗越、敵あまた、矢共いつけ、殊之外之

手から、於其場手おハせられ、慥ニ見届候、為證跡之

如此候、

寛永十五寅三月二日

村尾源左衛門在判

金剛坊老

参

「右本書、金剛坊子孫出水山下藤右衛門家ニあり、伊地小十郎附郷土也」

證文

刁二月廿八日、有馬於原之城ニ、石垣高サ三間程登り
屏を乗越、弓ニていとおし被成候通、我々於其場ニ見
届申候、為後日如此ニ候、已上、

(寛永十五年)

刁二月廿八日

出水

柏木主馬首在判

金剛坊

参

「本書同断」

手形

人躰五拾人

二番立衆

加久藤衆中

右、嶋原為御加勢可被罷立候、分限之衆者人数成次第、
無足之衆者三人間ニ夫老人▽^{③ツ}、△才覚を以可被召
列候、賃後日可被給候、かこしま持合之知行所之衆
者、領主より可被列候間、所より〔ハ〕^{③ナシ}かまわれ間敷
候、持道具者鉄炮・弓・鎗たるへく候、普請具ハ先日
被仰渡候様^{③ニ}可有校量候、飯米者出水船元ニ而可相渡
候、物頭前より差出を以可被受取候、但右衆地頭可被

召列候、

寛永十五年正月五日

かこしま

賦所「イ印」

伊地知^{③重政}李右衛門^{③尉}殿

嶋原立人数差出

加久藤衆中

一人躰五拾人

一内衆四十二人

内老人ハ衆中三拾九人相中之夫

残而武拾九人在伊地知^{③重政}弥右衛門^{③尉} 六人、西田和泉

守六人、河野與右衛門^{③尉} 四人、宮内右兵衛尉^{③尉} 三人、

谷口弥兵衛尉^{③尉} 式人、前田内藏助^{③尉} 二人、東郷佐左衛

門^{③尉} 二人、瀬戸山^{③尉} 撰津助^{③尉} 老人、前田彦左衛門^{③尉} 老

人、宮竹武右衛門^{③尉} 老人、萩原甚介^{③尉} 老人、

右衆中今十七日晚ニ米津へ着也、飯米被御引付取

候、已上、

(寛永十五年) 寅正月十七日

伊地知^{③重政}李右衛門^{③尉}

村田郷右衛門^{③尉} 殿

猪俣猪右衛門^{③尉} 殿

207

有馬陣立差出

一主從卅二人

右之内

伊地知^(重政)左右衛門^(尉)
与力^{「イ名久」}立井七介

喜左衛門

但馬介

源兵衛

助市

休右衛門

山介

吉右衛門

右者正月十六日より同二月八日ニかうハラより被召
帰候、日数^{「イ」}老人ニ付廿三日ツ、
合日数百八十四日
「是より未略ス」

右、弘化四年時々写置者也、新納新之丞

時陽(花押)

(右トハ二〇三号カラニ〇七号ヲ示ス)

208

一有馬城責當年二月廿七日・八日及兩日^(阿多)、「候」、此方御
備罷居候處、落城乱刻、無御下知候得共、手前不届候
而本丸へ参見物仕候、右之旨可然様奉頼候、以上、

寛永十五年

六月朔日

南林寺

伊地知^(重政)左右衛門

209

一鉄炮五匁 池之原伊与守殿 一同五匁 山田主水殿
一同七匁 池田内膳殿 外廿老人略ス、

夫賦

山田主水佐殿老人 萩原藤右衛門殿老人
池田内膳殿 老人 坂元與左衛門殿老人
寺 正覺寺 老人

寛永十四年五月十七日

210

覚^(阿多)
一一夜々^(阿多)に番之人数一度々に可被書記事、
一人数^(阿多)遠嶋崎洲崎などへハ小屋をも可被懸事、
〔阿多〕^(阿多)

一人數不足の所ハもよりの奉行を以相談可被立渡事、

一 横目衆廻〔^{④ナシ}〕候内ニ可有心得事、

一 遠所より人數被寄候ハて不叶所ハ、人數可被申渡候、

一 左候而此方へ其段早々可承候事、

一 獵船ハ屋ハ沖見得候所迄者不及口能、船影不見、所迄

被遣出儀 堅法度可被申付〔候〕事、

一 自然所ニより氣任之外城有之候ハ、則無用捨^{④即}△此

方へ△可被申越〔^{④ナシ}〕事、以上、

(正保四年カ) 八月七日 因幡守 (川上久國) 島津久慶 彈正太弼 (④大)

(本文書ハ「旧記雜錄追録」一六二号文書ト同一文書ナルベシ)

211 ▽ ④手形 △

人數六十五人

一番立衆

阿多衆中

右、嶋原為御加勢可被罷立候、分限の衆ハ人數成次第、

無足の衆ハ三人間ニ夫一人ツ、才覚を以可被召列候、

質後日可被給候、鹿兒嶋持合之知行所の衆、領主よ

り可被召列候間、所より〔^{④ナシ}〕^{④候}かまわれましく候、持

道具〔^{④ナシ}〕^{④候}鉄炮・弓・鎗たるへく、普請具ハ先日被

仰渡^{④候}様に可有推量候、飯米ハ出水船本ニて可相渡候、

物頭より指出ヲ以可被請取候、

寛永十五年五月五日 (正カ)

鹿兒嶋

賦所印

阿多噯衆中

〔右阿多旧記ニ相見得候由〕

212

手形

人駄式百廿〔^{④ナシ}〕人

一番立衆 大口衆中

右、嶋原為〔^{④ナシ}〕加勢可被罷立候、分限の衆ハ人數成

次第、無足の衆者三人間ニ夫一人ツ、才覚を以可被

召列候、質後日可被給候、かこしま持合之知行所の衆

ハ、領主より可被^{④召}列候間、所より〔^{④ナシ}〕^{④候}かまハれ間

敷候、持道具者鉄炮・弓・鎗たるへく候、普請具者先

に被仰渡候様^{④ニ}可有校量候、飯米者出水船元ニて可相

213の1

渡候、物頭前より差出を以可被受取候、
(④以指出) (⑤證)

寛永十五年正月五日

鹿兒嶋

賦所印

新納加賀殿
(④守) (忠清)

「右本書大口ニ有之由」

「本文書ハ「旧記雜錄後編五」一一六号文書ト同一文書ナルベシ」

(中表紙)

「新納仲左衛門忠雄日記書拔」

元和九年

一二月廿三日仲左衛門与名被下候、

三月廿二日

一殿様御父子御下屋敷江御出被成候、又八郎様御事、
(島津忠朗)

四月十三日(島津忠興)
一昼程より右馬頭殿江御父子御出被成、あやつり有、我

等も御供、

四月十八日

一晚付右馬頭殿江御父子三人御出被成、あやつり有、右

馬頭殿内衆北郷殿内衆廿人餘振舞有、北郷越後守殿、

五月二日

一御曹子様吾等所江御出候、肴御酒被下候、御菓子御酒

上申候、

五月四日

一又八郎様申請候、

一五月九日江戸打立申、罷下り候、同廿三日京着、

元和十年 寛永元年

正月元

一御曹子様へ中紙式束進上申候、俄に候間御蔵より取か

へ申候、

正月三日

一早朝より打立、鹿府江参上申候、殿様江島目一貫文

進上申候、同卷貫文御老中江参上候、鎌左京亮殿江中
(鎌田政徳)

紙卷束進上候、

正月四日

一信言葉何も屋形へ御礼申上候、我等へも茶給候、御百

生高江田・木田の百生炭かやむしろ持参候間、酒被下

候而返しニ申候、

正月五日

一僧衆屋形へ御礼、我等へも御茶給候、大壽寺・吉祥寺・椿窓寺・泰椿東漸寺内へ申入、酒進せ申候、願成寺へも酒進せ申候、

正月九日

一殿様御越、御迎ニ罷出候、夜入五ツニ御着被成、

正月十日

一殿様被成御差出、衆中御覽仰出有り、江戸江被仰出候

御書物も参候、又御家へ早晚被仰出候条々數ヶ条也、

仁礼信濃守殿・市来備前守殿二人御使也、

正月十二日

一御茶被下候、備中守殿・信濃守殿・播磨守殿・我等四人、殿様御座ニ而御食参候、御茶湯之時、御小者

衆・御道具衆數多早朝より罷出候、食可被下候哉、いかゝの由被得御意候間備州へ申入候へハ、可給由候、

則其通織部殿存力坊へ申理、米良伊与守殿、

正月廿日

一殿様御帰宅、濱迄参申候、

正月廿四日

一二階堂源左衛門殿所へ愛宕講被成参也、

二月十一日

一御使役被仰付候間、起請文仕候、見者猿渡掃部助殿、

二月十二日

一虎壽様岩松御兄弟國分江御越被成候、

二月十三日

一元和六年、御屋形造材木何か算用残物鹿府より参候、

差紙ヲ以与兵衛殿・但馬守殿へ相渡候、御使申候引付

押喜左衛門殿・米良伊与守殿江渡、

二月十五日

一若殿様御差出、出仕御覽候、

一二月十九日、殿様御越候、濱迄御迎ニ罷出候、國分之

紹賀五日留通被参候へと御意ニ而、猪又藤左衛門遣申候、

一二月廿日、殿様御差出、出仕御覽候、備州より明日濱

遊ニ殿様申請由之儀候間、畏由申シ、其より源右衛

門殿同行申候、黒川へ参御座敷場見合申、主水佐殿・

仲右衛門殿も彼地江被参候、其より比志嶋掃部助殿へ

参候、別當二人参候間鳥目十貫用段ニ候故、取かへ申

候へと頼申候へハ、鳥目ハ可有之由申候、

一二月廿一日、衆中何も黒川江 殿様申請被成由候へつれ共、天氣悪敷候故、備中守殿所を借申候へハ、彼地へ御出有へき通御意候、其より備州老所へ申請候、終日之大酒也、比志嶋宮内少輔殿・紹嘉御供也、

一二月廿三日、鉄炮被下候、

一二月廿四日、殿様向嶋江御渡海、御供申候、我等〔本ノマ、〕而参候、

一三月朔日、鹿府より明日九ツニ御茶被下候間早々参候、夜半参着、

一三月二日、早朝備州江罷出同行申候、御屋形へ参上申候、児玉筑後守殿〔利昌〕ヲ以御礼申候、其より三原左衛門佐殿所江参候、御振廻有、其より御茶湯ニ参上候人数、

備州殿・掃部殿・道甫・拙者・地下衆・伊勢大隅守殿〔眞豊〕なり、御路地江普現蔵と言桜の花、盛過散申候而誠の如盛成を賦し哥を進上、我等も哥を上申候、

一三月三日、御曹子様御差出、出仕被成御覧候、

一三月九日、主水佐殿内記殿より御臺所家明日柱立可有之候間、備中守殿江申入、且ハ祝物ハ瓶子二對・鯛一

懸・中紙式束・米少、可祝由被仰、其通物奉行へ申理候、

一三月廿一日、殿様御越候、江戸より飛脚罷下候、又八郎様御〔不知〕くし被遊候、一段御安被成候由申来候、今日則飛脚被差上候、道具衆二人也、

一三月廿二日、同三日、殿様御差出被成、出仕御覧候、

一三月廿五日、殿様御矢ひらき候、西表の振舞見廻、掃部助殿・源右衛門殿・我等也、衆中江仰出有、源右衛門被申候、一今度船木曳御座候、人数馳走申せし由候、一番普請符、朔日・十五日・廿八日、一ヶ月ニ三度之

出仕堅可相閉由被仰出候、

一三月廿七日、殿様御帰宅、枝柿一臺進上、

一三月廿八日、若殿様御差出被成、出仕御覧候、

一四月朔日、若殿様御差出被成、出仕御覧候、

一四月五日、飛脚、御曹子様御抱瘡一段能御坐候由申来、有淡路守殿被成御披露候、

一四月十五日、若殿様御差出、衆中御覧候、

一四月廿四日、道甫所江愛宕講有、同日殿様御越、御船

元江御迎参候、

一 四月廿七日、殿様御帰宅、濱迄御送、

一 五月五日、御曹子様御兄弟御差出被成、出仕御覽、棕御取せ候、

一 五月九日、殿様御越被成、御迎濱参候、

一 五月十日、殿様御差出被成、出仕御覽、晚付御茶湯可有之候間御かつてへこもり候而見廻申候所へ、御茶可被下由候而御茶被下候、客人備中守殿・〔不分明〕日説・紹嘉・掃部助殿・我等也、〔矢野氏也〕

一 五月十一日、殿様出仕御覽、同十三日殿様御帰帆、濱迄参候、

一 五月廿四日、江夏内記殿所愛宕講参候、

一 五月廿六日、吉野御馬追ニ罷登候、

一 五月廿八日、若殿様御差出、衆中御覽被成候、

寛永七年庚午

一 正月朔日、又八郎様御前江青銅百疋進上仕候、

一 正月三日、〔家久〕黄門様・〔忠紀〕越後守殿御同道御上洛御打立、

加治木御光着、

一 正月五日、相良喜平次殿被罷越、又八郎様御寄合、

黄門様より青毛馬疋被遣候、又八様よりハ上布五十端被遣候、御使仲左衛門、

一 正月七日、今度御上洛候ニ付、又八郎様より青銅五百疋被下候、御使曾木弥兵衛殿、御袋様より肴一折・樽一荷被下候、

一 正月八日、黄門様御上洛御打立也、正宮江御参被成候而霧嶋江御参御留、御袋様より臺の物一ツ・御酒被下候、鎌傳左衛門殿同行打立候、帖佐船津へ参留、向町岩野原帖佐町迄追酒有、御袋様より帖佐迄下飯籠被下候、御使小形權左衛門殿也、

一 正月九日、船津打立三浦名ニ而昼休仕、高城へ参着、入来迄高城若衆五人参候、ひつかふ迄三十人計参候、上床主税助殿所江宿仕候、

一 正月十日、衆中町在郷何も御酒持来、鼻向方々より持来、衆中子共名付被申候、〔不分明〕地頭代・諸寺社へ礼儀申候、
一 正月十一日、高城打立京泊へ下ル、同十五日順風能出

船、

一二月二日、上関江参候へハ、東目御供たての船共参候、
佐多丹波守殿江頼置、殿様へ鯨進上仕候、野州老へ
〔不分明〕水一ツ進せ候、何も鯢遣候、

一二月九日、上様室へ御光着、御船へ桑名〔松平定行〕より参候御
文箱持参候、御前江被召出酒被下候、又鹿少進上候、

一二月十一日、大坂へ参着、

一二月十二日、殿様大坂御光着、

一二月十四日、大坂打立罷上り、川船より 上様ハ淀へ
御より被成候、

一二月十五日、淀御城越州江御使参候、取次年より久松
十郎左衛門殿、

一二月廿三日、伏見打立水口泊、

一二月廿九日、あらいニ逗留、濱名之旧跡見物仕候、長
者建立道場御坐候、佛殿ハ古の佛殿ニ而候、寺之邊皆
々椿ニ而候、銘花開申候間、花五色とり候而 黄門様
へ進上、此今切之ゆらひ古人尋候へハ、戊午の年大風
大雨仕刻打切申候由候、百年之已前為覚人ハ無之、又

三十八年前ニ四海波申候由、人々物語仕候、

一三月九日、ほとい打立、しな川と六合之相ニ而 若殿
様御兄弟様ニ懸御目候、芝御屋形へ参着、

一三月十日、御上屋敷江罷出、 又三郎様へ御太刀一
腰・御馬一疋進上仕候、馬代銀一枚、伊勢兵部少輔殿
御太刀一腰・馬代銀一枚参せ申候、 又三郎様江棧作
候書印判一ツ・大筆一ツ・官香三包進上、其外土産遣
候、

一三月十八日、御登城ニ而御目見被成候、御進物付本丸
ハ上井東市正殿・仁礼右近殿、西丸ハ山田弥九郎殿・
仲左衛門、御本丸へハ巻物式百反・銀子三百枚・とら
の皮一枚・御太刀御進上、西の丸ニハ銀子三百枚・巻
物五十反・御太刀御馬御進上、

一三月廿一日、今日御成ニ付、猿樂衆江被下候呉服奉行
被仰付候、小袖裏おもて五百分物数千反請取せ候、

一四月六日、上屋形ニ参上候、舞臺江小袖并銭積候様子、
伊勢兵少老被成指南候、

一四月十八日、 將軍家光公桜田御屋敷御成、卯之刻御

光儀、進上物拜領物有之也、

一 四月廿一日、大御所様御成、進上物拜領物有之也、

一 五月三日、上屋形罷出御意趣承候、御かた衣はかま二通、御袷一ツ拜領候、御取次兒玉筑後守殿以承候、

一 五月四日、江戸打立、京大坂逗留十日、船中廿日、

六月三日出船、

一 六月廿日、向田江着、同廿一日、高城衆中何も鮎酒

持来、加治木江入相参着、蒲生迄御馬御中間被下候、

曆々衆町衆何も中途へ御出被成候、

一 六月廿二日、御屋形へ罷出、江戸より参候御文箱御菓

子箱一ツ、有淡路守殿以進□候、

一 六月廿三日、黄門様より被成御意候、御意趣奥江有

川淡路守殿ヲ以申上候へハ、御兄弟様へ直ニ申上候

へと御意候間、又八郎様・大隅守様江申上候、

一 六月廿五日、屋形へ木上(准西)和泉守致候仕候而「本マ、伺公カ」式正之御

膳可参様子御指南申上候ニ付御振廻有、御座和泉守・

奥左近・備前守・掃部・我等也、上下七人稽古太刀披

露、太刀文箱添弓空穂鎧甲鞍鍔太刀刀之添、後乱舞

有、御鼓船弁慶我等うたひ申候、奥様より西瓜被下候、御使老山小兵衛殿、

一 六月廿六日、御みや薰袋二ツ・油煙二挺又八郎様へ、

右同大隅守様へ、白粉一箱・小杉原式東大御姫様へ、

右同二番目御姫様へ、かなくさり二筋安千代様へ、

一 七月朔日、又八郎様・大隅守様申請候、屏かこひ仕、

御茶上申候、御座 御兄方有淡路守・采女・越後

守、拜領ハ鯛一臺・御樽一荷・鳥目五貫給候、御蓋

有、御振廻両度進上候、晚ニハ御鞆被遊候、

一 七月四日、當秋被仰出銀式匁ツ、之由被仰出候、又

千石とり之内ハ、女なともめん衣裳之由、是も被仰

出候、

一 七月十四日、竹子のおとり参候、

一 七月十五日、御兄弟様御四人被成躰候、拙親子おと

り申候、備前守殿・掃部助殿我等所江被成躰候間内々

申入候干飯・水瓜など進上申候、

一 七月十六日、町躍・在郷おとり御座候、七月十九日、

大風大雨終日終夜、

一 七月廿一日、又八郎様・大隅守様御寺ニ御參被成候、

一 七月廿五日夜半時分、鹿兒島より書狀參候、様子ハ鹿

兒嶋御諏訪御祭御代參ニ 又八郎様御參可有由、江戸より被仰下候通也、

一 七月廿七日、鹿府御諏訪御祭ニ付、 黃門様御代參ニ

御參被成候へと、江戸より御承候間鹿府へ御越、

一 七月廿八日、御諏訪へ御參上候、座主へ御出司御參上

御覽ニ而候、御供衆・走衆百五十人、御太刀持者上原(高敷)大藏殿、野太刀二御道具衆持、御のり物之先ニ御長刀

一ツ御持せ候、御手鍮御道具、鍮ハ御跡より御持せ候、

一 八月朔日、鹿兒嶋御屋形へ八朔之為御祝儀中紙式束進上、一束ハ返礼被下候、

一 八月十七日、御屋形作事方御座候ニ付、詰前ニ而候間相詰申候、

一 八月廿日、御屋形作事方詰前ニ而候間相詰申候、

御兄弟被成御差出、御うたい被仰候、 内膳正殿下着候、

一 八月廿一日、御寺江御參候間御供、 八月廿四日、比

志嶋掃部助殿江岩(イワ)愛講參候、

寛永十一年甲戌

一 九月七日、木田ニ而御兄弟御鉄炮被遊候、人数上下廿人、

一 九月十日、 黃門様被成御差出、衆中御覽候、

一 九月十二日、鎌田播磨守殿所江御成有、奥方何も御同道ニ而女も御供申候、青銅百疋持參申候、

一 九月十五日、上様御帰ニ而伊兵少老御參上、女へ帯一筋、我等へ青銅百疋被下候、

一 九月十七日未明打立鹿府へ參候、御屋形へ罷出候へハ、今度刑部太輔殿御上洛被成御供候間、左様成御賦可仕由被仰付候、

一 九月十八日、屋形江罷出、太方人数賦仕候、

一 九月十九日、御屋形へ罷出、御供衆日記ヲ兒玉筑後守殿ニ而懸御目候へハ、一段御意ニ入候由承候、

一 九月廿日、又八郎様・刑部様・藤松様御越候条、罷出御供申候、

一 九月廿二日、町田出羽守殿へ御振廻ニ被成御出候、

中納言様も御同心也、昼於御屋形被成御元服候、御名
右衛門兵衛殿と申候、

一 九月廿三日、三原左衛門殿所へ数寄ニ御出被成候、備

州・我等御供、其より御屋形へ参上ニ而御帰宅、備
州・我等事ハ御用之由ニ而被召留候、

一 九月廿四日、御屋形へ罷出候へハ、以御條書名ニ為被
承候儀御座候、来廿八日ニ於御諏訪神前起請文可仕候
間、左候ハ、前方淨清仕候而、廿八日ニハ必可参由約

束申罷帰候、

一 九月廿六日、蒲生ニ御狩ニ御登せ被成候、御供申候、

土持外記へ御宿被成候、新留山二鹿倉御狩、鹿一ツと
れ申候、晚ハ市来八左衛門殿晚御振廻進上御座候ニ参
候、八左衛門殿へ千疋被給候、

一 九月廿七日、樂山之御狩有、二鹿倉ニ猪・鹿十九とれ

申候、又八様大鹿一ツ被^(遊カ)候、大猪一ツとれ申候間、
丸猪ニ而鹿府へ御進上、其日御帰宅、

一 九月廿八日、鹿兒嶋へ参上申候、先々今日ハ御用なく

候、霜月初ニ可参由ニ而罷帰候、

一 九月廿九日、帖佐餅田原ニうつら狩御登被成候、御供
仕候、

一 十月六日、中納言様御光駕、十月七日向嶋へ御渡

海、夫婦御供仕候、御狩有、

一 十月八日、御狩有、奥方被成御覧候、兵少老も御参候、

鹿一ツ射候、夜入候而東肥前守殿ニ而被仰出候ハ、十
二日我等所へ可被成御光駕由被仰出候条、則御礼申上
候、其より亭主ニ而候間先々罷帰候へと上意候間、夜
船ニ而罷帰候、

船ニ而罷帰候、

一 十月十二日、上様嶋より被成御帰宅、我等所江御光駕

ニ而候、黄門様より御樽二荷・御肴臺一ツ・青銅式
千疋拜領候、諸白古酒一樽・御着物一ツ女へ被下候、
我等手前より進上ハ、御孫様へ御太刀・馬也、大御姫

様へ青銅五百疋、御袋様同式百疋、刑部様江青銅式百
疋、安千代殿江式百疋、右衛門兵衛殿江式百疋、又八
郎様江式百疋進上仕候、夜入四ツ時御立、御機嫌能候、
千手重衡黒塚二番さしより被遊候、

- 一十月十三日、上様如鹿兒嶋御帰宅ニ而、諸士衆教多御振舞、
- 一十月十七日、竹子山之御狩ニ被成御上候間、御供申候、日帰、
- 一十月十八日、衆中より知行方ニ付御侘之条、鎌伊賀守殿・寺市左衛門殿御申候、備州・我等兩人なり、
- 一十月廿日、伊兵部老庄内御祝言ニ付、御供之由候間、夜入罷出御見廻申候、
- 一十月廿一日、黃門様御越着、式部様庄内江御越、
- 一十月廿二日、上様松原へ、奥方・御姫様何も御同心ニ而御遊山有、女御供申候、我等御供申候、上意ニ伊兵部少老御用之由候間、書状遣申候、
- 一十月廿三日、上様より御意ニ而候、加治木衆中出仕不申、悪事ニ被思召、毎朔出仕可仕候、連々弓鉄炮相嗜可仕由可申渡通御意候間、鎌傳左衛門殿・新織部佐殿兩人ヲ以衆中江被仰渡候、
- 一十月廿四日、兵部少老御參、種々御談合有、江戸より公方様御鉄炮ニ而被遊候竊一ツ御拜領被成候、年内御上洛相決、正月十五日過御上洛也、
- 一十月廿五日、伊十院右衛門兵衛殿御矢ひらき有、衆中道具衆御中□迄も御振舞被下候、上様御帰宅也、(間カ)
- 旅庵之三十二年忌蒲地・新納殿御越、振廻進候、同廿六日、佛事成就、
- 一十月廿七日、禪家衆不殘御振廻進候、
- 一十一月八日、中納言様御越被成、種子殿御夫婦御越、(忠時)船元へ罷出候、
- 一十一月十二日、朝五ツ前ニ種子殿御息被成御果候、
- 一十一月廿一日、御祈念所江帖佐増長院、今月御番ニ而候、御兄弟被成申請候、御相伴參候、
- 一十一月廿二日、御領地羽月之内宮人名江被成御越候、御供仕候、日入ニ御着宿候、
- 一十一月廿三日、方々御ねらひ被成候、曾木瀧御覽ニ而候、御帰之刻、湯流等被成申請候、僧へ青銅五百疋被給候、御相伴ニ參候、
- 一十一月廿四日、羽月鹿倉ニ而御狩有、諸々衆中何も被罷上候、頭々(マツ)罷出強飯御酒給候、大猪四ツ鹿一ツとれ

申候、

十一月廿五日、方々御ねらひ被成候、晩ニ於御旅館御振廻進上仕候、若キ衆十人御坐候、罷出御食被給候、

十二月廿六日、御帰宅被成候、羽月囃衆伊地知弥右衛門殿へ青銅被給候、

十二月三日、又八郎様(刑)形部太輔殿江鉄炮ぎミ仕、御振廻進上仕候、若キ衆卅人、

十二月六日未明ニ相立、泉水罷越申候、紫尾迄参り泊申候、

十二月七日、出水参着、井尻彦岐守殿所江宿仕候、亭主振廻、

十二月八日、吉日故御祝物民部少輔殿夫婦御上様江進上仕候、御振舞有、自分ニ民部殿江御太刀・御馬進入仕、彼方より御馬・太刀給候、馬代式拾疋給候、我等与力衆へ三百疋ツ、被下候、内衆も相中ニ被下候、公儀人足衆へも相中ニ鳥目被下候、此方よりも御親類衆・地頭代衆へも銘々祝物被下候、民部殿諸役人へも銘々祝物被下候、我等宿彦岐守江式百疋進上候、方々

仕廻打立、大河内兎玉主水正殿一宿、

十二月九日、大川内打立、大口小木原江昼休ミ横川へ、折田喜左衛門殿一宿、

十二月十日、横川打立帰宿仕り、奥方江御返事申上候、十二月十一日、上様御越、

十二月十三日、東御屋形ニ而御連哥和漢也、和衆上様・川又左衛門殿・野大学助殿・東肥前守殿、漢之衆伊兵部老・三原左金吾・二閑、為善執筆、其後御より合御乱舞有、采女・三輪養老、柏原左近将監殿・民部殿、為名代参上候、御より合有、内衆ハ皆々振廻申候、

十二月十四日、上様・奥方被成御同心帖佐へ御越、夫婦御供、網掛之橋元江鯨参候被成御覽候、

十二月十五日、伊兵部少老於西御屋形、何も御親類へ不残御振舞(被成力)進上候、御相伴備前守殿・我等、上様御帰宅、佐土原・求磨・肥後へ鯨可被遣上意候、十二月十八日、御兄弟鹿府江御越、我等御供、十二月十九日、御歌の會有、詩も御座候、御兄弟も終

日御屋形へ御詰被成候、

一十二月廿日、御能有、矢立鴨弥八郎、頼政長州、井筒

上様、獅子弥三郎、(熊野)ゆや上様、小鼓相良喜平次、自

然居士長州、玉かつら長州、小鼓喜平次、養老きり弥

三郎、合八番、

一十二月廿一日、御諏方於神前、諸士靈社之起請文有、

御兄弟衆何も御参候、又八郎様者御判被成候、諸士

衆ハ血判也、只判ハ神前ニ而仕、血ハ座主ニ而仕候、

一十二月廿八日、若君様へ呉服進上仕、御年米進上仕候、

又八郎様より呉服拜領仕候、

一十二月廿九日、東御袋様より仲次郎へ御小袖・かたき(へ肩)

ん・袴被下候、

一十二月晦日、息女誕生、巳之刻 若君様へ御箭臺進上

仕候、

寛永十二年乙亥

一正月元日、出仕、青銅百疋進上仕候、御社参詣之御供

申候、乗馬御寺へ参候、

一正月二日、西御屋形ニ而御弓始兵法初御座候、罷出見
物申候、

一正月四日、鹿府江 又八郎様より御使参候、

一正月五日、西屋形へ罷出、奥御書院ニ而御目見得申候、

御太刀も東郷肥前殿取次なり、加治木諸役人可被相定

談合御座候、市来備前守殿・我等談合仕、書上候而御

家老中へ差出候、伊兵部少老へ御使ニ参、青銅百疋被

届候、源左衛門殿鈴二對、

一正月六日、諸役人之儀被入御耳候へハ、一段可然被思

召候間其分ニ可被申付由 上意候ニ付、我等可申渡旨

被仰聞候得共、諸役衆を差上可申候間、於鹿府直ニ可

被仰付由申上、我等ニハ御暇申罷帰候、

一正月七日、又八郎様・刑部殿被遊御鉄炮候、我等も罷

出仕候、早田孫兵衛殿所より遊候、御振廻進上候、御

樽錢三百疋被下候、刑部殿より式百疋給候、

一正月十三日、上様鹿府御打立、此方江御着也、飢肥使

者被参候、

一正月十五日、伊東殿使者平川武兵衛殿申人也、進物具

服一重・太刀一腰・馬代銀一枚、御對面被成候、太刀披露仕候、使者へハ銀二枚給候、

一 正月十六日、上様・奥方黒川被成御遊候、

一 正月十八日、上様・刑部太輔殿御上洛御打立、福山□御越、

一 正月廿日、西於御屋形、江田吉右衛門殿御振廻進上被成、御相伴ニ參、

一 正月廿一日、御寺へ御參御供仕申候、

一 正月廿五日、御連歌被成候、脇ヲ我等仕候、百韻被成候、連歌衆殿様・周栗・有淡路守殿・肥土佐守殿・新

織部正殿・同伊与守殿・鎌伊賀守殿・我等御寄合、

一 二月四日、衆中何も鉄炮仕候而懸御目候、西御屋形ニ而御振廻被上候、御座參、

一 二月七日、又八郎様帖佐江被成御越候、御供仕候、

一 二月八日、於大壽寺伊勢丸殿御吊被成候、見廻申候、

一 二月十三日、霧嶋江被成御參候、正八幡へも被成御參候、宮内ニ而ハ桑幡左馬助殿所へ御出被成、亭主御振

廻被上候、

一 二月十八日、又八郎様川内へ被成御越候、新田御八幡

へ被成御參、御參錢二千疋被成御拜進候、亭主丹波守殿所江御宿、御振廻被上候、御供不残振舞被申候、

一 二月十九日、泰平寺江被成御見廻、其より御帰宅、我等宿亭主茨江左京ニて百疋持せ、外百疋被下候、

一 二月廿五日、西御屋形ニ而御連哥有、

一 二月廿六日、竹子御狩被成御供申候、鹿四五ツとれ申候、日帰、

一 二月廿九日、風呂燒候而又八郎様申請、なめし進上仕候、

一 三月三日、又八郎様・七郎様・右衛門殿小嶋江御慰御出、御供仕候、

一 三月六日、又八郎様より衆中へ仰出有、

一 三月十二日、我等所へ連哥仕候、東肥前守殿・市備前守殿・土佐守殿・伊賀守殿・伊与守殿・周栗、執筆青

山喜右衛門被仕候、昼ハなめし、後ハ惣物御振廻、何レも(ママ)こもり衆数多、

一 三月廿二日、北郷(久直)式部太輔殿、同上様より御使被遣

候、御太刀・御樽肴一荷・魚臺一ツ・御樽一荷・臺一

ツ御上様へ、東奥方へも御樽肴参候、

一 三月廿六日、有川山江御狩有、御供申候、

一 四月廿一日〔朝カ本ノマ、一〕麻断儀所被相越、御護摩相勤、

一 四月廿八日〔談カ〕、護摩成就、

寛永十五年戊寅

一 十月六日、薩州様江又八郎様御茶被成御進上候、御供

衆者野州・□少・左馬頭殿・喜入久右・伊地知周防守

殿也、一夜九ツ時迄被成御座候、詩歌被遊〔談カ〕、

一 十月十日、國元より道具者五人参着、

一 十月十二日、野州より承候ハ、御國屋敷侍衆も札ヲ以

御門出入候間、爰元も御同前〔行カ〕ニ御同前〔カ〕ニ可被□付候哉、

御尋被成由候間、則与右衛門□〔本ノマ、一〕又八郎様へ得御意

候へハ、同前ニ被仰付候而可預由御返事候間、則右之

通中神内藏之丞殿ニ而申入候、

一 十月廿日、又八郎様泉岳寺へ御振廻ニ被成御出候、

一 十月廿二日、玄番頭様御下着候、中途迄又八郎様為御

使罷出候、自分ニ新介中途迄差上申候、

一 十月廿四日、薩州様御来駕此方へ、

一 十一月朔日、又八郎様・玄番頭殿被成御登城候、薩州

様も御登城有、又八郎様御暇出申候、呉服十ヲ御拜領

候、御年寄衆へ御礼御出被成候、

一 十一月五日、又八郎殿江戸被成御打立候、鹿野川へ御留、

一 十一月六日、大磯晝休、大田原留、十一月七日、箱

根休、沼淵泊〔津カ〕、

一 十一月八日、市原休〔本ノマ、一〕、江尻泊、十一月九日、岡部休、

金□留〔谷カ〕、

一 十一月十日、袋井休、濱松留、十一月十一日、白

須下休〔黄カ〕、赤坂留、

一 十一月十二日、夜船四市朝食、十一月十三日、関御

泊、

一 十一月十四日、土山休、石邊泊、十一月十五日、大

津休、京着、船木次郎左衛門所へ宿、

一 十一月十六日、黄門様へ御目懸衆数多罷出候、我等

存寄又八郎公へ申上候様子ハ、在江戸之儀ハ、我御屋形へ御入候へ者、善悪之様子人□不存候、京都之儀ハ人之所江被成御宿候故、京衆種々口かましく候へハ、京都御滞在大事ニ存候、家中へも然と御法度など可被仰付候、将又御通留も五日より上は可悪候哉と申入候、御使鎌伊賀守殿・池与右衛門殿、
 十一月十七日・十八日・十九日・廿日、方々より御見廻、舟木次郎左衛門より又八郎様江御振廻有、
 十一月廿一日、京都打立、大坂江御下り、十一月廿二日、舟木三右衛門振廻進上、
 十一月廿四日、鎌左京亮殿江又八郎様御振廻有、晚御船召候、一廿五日、御滞在、
 十一月廿六日、大坂川口御出船、順風能室津迄、一廿九日、御滞留、
 十一月廿八日、室御出船、牛間渡迄、泊、十一月廿九日、牛間渡より白石迄、泊、
 十一月朔日、白石滞、一十二月二日、備後鞆御着、竹崎原江御泊、

一十二月三日、竹崎原出船、かむろへ泊、一四日・五日、滞在、
 一十二月六日、かむろ出船、室角^(横カ)へ泊、一七日、順風悪敷向参泊、一八日、向へ滞在、
 一十二月九日、向出船、下関江泊、一十日、下関滞在、
 一十二月十二日、下関出船、筑州之内わいた泊といふ所へ泊、一十二月十二日、わいた泊出船、地之嶋塩かゝりつ^(鞍岩カ)泊、
 一十二月十三日、鞍岩出船、唐泊へ参泊、唐泊ニ十四日滞在、
 一十二月十五日、唐泊出船、呼子江泊、一十六日、呼子滞在、一十七日、滞在^(名カ)越御陣見物、
 一十二月十八日^(日カ)名越出船、平戸泊、おらんだ船見物、
 一十二月十九日、平戸出船、飯桶江泊、一十二月廿日、飯桶出船、柁島へ泊、
 一十二月廿一日、柁島出船、鳶之巢江泊、一廿二日、鳶之巢滞在、
 一十二月廿三日、鳶之巢出船、阿久根倉津へ着岸、

一十二月廿四日、倉津出船、向田着也、寺田良右衛門殿
其外船奉行〔 〕迄被罷出候、彈正殿見廻申候、
一十二月廿五日、向田打立、市野へ昼休、加治木江御着、
一十二月廿六日、何も衆御見廻御出候、
道中付衆^(マ)

寛永十六年己卯

一正月元日、何も礼儀、二日、衆中町衆酒肴持参、
一正月四日、聖家礼承候、五日、禪家衆礼承候、
一正月六日、児玉四郎兵衛殿・黒葛原治部^(忠知)右衛門殿御来
儀、青銅百足ツ、給、振廻進候、
一正月七日、北郷式部太輔様御越、濱江罷出、又八郎様
御留守之由候へハ御帰帆、
一正月十日、吉日故罷出、青銅百足進上仕候、御子様御
懐様下りミヤ進上、
一正月十二日、又八郎様庄内江式部太輔殿御礼ニ御越候
間供仕候、式部太輔殿江百足進上仕候、於奥方御振廻
候、御座へ被召出候、青銅千足拜領、通山泊、

一正月十三日、通山より都城江被成御礼候、右之仕合ニ
而候、又通山江御帰宅、

一正月十四日、亭主式百足進申候、小濱ニ而熊千代様為
坂迎御振舞御坐候、

一正月十六日、帖佐寶壽院殿^(保)へ御礼ニ参候、猿城之介殿
江御礼申候、扇子持参、

一正月廿一日、妙谷寺江参上、青銅式百足進上仕候、

一正月廿二日、きりしたん宗改事、別紙有之、

一正月廿三日、福昌寺江参、青銅百足進上仕候、両院江
扇子、

一二月六日、鹿兒島よりきりしたん宗御改ニ付式部太輔
様より御用候間、又八郎様御越候へと被仰越候間御越、
我等も御供申候、参上可仕由承候間、御供ニ而罷越
候、北郷式部太輔様御屋形ニ而御談合御座候、又八郎
殿・安藝守殿・出羽守殿・大和守殿・石見守殿・豊後
守殿・川左近将監殿・三左衛門佐殿・野大学助殿・新
勘ヶ殿・町勘ヶ殿・仁主計助殿・同藏人殿・本伊与守
殿・竹伊豆守殿・久保七兵衛殿・有馬主馬首殿・平盛

右衛門殿・迫尾内蔵丞殿・東肥前守殿・相權兵衛殿・

堀甚左衛門殿・國十右衛門殿・三次郎左衛門殿・甲斐

掃部助殿・税所但馬守殿・伊地知志摩允殿・我等、

一二月七日、御厩ニ而御談合御座候、右之衆なり、朝、

三原左衛門佐殿所江御数寄有、御客仁又八郎様・式部
様・安藝様・出羽様・大和様也、御厩ニ而御振廻有、

我等罷出、

一二月八日、大和守殿江御振廻有、御客人又八郎様・式

部様・筑州・出羽守殿・(石カ)州・摂州・祐辰・新勘ヶ

殿・藏人殿・我等也、夜入、又八郎様御帰宅、

一二月九日、御屋形より御用候間、参上可仕由被仰聞候

間、罷出候、加治木[□]様御嫁入御持道具何[□]如何

程ツ、御持せ可有之哉、存寄之通ヲ申上候へと被仰聞

候、有川有可老江談合申、大形以書付申上候、二月

^(十カ)
□日罷帰候、

一二月十二日、今度致札改御座候間、衆中札并人ヲ召集、

正庵老・助九郎殿へ見せ申、札ニ人ヲ引合改、事濟申

候、

一二月十三日、正庵・江夏二閑所両所改申候、彼方差出

ニウラ書仕候、正[□]内膳正殿・助九郎殿・我等

判仕候、二閑所ニハ内膳正殿・正庵・我等仕候、

一二月廿日、鹿兒嶋へ又八郎様御越候間、供仕候、二

月廿三日、福昌寺へ御参、供仕候、

一二月廿四日、谷山へ伊勢竊殿へ被成御見廻候、我等も

百疋進上仕候、いせ竊殿・同御袋江懸御目御帰り、直

ニ山田民部殿御振廻有、摂津守殿・祐辰并我等也、

一二月廿五日、又八郎殿御帰宅、二月廿六日、御屋形

より御用共ニ而跡立申候、

一三月四日、又八郎様・同奥方・熊千代様申請候、御太

刀一腰、御馬一疋ハ又八郎様へ進上仕候、御太刀一

腰・御馬一疋熊千代様へ、青銅五百疋御上様へ進上仕

候、又八郎様より御太刀一腰、御馬一疋被下候、御樽

一荷・御着熊千代様より被下候、御上様より三百疋被

下候、御上様より女江御小袖一ツ被下候、熊千代様よ

り青銅五百疋女江被下候、

一三月五日、溝邊村改ニ川上志摩守殿被相越候間、夜^(前カ)
□

より振舞進^(申候カ)□、仲次郎同道ニ而、みそへのことく被
参候、

一三月十三日、山口藏助殿札改奉行として被相越候、屋
形ニ而札改仕候、

一三月十四日、川上志摩頭守山口藏助殿振廻申候、客屋
ニ而札改仕候、

一三月廿一日、江戸江^(希カ)江^(希カ)御屋敷可被成御申ニ付、御
道□^(具カ)衆被差上候、池田五郎左衛門尉も下着候、

一四月七日、夜入曾木新左衛門殿・内記殿被成御出、納
右衛門殿□^(存カ)分之通被仰候、

一四月八日、客屋江罷出候、夜入曾木新左衛門殿・江内
記殿来儀ニ付承候様子ハ、白坂□^(存カ)衛門殿為何存分共候
哉、自害可仕由被企候間、此中種々異見共申候つれ共
無承引、もはや為相窮由被仰候、就其比掃部助殿・有
淡路守殿・伊賀守殿・内記殿談合仕候、右之旨又八郎
様伊賀殿・吉右衛門殿・与右衛門殿三人ヲ以申上候へ
ハ、ケ様之儀跡敷事ヲ被申候、御返事被成不及由候ニ
付、又此方より申上候ハ、如御意ケ様之儀々も終ニ

不承候、是一段重キ儀候間、鹿兒嶋御家老中へ被成御
尋候而可然候哉と申上候ニ付、比掃部殿・池与右衛門
殿兩人御使被仰付候、

一四月九日、客屋江罷出候所ニ、新左衛門殿二度我等江
用談之由ヲ承候、

一四月十九日、又八郎様鹿府江御越候、式部太輔様江被
成御見廻候、御振舞有、我等も被召出候、其より安藝
守殿へ被成御見廻候、其より鎌田出雲守殿江御見廻、

一四月廿日、御屋形江被成御出仕候、今度江戸より式部
太輔様江御給候御條書ニ、何も江戸より被仰下候儀、

堅ク為被成御承之通ニ連判被成候ニ付、宝壽院殿参、^(本)
梢御さし被成候儀、左衛門佐殿左近将ヲ以式部様より
又八郎殿江被仰候、我等も被召出御意之通承候、

一四月廿一日、又八郎殿伊集院之妙圓寺へ御参被成候、
御帰宅ニ安藝守□^(殿カ)江御振廻御座候、御相客式部様・石
見守殿・撰津守殿、我等も被召出候、

一四月廿二日、町田出羽守殿御振廻有、我等も被召出候、
其より又八郎様御帰宅被成、我等ハ御諏方江参詣仕候、

- 青銅百疋拜進仕候、太夫罷出、神悅申御幣□□帰□、
- 一 五月九日、新介帰宅、白坂納右衛門殿便船ニ而かこしまへ可参由被申ニ付、新介殿より有川宥可老ヲ以、又八郎様江様子申上被成候、
- 一 五月十五日、綱引せ候へハ、少々魚持参申候間、又八郎様根占七郎様御振廻進上申候、御掌伴江田喜右衛門殿・曾木新左衛門殿、
- 一 六月四日、道橋普請之儀申渡候、
- 一 六月五日、川上新介殿と六助「本ノマ、」六ヶ事ニ付、我等寺領、帖佐増長院江参候、加治木衆中数多為見廻御来儀也、
- 一 六月六日、帖佐「江罷越候款本ノマ、」より罷帰候、薩州様御船去三日ニ細嶋江御着之由相聞へ候、
- 一 六月十日、増長院より罷帰候、
- 一 六月十一日、福山江御迎ニ又八郎殿御参候間、御供仕罷越候、
- 一 六月十六日、薩州様福山江四ツ時ニ御着、其より又八郎様被成御帰候、
- 一 六月廿三日、敷根殿江御嫁入ニ我等夫婦御供申候へと、

- 薩州様より御詫ヲ承候、将監殿ハ御迎ニ御参候へと被成御當候、
- 一 六月廿七日、御姫様御嫁入ニ付鹿兒嶋江被成御越候、御供申候、御宿客屋也、
- 一 六月廿八日、敷根筑州江御嫁入有、御供川因幡守殿・渋谷四郎（左衛門カ）殿・本田伊与守殿・堀甚左衛門殿・大田新左衛門殿・川上九郎右衛門殿・税所但馬守殿、
- 一 七月三日、西上様鹿兒嶋へ被成御越候、熊千代様御同前ニ、濱迄送参候、
- 一 七月十一日、又八郎様、上様、熊千代様何も御同船ニ而御帰り、
- 一 七月十四日、在郷躍有、帖佐願成寺へ参候、大樹寺へも参候、
- 一 七月十五日、町おとり有、
- 一 七月十八日、兵庫頭様御名祝として、衆中衆へ御振廻被給候、掃部殿、有淡路入道・織部殿、我等三人奥ニ而御より合被成候、

右新納仲佐衛門忠雄日記、加治木士伊丹孫兵衛書
拔置候ヲ写置也、文化四年卯八月

(中表紙)

「樺山氏文書

川上久國上使附日記

加藤清風先生墓誌銘

池田右近將監家状

野村勘兵衛文書

加世田大浦村長田門来由

住吉崎

住吉社

諸旧記

全

島津稻荷

全

猫神

全

一之宮

「編入スム」

山西

枕山

石寺

嶋津

日向國

しもかはち

河南之内北郷之内三ヶ一

▽カ合而三百町△

右、為勲功之賞所宛行也者、守先例、可致沙汰之状如件、

文保二年

相模②侍平朝臣泰時在判

▽カ 三月廿三日

武藏守平朝臣時房在判

右、ゆつりあたふる所也、

五男安藝守資久分

文保二

三月十五日

沙弥道義

(本文書ハ「旧記雜録前編一」一三三九号文書ト同一文書ナルベシ、尚本文書ハ偽文書ナルベシ)

可令早領知下野六郎資久大隅國始良西俣地頭代官職事
右以人、為勲功賞所宛行也者、守先例、可令領知之状如
件、

建武三年二月九日

「貞久御判」

(花押)

(本文書ハ「旧記雜録前編一」一七七九号文書ト同一文書ナルベシ)

御判

下 嶋津下野三郎右衛門尉資久

可令早領知日向國臼杵院地頭職^{上相左馬助事、跡}

右、為勲功之賞所宛行也、早守先例、可致沙汰之状如件、

觀應二年二月十三日

(補判ナラン)
(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二二三六号文書ト同一文書ナルベシ)

島津四代太守忠宗公五男

資久

六郎左衛門尉 安藝守 入道明見 童名太郎丸

領日州 ^{山西} 樺山 石寺 島津 下河内 河南之内

北郷之内三分一三百町ヲ、當代初テ号樺山ト、後來

恩賜之所領、從年序随所写記ス、御感状ヲ畢、

(本文書ハ二二四号文書ト同文ニツキ省略ス)

218 當陣合戰最中也、急速着船於肥前國寺井津、可被致戰功

之状如件、

應安六年五月十四日

(今川了俊)
沙弥判

嶋津安藝入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二二五号文書ト同一文書ナルベシ)

「資久鎮穆佐文書」
(領カ)

日向國嶋津庄内穆佐院⁽²⁾鎮家職⁽²⁾南都一半濟事、為兵粮所⁽²⁾領

預置也者、守先例、可致其沙汰之状如件、

應安六年十一月五日

(今川了俊)
沙弥 (花押)

嶋津安藝入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二二五九号文書ト同一文書ナルベシ)

此間資久入道明見、筑後守頼尚ノ跡・戸次丹後守ノ跡地頭職願託テ 將軍家於京都ノ吹挙之事、並日州臼杵ノ院地頭職^{上相左馬頭跡}御下シ文ノ施行歎キ申之事文書及 氏久与今川了俊之挙状在焉、右両通次ニ氏久公以御挙状自了俊達武藏守殿之状在焉、又次ニ臼杵ノ院恩賜之儀了俊文書記左ニ、

220 日向國曰杵院地頭職上稻左馬助、守御下文之旨、可被致沙

汰之状如件、

永和元年八月十一日

沙弥 (花押)

嶋津安藝入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」三〇六号文書ト同一文書ナルベシ)

資久自元弘至應安文和之比、或於京都振於勇猛、又或下

居日隅兩州之内領知之頃、合力守護貞久公・氏久公為國

謀靜寧、為家計栄久、公私艱難之間節操一時ノ無怠、暴

露身於路程山野、況讓心於治國撫民、是以所記上賜感

牘、○資久有テ一女子無令嗣、以弟北郷資忠二男又太

音久ヲ令連續於當家之正統流矣、

221

(④足利尊氏袖判アリ)

肥後國山鹿庄内筑後守頼尚跡・同國尻無村・日向國宮崎

郡内戸次丹後守跡地頭職事、為勲功之賞所宛行也、早守

先例、可被致沙汰、仍執達如件、

觀應三年四月廿五日

沙弥 (花押)

嶋津三郎右衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二四〇七号文書ト同一文書ナルベシ)

222 嶋津三郎右衛門尉資久申勲功配分地安堵所望事、申状謹

進上之、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年二月十六日

沙弥道猷

進上 御奉行所

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二五二四号文書ト同一文書ナルベシ)

223 武光以下凶徒退治事、一族相共(②ナシ)、自肥後國球麻郡令

發向菊地陣、可致忠節(②之)状如件、

康安元年十月十六日

左京大夫判

嶋津三郎右衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」九四号文書ト同一文書ナルベシ)

224 為鎮西凶徒退治、可令發向也、致用意、相待下着、且被(②彼)

船津(②末)候者悦入候、國中憑存候、恐々謹言、

七月廿日

氏經 (花押)

嶋津安藝守殿(實久)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」九五号文書ト同一文書ナルベシ)

225 於國致忠節^カ之由^カ嶋津越後守氏久所注申也、尤以神

妙、向後弥抽軍功者、可被抽賞状如件、

^{②忠}

康安六年二月七日

沙弥了俊判

嶋津安藝入道殿(實久)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二四三号文書ト同一文書ナルベシ)

226 於國被致忠節候之由、其間候之間、殊喜入候、凶徒對治

不可有紛候、^{②度}急々馳参候者、可目出候、其子細可致進京^{②注}

都候也、^{②参候者}早速御之弥甚、弥可為忠功候、恐々謹言、

三月十一日

了俊

應安六

嶋津安藝入道殿(實久)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二五〇号文書ト同一文書ナルベシ)

右、日向國北郷^{②參分}三合壹、限永代所讓与也、但有限於公方

御公事者、守惣領宮次郎丸支配、任先例令勤仕、可知行

之状如件、

貞治三年七月廿五日

(北郷實忠)
道明判(花押)

承候了(花押)
(マ)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一四六号文書ト同一文書ナルベシ)

從 元久公綾恩賜之 御文書記左、

228 日向國北郷宮丸名事、於闕所時者、可有領知者也、但此

内除本給人分、又同郷内高同^{②西}名吉富事坪別紙在之、早任先

例、可被所務之状如件、

明德五年卯月七日

元久(花押)

椀山安藝守殿(實久)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」五二三号文書ト同一文書ナルベシ)

227

讓与

(實久)
夫太郎丸分

229 被差進中条三郎左衛門尉之条、尤以神妙、^{②度}急而馳参、可

被致忠者、可被抽賞之状如件、

應安五年十二月廿五日 (小川上後)
沙弥

嶋津(音久)安藝左京進殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二四〇号文書ト同一文書ナルベシ)

230 北郷北方内②後、交付榷屋跡并野々ミ谷寺跡兩所水田五町事、
為給分所相計也、任先例、可有知行之状如件、

明德五年八月十六日②五 元久(花押)

栴山(音久)美濃守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」五二五・五二六号文書ト同一文書ナルベシ)

231 致忠節之由、嶋津陸奥守元久所注申也、尤以神妙、弥可
抽忠功之状如件、

應永四年五月十三日 (狭川滿頼)
右兵衛佐(花押)

嶋津(音久)美濃守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」五八六号文書ト同一文書ナルベシ)

元久公 賜音久所領安堵并ニ新地加増之御文書記左、

232 嶋津庄日向方穆佐院倉岡名②之内林木跡十町、同所先給分

七町、同所深年當知行分、為給分所相計也、早任先例、
可知行②之状如件、

應永七年二月廿四日 元久(花押)

栴山殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」六四七号文書ト同一文書ナルベシ)

233 日向國柏杵院上相左馬助跡、同國宮崎郡内戸次丹後守跡
事、任御下文之旨、可致領知之状如件、

應永七年三月二日 元久(花押)

嶋津(音久)美濃守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」六四八号文書ト同一文書ナルベシ)

234 嶋津庄日向方大田郷内十町事、為給分所相計也、早任先
例、可領知之状如件、

應永七年八月二日②三 元久

嶋津(音久)美濃守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」六五九号文書ト同一文書ナルベシ)

宝刀鍛冶谷山波平行安、為靈劍之旨傳稱于子孫為家珍矣、

此太刀每年除夜出籠之時有嘉礼矣、

音久年六十一歳ニシテ卒、年号不知、九月十三日也、

法名花叟春公、満福寺殿、齋名道春公、字ハ當家法名之

例字也、

教宗 太郎 安藝守 母高木一臺

蒙靈夢之告而名教宗矣、

當代自得敵考之讓而本地悉領之外 守護恩賜之地有、

御判之御文書記左、

音久願假名改換左京亮於美濃守之時、了俊拳狀記左、

235 美濃守所望事、可拳[㊦]京都之狀如件、

應安七年七月廿日

^(今川了俊)
沙弥(花押)

嶋津左京亮殿^(音久)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二六五号文書ト同一文書ナルベシ)

音久改名於美濃守之後感狀記左、

236 為御方致忠節者、本領不可有相違、有別功者、可被抽賞之狀如件、

永和二年六月九日

^(今川了俊)
沙弥(花押)

嶋津美濃守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」三三七号文書ト同一文書ナルベシ)

237 抽軍忠之由被聞召早、尤神妙者、

一品親王令旨如此、悉之、以狀、

天授三年六月廿九日

左少将(花押)

嶋津美濃守殿^(㊦)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」三七四号文書ト同一文書ナルベシ)

元久公 恩賜之領地 御文書記左、

238 嶋津庄之内蒲生七郎給分老町九段、代用途拾九貫仁所令

沾却也、早任先例、可被領知^(㊦)狀如件、

應永廿一年四月二日

久豊御判

椀山安藝守殿
(教宗)

(本文書ハ「旧記雑録前編」二九二六号文書ト同一文書ナルベシ)

久豊公御契約之玉翰謹 頂戴之二通記左、

239

契約

一今度屋形被仰置候、若御御座候時者、一味同心ニ可致
(出)

忠節事、

一於私不慮子細到来する時は、御大事を身大事と存、
(出)

相互ニ用ニ立被立可申事、

一此中ニ和讒凶害出来荒説時者、相互ニ以面申披、就諸

事不可有二心事、

若此条々偽候者、

「御野文」

應永十八年八月

(島津久豊)
玄喜

▽(2)椀山殿△

(本文書ハ「旧記雑録前編」二八二七号文書ト同一文書ナルベシ)

240 嶋津庄日向方隈野郷内十町分事、為▽(2)本給間△任其旨

所宛行也、早任先例、可被領知状如件、
(守)

應永十七年二月十五日
(元久公)
沙弥御判

椀山安藝守殿
(教宗)

(本文書ハ「旧記雑録前編」二七九六号文書ト同一文書ナルベシ)

241

譲与▽(2)孝宗分△
(一本并代)

右、京都之御下文代々并探題之御教書、次一家之惣領
(一本之)

御状共之所領等、當知行不知行不殘愚息孝宗仁所譲与也、
(真)

此内日向國宮崎郡内戸次丹後守之跡三分一者、有一久仁
(真)

讓候也、可有談合者也、▽(2)仍讓状如件△

應永十八年十月九日
(首久)
「沙弥」道春
(一本ナシ)

「安藝守殿」
(一本ナシ)

(本文書ハ「旧記雑録前編」二八四〇号文書ト同一文書ナルベシ)

242 日向國北郷三分一并宮丸名之事、為由緒上者、早任先例、

可令知行者也、仍為後日状如件、
(之)

應永十八年潤十月廿五日 久豊(花押)

栂山殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」八五一号文書ト同一文書ナルベシ)

243 日向國北郷嶋津内并薩摩國鹿兒嶋知覽見内所々賣得之地
事、不可有子細也、任早先例、可令知行者也、仍為後日
之状如件、

應永十八年潤十月廿五日 久豊(花押)

栂山殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」八五〇号文書ト同一文書ナルベシ)

244 嶋津御庄日向方隈野郷内十町、同國大田郷之内十町、同
國薄壇事、為給分所宛行也、早任先例、可領知之状如件、

應永十九年三月廿日 久豊御判

嶋津安藝守殿(教宗)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」八七三号文書ト同一文書ナルベシ)

245 日向國於嶋津庄闕所出来候者、次第仁可相計者也、任先
例、可被領掌之状如件、

應永十九年霜月廿五日

久豊

栂山安藝守殿(教宗)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」八九五号文書ト同一文書ナルベシ)

246 日向國宮崎郡戸次丹後守跡之事、任御下文旨、可令領知之状
如件、

應永廿年卯月廿九日 久豊御判

栂山安藝守殿(教宗)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」九〇八号文書ト同一文書ナルベシ)

247 日向國山東諸縣庄内嵐田四拾町事、右為給分所宛行也、
任先例、可有領知之状如件、

應永廿年九月廿五日 久豊判

栂山安藝守殿(教宗)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」九一四号文書ト同一文書ナルベシ)

248 「編入スム」

諸國江上使御下向之節御問被成候御返答

一寛永十年癸酉、諸國江 上使被差下候、九州へ者小出
對馬吉親「守」殿・城織部殿・能瀬頼隆小十郎殿御下り候、

一同「年」六月七日、出水米津江御着、其晩者麓町江御

一宿、八日御立、紫尾山御越、宮之城「江」御一宿、

蒲生 鹿兒嶋 喜入 指宿

山川 穎娃 鹿籠 坊津

泊久志 秋目 片浦 加世田

田布施 伊作 伊集院 市来

串木野 甌嶋 向田 山崎

大村 霧田 曾木 大口

馬越 横川

一七月廿二日、加治木へ御着被成、
「候処ニ」
「くく」

黄門様御意ニ而、同廿四日喜入撰津・川上因幡罷越、

御案内者いたし、帖佐建昌之城懸御目候、御三人被仰

候者、此城之岸皆足きくにて石垣を可被仰付事、十年

廿年ニ「ハ」調間敷候、其上水不足ニ候間、御住城ニ

者可難成由被仰、又加治木へ「御越候」、其晩從鹿兒嶋歴

々躍二庭名踊二庭被遣候、

一對馬「守」殿家老宇野角太夫与申人、七月六日舟ニ而
國分へ被參候、

一同廿五日、御上使三人加治木より國府へ御着候、

一同廿九日、織部殿・小十郎殿國府御立、如栗野御越候、

右御兩人者國府へ五日御滞留ニ而候、

一對馬「守」殿八月七日ニ國府より栗野へ御越候、國府

へ十六日御滞留、角太夫者三十二日滞留仕、御城へ上

「り」見為申由候、

一其後上井之坊主物語被申候者、「御三人寺ニ而被仰候ハ」

此城日本ニ聞之名城ニ而候、先大坂之城、是者天下之

御城ニ而候間、不及沙汰候、甲斐之天目山岩城ニ而能

候得共、山「イ中ニ」此間有之候「而」、知行「を」少も
「立」

かへす候間、用ニ不足候、豊後之「イ岡」此間岩城ニ

而四方大川廻り一段能城ニ而候得共、國中を敵取敷候

而渡りを取切候者、終ニ者干死し可申候、國府者城勝

レ水もつよく候、其上諸方より之入口嶮岨ニ而、田畑

過分ニかへ、此城日本一たるへきと被仰候由、坊主

物語被申候を、山田民部・因幡承候、

一八月七日、栗野へ御着、翌日加久藤、求摩、又加久藤、小林、野尻、織部殿・小十郎殿ハ綾方、對馬「守」殿「ハ」高岡、其より伊東領へ御越候、田野より山之口、都之城、三人共「三」牛之峠御越、飢肥江御着、其より志布志八郎ヶ野へ八月十五日御着、對馬「守」殿「より」鎌田源左衛門・川上因幡へ御振舞被下候、小十郎殿・織部どののは松山、福山、御舟ニ而山川へ御越候、對馬「守」殿「ハ」大崎、鹿屋、^{「高」}洲「より」御舟ニ而山川へ御着候、児ヶ水へ御越候、夫より佐多へ御渡、喜入久右衛門・相良李之助・川上因幡相付申候、九月九日大泊御出船、屋久嶋一艘^{「渡」}之湊へ御着、同日永良部へ御三人御渡ニ而、其日屋久嶋之長田へ御着、同十一日又如一艘御廻之由被仰「候」處、川湊を浪沙を上つきふさき候ゆへ、御舟出事おそきとて、陸路を御越候、地頭五代少左衛門其外諸役人衆振舞、道具・幕・屏風など船ニのせ、一艘へ被廻候処、俄ニ西風あかり舟四艘打わり候得共、濱へ打上候ゆへ「人に」けかはなく候、道具は皆すたり候、「上使もめし候笠の緒

杯吹切申候」對馬「守」とのは馬より川へ吹落候得共、岩の間に御落候ゆへ御けがなく候、湊口つきふさき候事、不思議成儀ニ候、一艘より陸路を宮之浦へ御着、数日御滞留被成候、其内ニ對馬「守」殿御宿へ小十郎殿・織部殿御出候、久右衛門・李之助・因幡被召寄候而御尋被成候條々、

一大坂御陣之脇武家へ被仰出内、一國ニ一城之外者皆割捨べき由被仰出候付、諸國^{「其分ニ候」}其外ニハ、當國者何れ之城も其佩ニ被立置、殊「三」城本ニ給人共餘多「移」居候、自然之時は即時ニ可取構様「三」見得候、如何様之儀ニて右之躰ニ候哉と被成御尋候、因幡申上候は、給人共城本ニ居候事ハ、義久九州を領候時、過分之人数ニ而候、太閤様御下向之刻、六ヶ國被召上候ニ付、其人数二ヶ國半之内ニ引入候、一所ニハ無居所ゆへそこ〳〵ニ知行少しッ、取らせ、又蔵入之作職をもさせ申付、方々ニ賦付候、在郷之屋敷者皆知行高之内ニ而候ニ付、城本「の」古屋鋪ニ移置候、城を堀崩不申儀者、城廻過半田畑ニ而候、城堀崩たる土入候

ハ、知行高過分ニ引入可申候、就其城不崩^{不崩閉者}ニ候古キ家老共申候を承候与申上候得ハ、御三人共御納得ニ而候、

一又御尋候は、近年南林寺松原ニ鍛冶を餘多すへ、鉄炮百挺与やらん急々ニはらせられたるよし候、是ハ為何事ニケ様急ニ被調候哉と御尋被成候、因幡申上候ハ、それは細川越中守殿肥後へ入國被成候、隣國之儀ニ候間、一かと進物調候得と大隅守被申付候、家老共致相談候者、武器馬具其外何色ニ而茂上方より下申物者銀子入ニ而候、弥借銀も重申候間、國物ニて可調候、鉄はこの地有物ニて、さのミ高直ニも無之候間、鉄炮をはらせ可申与申候而二百挺はらせ申候、即越中守殿へ被遣候、別段成儀ニ而茂無御座与因幡申上候、

一御三人被仰候ハ、諸境目ニ番屋を「作」、番衆ニ三人居候、諸國ニ無之儀ニ候、如何様成事ニ而候哉と御尋候、因幡申上候は、必隣國へ隔心之儀ニても無御座候、法度物其他國へ出し候を改候而留申候、題目走者又は牛馬「ハ」手形を以出し申候を下々かくし候て通

候、左様成改「の」ため番を召置候、番屋へ改物の品々板札ニ書付置候かと存候通申候、

一御三人被仰候ハ、比志嶋宮内少「輔」家老ニて候を、於種子嶋切腹させ、其子は島へ流罪ニて居候、為何儀ニて候哉と御尋候、因幡申上候は、宮内少下地氣任成ものニて、大隅守「被」申付儀を過半受付不申候ゆへ、漸々「ニ」大隅守前悪鋪成立候、然処「ニ」鉄肥与庄内之境之午之峠之少東平ニて、鉄肥より桶を船の楷木之為ニ割候を庄内より申来候は、庄内之内ニ而割候板を鉄肥へ相付可申哉如何と申来候、宮内少一人ニて返事申候は、鉄肥より板を下候者、多人數差越必板を可留候、縦及大破候共、宮内少可存与被申候、其時年寄たるもの共三四人申出候ハ、當時 中納言殿在江戸ニ而候処ニ、國ニ弓箭起候者國を可被召上候、無勿駄御出合笑止ニ存候よし「被」申候処、宮内少返答ニ、各不入氣遣ニて候、右ニ付天下之御仕合悪鋪候者、宮内少一人罷出可致切腹候、御家ニ御氣遣させ上申間敷与被申候、其時右の者被申候は、宮内少一人切腹被成候

共、御家を切留「ハ」被成間敷候、又被申候は、飢肥は昔より人数八千程出申候を我々茂存候与被申置、宮内少諸所へ廻文を遣、庄内より狼烟見得候者、道具を持候て牛之峠へいくさ可申由被申渡候処、正月六日飢肥山初狩仕候を見候て、庄内「ニ」狼烟立候を見、野尻・高原・小林などの人数高城迄走来候、八木民部左衛門使として上洛仕候、正月三日鹿兒嶋を立、高城迄参候処「ニ」右之人数を見申候而押留相返候、於江戸委可申上与被申候付人数罷帰候、定而江戸へ参被申候哉、追付使被差下、宮内少種子嶋流罪仕せ切腹申付、子は當島へ流置被申候与申上候へハ、御三人被仰「候」は、於飢肥老岐将監申たる筋ニ少も不「相」替候、何より飢肥へ人数可出との企、大隅守殿を則たをし可申儀ニ候、子之命被助置事、御慈悲にて候与被仰候、「イ御三人」上使宮之浦より種子嶋の赤生木へ御渡海被成候処「ニ」、取俄北東之風向御船被戻候ニ、宮之浦湊口塩干にて船入不罷成、津へ御船つなき候而天まをよせ上使をおろし「上」可申与仕候処ニ、小船二三艘打わり折角ニ成候を

色く仕、小船ニのせ「上」申儀の岩間ニ下し申候、誠あやうき御仕合候処「ニ」、上下けかなく御國の御大慶ニ候、九月末種子嶋間ニ御渡海にて、陸路を赤生木へ御越、順風なきゆへ数日御滞留被成、十月十六日ニ佐多之「御泊へ御着船、其日」伊佐敷、十七日小根占へ陸路御越、國見之城御覽候て、此城無残所城にて候へ共、片はら「ニ」有之ゆへ、國をかへす候間用「ニ」立かたき与被仰、十八日高山、十九日志布志へ、中日御滞留被成、同廿一日御船にて福嶋へ御越被成候、久右衛門・李之助・因幡夏井之前迄送上罷帰候、一翌年、因幡江戸へ参、小十郎殿へ罷出候処、國之御城にて候志布志は因州地頭所与聞候、餘の堺目ハつまりよく候「与」見得候、志布志は「イ他方ニ」能城付城御座候、能濱も有之、兵糧舟何百艘入候而もつまるましく候、志布志は福山道筋も大川二瀬、大崎方へも大川二瀬有之、自然大雨洪水などの時は、味方の通路可相絶与對馬・織部も申候与御沙汰候、イ御物語ニ候

(本記事ハ「旧記雜錄後編五」六七六号ト同一記事ナルベシ)

加藤家鴨先生墓誌銘

先生諱清風、字權兵衛、姓藤原、加藤氏也、性沈勇精敏、自少好學劍、年十六、初勤外扈從、家于江都高輪邸、從森重與學小笠原家故禮軍禮及弓矢甲冑儀法、為山内武休齋門人、學居合柔術竹内家短刀・鎧組討、青木家二刀法、數年業皆成矣、加之、從菅原安敵、學柳生家劍、師堀惟新齋、學富田家鎗、因富田行晴、學偃月刀、從梅田治重、習鍵鎗法、散家鎌學於莊田仙龍、新家棒學於三木氏村、示現家劍習本田親種、吉田氏射・大坪氏騎同學之於武井道教、天真氏劍、學於岡雪齋、從高田某、學射法鳴絃術、師前田信氏、學楠氏兵法、或印可、或許狀焉、且知音律善尺八、從橘權大僧都義海、傳受兵道祝咒、有餘力則入平田弘新齋門、經學文章頗上其堂、旁求和歌和琴道無不至、常褥食遊于師、不入家而入官曹、出則復遊于師、舖飯則攜【携】行所、晚飯則至夜分食之、柳雖性精敏、其勤苦也可知乎哉、先生聲價稍々貴、於茲、都下豪強武人、師範於一方者、爭來而鬪其技、先生未曾有過失、然而尚自不為以滿、欲學雲弘氏劍、扣井鳥癡禿軒

門、乾某者、始通質來入座曰、吾破想氏劍客也、願與師鬪技、不勝而後為弟子、師許諾之、使甲第弟子鈴木氏某者試其技、鈴木氏卒【シ】惕伏、師怒髮衝冠、握袂躍進、先生從傍【幸】其裾諫曰、下走不敏、心已期師弟、雖盟未成、義不可勞吾師、不待諾相向、木刀一閃、乾忽倒、殆至氣絕、先生義勇類如此、聲價亦從是大起、柔術名士鳥取某自負其技、欲抗先生、則用組討法勝之、黑田某以劍有名、亦求鬪、先生用偃月刀勝之、敵若以短刀、則柔法勝之、騎而來、則自步勝之、品川三太夫者「以」俠奴有名、雖江都諸惡少年、或至遼巡云、未知先生為人、一日遇途、將侮先生、先生徒搏翻墜之於深徑中、觀者悉股栗、正德三年癸巳、攜家移于魔府、年三十二、賜年俸若干家居、於是、俊英諸子聞其名未信其能者、更來相挑、大凡鬪技二十餘度、先生一不「有」過失、角力奴浦響者稱有力、亦來窺技、先生掣兩腕、壓伏席上、是皆嗷々世人所知也、「而」先生無以挿意、常語人曰、勝敗無常者、兵家皆爾、幸一勝揚々驕人者、固非士君子道矣、門人風靡、自諸貴公子至右武庶士致數百千人、其

自得頌曰、無念無想天真正心裡、自然日月味、又曰、水

乎哉水、水外無味、享保十五年庚戌年四十九、疾眼少間

則坐禪人中聽之、一力一聲、過則自起指南之、後盲甚

矣、遂使甲第弟子道後生、門人倍多也、自號家鳴、若夫

古禮・軍禮、弓矢・甲冑儀法、天真雲弘二家之劍術及居

合・柔術・短刀・組討・偃月刀・直鎗・鎌棒諸法、門人

相傳穰々焉、先生以天和二年壬戌十二月二日生於武江

都、初姓二宮、名万作、祖内匠某、為江都田町守邸「賜」

十八人捧、考内匠宗重、初曰半右衛門、仕 陽和尊夫人

為内宰也、妣則「豊」臣秀頼卿臣後藤又兵衛基次者孫仙

九郎某女也、為其有名後故、幕府貴士石河藏人某養為

子、嫁之宗重焉、先生甫十三、加藤權兵衛清直妻其子

為後嗣、清直初長門萩人也、為 陽和尊夫人小内宰、仕

于吾藩、曾【肥後侯主計正清正裔】此如八字は【肥後侯主計正清正裔】曰云、寶曆十三癸未八月二十九日、

先生以疾死、享年八十二、諡獨笑軒一圓日學大居士、九

月壬戌朔、因梵儀葬于魔府妙頭寺、門人數百人會喪、乃

推子為誌銘、予不【俊】亦在心表等、義不可敢梓、慎銘、

精敏稚性 琢磨倍明【喪ノ末】【許カ】

會萃百氏 其技大成
門人景慕 刻石勒名

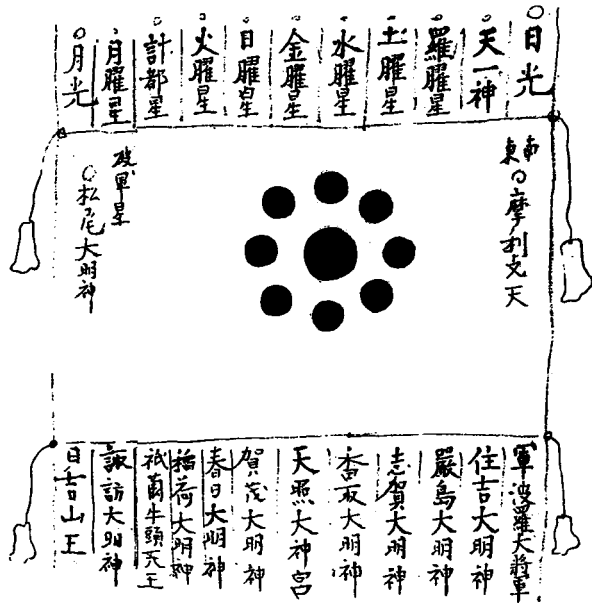
惟宗政公撰

(本記事ノフリガナハ朱書ナリ)

249の2

「于時文政十丁亥歲三月比、妙頭寺江差越致書寫候處、
細字ニ而所々不相知候、然リ其低致再寫置、同五月中
旬、或以本書不相知所ノ分ハ書入、致糺合置候事」

〔御自筆之寫〕
 奉寄附
 薩州加世田庄内之事
 合大浦名 長田の門



252の1

右、所志者、依法花萬部讀誦之儀、建立一字堂、安置
 地藏薩埵并石塔、永代不可違却之者也、
 天文廿三木虎年二月二日
 島津前相模入道日新御判

保泉寺

住持盤忠

衣鉢禪師

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二七二四号文書ト同一文書ナルベシ)

口上覺 写

高七拾六石六斗四升七合九勺貳才
 加世田 大浦村之内 長田門

右者、寺院高掛楮以前より上納不仰付事候得共、此節より諸殿役相勉候高之儀ハ、高懸定納楮被仰付、上納方之儀ハ御藏入定納楮半分以上納被仰付候旨、丑三月廿日木脇嘉左衛門殿御取次、御證文を以被仰渡候間、来寅春より楮植付、五年目ニ楮上納被仰付筈ニ候、楮植付之儀被仰渡候由、當寺領分右長田門百姓共より申出趣致承知候、

依之御訴ニ奉存候者、長田門之儀者、

日新公御存生之内日新寺へ被遊御寄附 御自筆之御書物有之、且又右長田門名頭居宅之内ニ御位牌迄被召建置、御支配等之砌茂御竿不被召入方限之地方ニ而、前々より格護仕罷在御菜園等仕、毎月御忌日・節句又ハ御弔等の時節、御野菜差上申事ニ御座候、右次第ニ而諸掛等御免被仰付置候哉、以前楮植付不被仰地方ニ而御座候、尤右高之内島高式石分之地ハ右之通御野菜差上来候間、以前より年貢等差免置候儀ニ御座候処、右通楮植付被仰付候而ハ、百姓共迷惑仕事ニ御座候間、此節之儀も、長田門之儀ハ何卒以前の通楮掛御免被仰付被下候様ニ御申可被下候、以上、

(延享二年)

丑八月四日

日新寺

鉄英印

加世田御曖衆中

御郡廻衆中

右之通、日新寺より御訴被申出候趣承届、別儀無御座候、

長田門之儀ハ段々御由緒も有之、以前より御竿等不被召

入方限地之儀ニ御座候間、願被申上候通、楮掛御免許被仰付置被下度奉存候、以上、

丑八月四日

加世田郡見廻

鮫島金右衛門印

右同

相徳次兵衛 印

右同

伊加倉與兵衛印

〔但

延享二年乙丑八月四日ニ而候、
後年為見合年号付朱書を以記
置也〕

御郡方

覚

高七拾六石六斗四升七合九勺貳才

加世田

日新寺

内田高六拾六石六斗九升四合七勺九才

島高九石九斗五升三合壹勺三才

右者、此節寺社方楮懸之儀ニ付被仰渡趣有之、相糺申候處、右高之儀、從

日新様御寄附ニ而、前々より御竿不入方限ニ而被渡置、上納楮御免ニ而、諸殿役ハ仕来候由申出候、然者一所一名持切ニ而、此跡楮掛無之場所茂、此節より半楮掛被仰

付候得共、右高之儀 日新様御寄附ニ而詔相替候ニ付、
以前之通上納楮御免被成候間、此段申渡、承知之首尾申
出候様可被申渡候、以上、

延享四年卯三月十八日

寺社奉行所印

「右之通候所へ申来候間、本書日新
寺へ格護可仕旨、暖來御方より被
仰越候、御文書箱ニ納置候事」

加世田

暖中

254 覚留

高七拾六石六斗四升七合九勺貳才

内田高六拾六石六斗九升四合七勺九才

島九石九斗五升三合老勺三才

右者、當寺領分大浦村長田門、從 日新公日新寺へ御寄

附高ニ而御座候処ニ、丑三月、右高楮掛被仰渡候付、其

段御訴申上候処、奉願候通此節御免許被仰付奉承知候、

此段首尾申上候、以上、

卯三月廿三日

日新寺鑑司川邊玉泉寺

義勇印

但「この卯三月廿三日へ延享四年」

寺社
御奉行所

255 右楮掛御免之願、鉄英和尚御代延享二乙丑八月四日ニ別

紙願書之通被申上候処、鉄英和尚御遷化之後、延享四年

丁卯三月十八日ニ寺社御奉行所より別紙之通御書付を以、

願之通楮掛御免許被仰付候間、鑑司川邊玉泉寺義勇和尚

より、承知之首尾寺社所へ被申上候、楮掛御免願老卷之

書付、日新寺御文書箱ニ相納置候、然共後年見合之為ニ

も可相成と存候ニ付、拙者より写を以願書之留一通、御

免被仰付候御書付の留一通、御免許之趣承知仕候首尾申

上候留一通、合三通の留、此節書写さし越候間、無緩疎

其方へ格護可被成候、以上、

延享四年丁卯四月十一日

日新寺代官
武左衛門印

大浦村長田門名頭

八左